

名作鑑賞『大津順吉』 再評価のために

細江 光

目次

はじめに 本稿の狙い

一、予備的考察

『大津順吉』のテーマ 草稿が「第三篇」と題された理由 原『大津順吉』 雑
誌掲載に伴う紙数の制約

所謂「断層」問題 二部構成の意図

『大津順吉』はどこまで事実の忠実か？ Cとの恋愛の場合

二、解釈と鑑賞の試み

『大津順吉』「第一」

() 序章(「第一」の(一)・(二))

() 「第一」の(三)

() 「第一」の(四)

() 「第一」の(五)

() 「第一」の(六)

() 「第一」の(七)

『大津順吉』「第二」

() 「第二」の(一)

() 「第二」の(二)

() 「第二」の(三)

() 「第二」の(四)(五)

() 「第二」の(六)

() 「第二」の(七)

() 「第二」の(八)

() 「第二」の(九)

(ア)八月二十三日(イ)八月二十四日(ウ)八月二十五日(エ)八月二十六日

(オ)八月二十七日

() 「第二」の(十)

(ア)八月二十八日(イ)八月二十九日(日中)

() 「第二」の(十一)

() 「第二」の(十二)

() 「第二」の(十三)

[注]

はじめに 本稿の狙い

『大津順吉』は、完璧ではないが、十分「傑作」と呼ぶに足る作品だと私は思っているのだが、残念ながら、その真価を理解している人は、研究者の間にも意外に少ないように感じられる。本稿の狙いの一つは、この傑作を、徹底的に、詳しく、深く掘り下げて読み直すこ

とで、再評価を促すことにある。

また、私見によれば、『大津順吉』には、若き日の志賀直哉が、作家として目指していた努力の方向性が、かなり透けて見える所があり、それを明らかに出来れば、志賀直哉という天才の理解に、大いに資する所があると思う。これが本稿の狙いの第二である。

なお、本稿では、本文は一九八四年に完結した岩波書店版全集（全十五巻と別巻）を使用し、一九九八年から刊行された岩波書店版全集は、「新全集」と略称することにする。また、引用する「手帳」は、特に断らない限り、「旧全集」の第8巻所収のものではなく、第15巻所収のImpressionsと題されているものである。未定稿の番号なども「旧全集」に従っている。

一、予備的考察

『大津順吉』のテーマ 草稿が「第三篇」と題された理由 原『大津順吉』 雑誌掲載に伴う紙数の制約

『大津順吉』については、解釈の中心となるべきテーマの理解についてさえも、須藤松雄氏・中村光夫氏らの自我貫徹、池内輝雄氏の姦淫、山崎正和氏の不機嫌など、評者によって諸説に分かれ、いまだ定説を見ないようである。

しかし私は、少なくとも志賀が考えていた第一のテーマは、一番分かりやすい常識的な場所に、即ち『大津順吉』の開巻劈頭に掲げられていると思う。即ち、《十七の夏、信徒になつて、二十過ぎた頃からは私には女に対する要求が段々強くなつて行つた。私は何となく偏屈になつた。其偏屈さが自分でも厭はしく、もつと自由な人間になりたいと云ふ要求を時々感ずるやうになつた。然しそんな事も私の信仰を変へる迄には其頃の私としてかなり長い時日と動機となるべき色々な事件とが必要だつたのである。》という一段落の中の、《もつと自由な人間になりたい》がそれであり、その具体的な現われとしてキリスト教からの離脱と女中Cをめぐる家族との対立が描かれたのだと思う。

しかし『大津順吉』は、奇妙なことに、劈頭の言葉とは裏腹に、実際には志賀直哉が《信仰を変へ》、内村鑑三にお別れの挨拶に行つた明治四十一年末に至ることなく終わってしまう。

また、『大津順吉』の終わり方は、女中Cとの事件を描くという意味でも変である。実際には、事件は《明治四十年八月三十日午前三時半》で終わった訳ではなく、この後も十月までは、志賀とその周辺に幾つも重要な動きがあり、志賀は家を出てCと住むべく、八王子まで家探しに行ったり、Cの家族に挨拶に行ったりしたが、その間にも次第に幻滅を感じ始め、取り敢えず結婚は先延ばしにして、Cに教養を付けさせるため裁縫女学校に入学させ、寄宿舎に入れた。この時点では、志賀は二～四年ほど考えて最終的な決断をするつもりだったようだが、結局、四十二年四月にCに別れ話を切り出し、恐らく九月頃に正式に関係を断った。女中C事件は、本来なら、ここまで描かねば完結しないはずなのである（実際、志賀は、未定稿補遺1『或る旅行記 青木と志賀と、及び其周囲。』（以下では『或る旅行記』と略記する）や『過去』では、簡略ながら事件を終わりまで書いている）。

志賀は、予告したキリスト教からの離脱および女中事件を、なぜ中途半端な所で打ち切つたのか？ その理由を、私は、次のように解釈したい。即ち、志賀直哉は、「大津順吉」という題名のもとに、当時、一大自伝長編小説群を構想しており、現在の『大津順吉』は、その一部というつもりで「中央公論」に掲載された言わば未完の断片だった という解釈である。

この様に解釈する理由の一つは、『大津順吉』の草稿が、不思議なことに「第三篇」と題

されている事実である（写真版で見ても、原稿用紙の端に迷いなく「第三篇」と題して書き始められている）。「ノート10」に書かれている『大津順吉』各章の内容概略などから、この「第三篇」一五〇枚が、「中央公論」掲載を睨んで、明治四十五年六月六日から書き始められ、二十日に一五〇枚に達した『大津順吉』の草稿であることは確実である。それならば、なぜこの草稿は「第三篇」と題されたのか。また、その一方で、明治四十五年六月六日の志賀日記には、なぜ《「大津順吉」の長篇にかゝる》とあって、「第三篇」にかかるとは書かれなかったのか。

私はこれを以下のように考える。志賀は、自分自身を「大津順吉」という名前で主人公とし、その誕生から順に生涯を追って行く自伝的長編連作をこの頃構想しており（以下この幻の長編連作を仮に原『大津順吉』と名付けることにする）、その内の誕生からキリスト教入信後暫くまで、言わば幼年時代・少年時代を『大津順吉』の「第一篇」「第二篇」として描き、キリスト教から次第に離脱して行く過程とその後の模索期（言わば青年時代）を『大津順吉』「第三篇」として書くつもりだったのではないか。或いは志賀は、トルストイの『幼年時代』『少年時代』『青年時代』を真似た自伝三部作を考え、その「第三篇」（恐らくは現行『大津順吉』よりもっと後の時期までを扱う長いもの）を『青年時代』に当たるものとして考えていたのかも知れない、と。これなら、志賀が『大津順吉』の草稿を「第三篇」と呼んでもおかしくないであろう（注1）。

証拠とまでは言えないかも知れないが、『大津順吉』執筆の一年余り前、明治四十四年二月十三日の志賀日記に、志賀が墓参りに行った所、先に行った義母が、死んで生まれた赤子の石の陰に、線香を隠して手向けているのを見付け、愉快に感じ、《此の事を、Cとの関係を主にした長篇の一部に入れやうと思つた。それは、今の昌子の生れた事に対するシニカルな見方を消す道具としてこれを用ひやうと思ふ。》と書いていることに、注意を促したい。何故なら、昌子の誕生は明治四十一年十一月十七日で、Cの事件の約一年後である。つまり、ここで言われている《Cとの関係を主にした長篇》は、『大津順吉』より、少なくとも一年以上後までをカバーする作品であり、《Cとの関係を主にした》という言い方が表わしているように、Cとの関係以外のことも、いろいろと含むような、正に自伝的な長編だったと推定できるからである。この日記の時点で、三部構成の原『大津順吉』の構想が纏まっていたかどうかは分からないが、『大津順吉』よりは大規模な自伝的長編小説が念頭に置かれていたことは確かと言える（注2）。

そもそも、「大津順吉」という主人公名は、「志賀」を滋賀県との連想から「大津」に変え、「直哉」を似た意味の「順吉」に変えただけのもので、自分を「志賀直哉」という本名で小説に登場させるのと大差はない。だからこそ志賀は、『大津順吉』発表後の他の自伝的・私小説的作品『鵜沼行』『和解』『蝕まれた友情』でも、順吉や大津として自分を登場させているのである。

しかし、これらの作品を、志賀が『大津順吉』と題することはなかった。それでは、主人公名だけでなく、作品名までも『大津順吉』（または『志賀直哉』等）とし得るのは、どんな場合だろうか？ それは、志賀直哉の生涯の中の相当に長い期間を扱う自伝的長編以外にはありえないだろう。であるならば、『大津順吉』という題名は、現行のそれのような比較的小規模な一つの作品だけの題ではなく、もっと大規模な自伝的大長編小説か、自伝的連作群の総題にする方が遙かに相応しい題名であり、志賀自身も最初はそのつもりだった可能性が高いのではないだろうか。

事実、『大津順吉』の後すぐに取り掛かった自伝的な長編小説・所謂「時任謙作」も、最初は主人公名を大津順吉として書き始められ、内容も、キリスト教を棄てた後の志賀が、さらに《もつと自由な人間に》なるために行なった模索をモデルにしたものであり、原『大津順吉』「第三篇」の最後の部分として書き始められた可能性が高いのである（注3）。

また、現在『暗夜行路』草稿1とされているものと、「ノート10」の〔ノート後より〕

にある《陸前石の巻住吉町に生れた》から《母の死と新しい母》に到る幼少時代についての年代順の覚書は、原『大津順吉』「第一篇」のためのメモである可能性があり（注4）、また『濁つた頭』草稿とされている主人公を大津姓で書いているものは、「第二篇」の草稿の一つかも知れない。後者はナンバーが69まであって、それを75と修正してあるので、或る程度長いものを書こうとしていたことが分かる。

『暗夜行路』はフィクションではあるが、その前篇・第二の三で、時任謙作が《自分の幼時から現在までの自伝的なものを書かうと》する背景には、大自伝小説群として原『大津順吉』を書こうとした事実があったのではないか。

なお、大正二年の『「留女」広告文』に、《彼は彼（自然）の中に眠つてゐる者を覚まして行くだらう。（中略）さうなつた時は此本は其第一篇の或る余り勝れない一章になるかも知れない。》とある。自己の内なるものが次第に目覚めて行く様を、順次、第一篇、第二篇として出して行くという発想は、自伝的長編連作・原『大津順吉』の構想と通底するものだと私には思える。

しかし、「第一篇」も「第二篇」も発表していないのに、「中央公論」にいきなり『大津順吉（第三篇）』という題で載せる訳にはいかないだろう。だから志賀は、六月二十日に草稿「第三篇」が百五十枚に達し、「全体の構造」を作ろうとした時には、「ノート10」に『大津順吉』という題で各章の内容を要約し、その後『大津順吉の或る一時代』という題名の候補をメモし、『大津順吉』「第一」の二回目の草稿を書き終えた六月二十八日の日記では、《「大津順吉の過去に」といふ題にした。》と書いたのであろう。「或る一時代」とか「過去に」を付けて限定した方が、原『大津順吉』の一部分でしかない「第三篇」の実態には即していたからであろう。それが結局『大津順吉』という題に落ち着いたのは、この方がすっきりした題であるからか、「中央公論」側の意向か、どちらかであろう（注5）。

『大津順吉』を「中央公論」に掲載したことは、題名に影響しただけでなく、むしろ内容の方に、さらに大きな影響を及ぼしたと推定できる。

と言うのは、当時「中央公論」で小説を連載した例はなかったし、志賀は「中央公論」へは初めての寄稿で、紙数を大幅に増やすよう要求することも出来にくかったであろう。『大津順吉』は、数えてみると、四百字詰原稿用紙で約百三十四枚分あるようだが、「中央公論」から支払われた原稿料は百円だったと言う（明治四十五年八月二十七日日記）から、もともと一枚一円または八十銭で百枚以内という約束だったため、オーバーした分は支払われなかったのではないか（注6）。

いずれにしても、志賀は、原『大津順吉』「第三篇」即ちキリスト教からの離脱の過程を、一度に「中央公論」に掲載することは、到底不可能だと知っていたはずである。だから、途中までも良いから書こうと考え、取り敢えず試しに草稿「第三篇」を書いて、何をどの辺りまでなら載せられそうか見積もってみた。その結果は、二百字詰・百五十枚、即ち四百字詰・七十五枚に達した時点でも、まだ千代との恋愛に到達していなかった。そこで、志賀はその時点で《「全体の構造」を作》（六月二十日の日記）って見て、抜くべき所などを決めたに違いない。その結果、一（輔仁会大会）・二（入信の経緯）、合わせて七千字以上をほぼ全文削除した他、ウィーラー・千代以外の女性たちとのエピソード（まき・西洋料理店の女給・箱根で知り合った女学校教師）をすべて取り止め、武者の登場シーンも一つ削って、千代のことを書く紙数を確保しようとしたのである。また、全体を二部に分かつことも、この時点で決めたい。「ノート10」の『大津順吉』内容メモの後に、《2nd part好きになる事か、》とあるのは、どこで二部に分けるかのアイデア・メモである。

志賀はこのようにして、完成形（以下、草稿「第三篇」を草稿と略記し、現行の『大津順吉』を完成形と表記する場合がある）の細かい内容、そして有島壬生馬に手紙を書く所までという終わり方も決めて行ったに違いない。そして、今回載せられない部分は、また別の機会に書き足せば良いと、その時には考えていたのであろう。

こうした作者側の裏の事情が、作品冒頭で《信仰を変へる迄》を書くようなことを謳って置きながら、キリスト教からの離脱も女中C事件も、書き切ることなく終わらせてしまうことに、志賀が平気でいられた原因と考えられる。

しかし、「それでは、『大津順吉』は、尻切れとんぼの断片で、完成作品として論じるに値しないものなのか？」と問われれば、私は「断じて否」と言いたい。『大津順吉』は、このままでも十分な価値を持つ見事な芸術作品なのである。それは、次の「所謂「断層」問題」の所で説明するように、志賀がこの作品の構成について、かなりよく考えて書いていることと、部分々々の表現の素晴らしさに依る。

一方でまた、仮に志賀が、女中C事件やキリスト教離脱の経緯を結末までたどれるように加筆した場合、『大津順吉』がもっと優れた芸術作品になるかと言えば、むしろ逆に、芸術性を損なうことにしかならないだろうと私は思う（志賀直哉もそう思ったからこそ、加筆しなかったのであろう）。扱われている事柄の内容的完結と、芸術的完成とは、全く別次元の問題なのである。

ただし、志賀が当時、原『大津順吉』「第一篇」「第二篇」そして『大津順吉』の続篇を書くつもりでいたことは、『大津順吉』の書き方に、一部迷いを生じさせ、多少、完成度を下げる結果になっている、と私は思う。『大津順吉』は、単独で読んでも理解できるように書いてあるが、例えば「第一」の（一）と（二）は、原『大津順吉』「第二篇」を書いた暁には、要らなくなる部分であろう。他にも、志賀直哉の明治三十九年九月以前の事実と言及した部分（「第一」の（三）と（四）の一部）や「第一」の（六）で自分が住んでいる「離れ」の説明をしている部分、「第二」の（九）で（ ）内で祖母と自分との関係を説明している部分、「第二」の（十二）で《私共》と周囲の大人たちとの関係を語った部分なども、要らなくなるかもしれない。そういう意識が働くために、これらの部分は、取り敢えず仮に書いて置くという感じになったのではないか。志賀直哉は発表直後、『大津順吉』のことを余り良く言っていない（『暗夜行路』草稿2の（四））が、こうしたことも、その一因かも知れないのである。

所謂「断層」問題 二部構成の意図

『大津順吉』については、須藤松雄氏が『志賀直哉の文学』で、《K.W.との恋ではあのような態度しか取れなかった順吉が、わずか半年の間に、千代とただちに肉体的にも結び付き、激怒して家人と抗争する順吉に変わりえた》理由が充分説明されていないとして、「第一」と「第二」の間に《断層めいたものを感じ》ると述べた事を切っ掛けとして、「第一」と「第二」の間にある所謂「断層」が、研究者の間でしばしば論議を呼んで来た（注7）。

実は須藤氏の疑問自体は、単純な誤解によるもので、志賀のつもりとしては、順吉が絹ウィーラーに対して全く消極的だったのは、結婚したいと思わなかったからであり、千代に対して積極的な態度を取ったのは、本当に結婚したいと思ったからである（この事は、草稿（八）の最初の方を読めば、明らかである）。仮に順吉がキリスト教を棄てた結果、千代に対して積極的になれたと言うのであれば、確かに信仰の変化が説明されていないという疑問が生じるが、順吉はキリスト教を棄てておらず、偶然、千代が女中として勤め始めた結果、結婚したい相手に巡り会っただけなのだから、説明の要もない訳である。

『大津順吉』冒頭にあるように、キリスト教は「妻にする決心のつかない女を決して恋するな」と命じているだけで、結婚を前提とした恋愛には、むしろ好意的なのである。さらに志賀は、結婚相手となら、挙式以前にセックスをすることさえも、神は許されるはずだと、当時考えていた（内村鑑三は認めなかったが）。

「第一」と「第二」の間には、従って、須藤氏が言う意味での内容的「断層」は存在して

いない。単に半年の時間的空白があるだけである。しかし、この二部構成については、なお一考の価値がある。と言うのは、草稿を書き始める段階では、まだ二部構成が考えられていなかったばかりでなく、志賀は、極めて重要なエピソードの一つ、明治三十九年十月三十一日に実際には行なわれた絹ウィーラー（稲プリングリー）のダンス・パーティーを、実際とは異なる四十年春に移すという操作まで施して、すべてのエピソードを明治四十年春（モデルとなったものは三月三日）の学習院輔仁会大会から切れ目無く順に並べようとしていたからである。

ところが、完成形では、絹ウィーラーのダンス・パーティーを事実通り三十九年秋に戻すことで、約半年の断層を生じさせ、それによって、アンバランスに短い「第一」と長い「第二」に分けるといふ道を選んでいる（注8）。

それは、事実通りに書こうとしたからではない。完成形でも、例えば《親しい友達の一人が近頃真理を恐れ始めた》というキリスト教的なモチーフ（モデルとなる黒木三次に対する不快は、明治四十年六月二十八日、三十日の日記と「手帳7」、明治四十年七月八日有島壬生馬宛書簡に出る）は、本来あるべき「第二」ではなく、「第一」の絹ウィーラーのダンス・パーティーの直前に移動させているからである。

そもそも志賀には、「自伝的な小説は事実通り書くべきだ」という考えがなかった。その事は、明治四十五年二月七日の日記の《「長篇」（注9）は事実を順序に書く事は無益であると思つた。掴むべき所を掴み。引き出して来て、寧ろアレンジして考へねばならぬ。》という一節によって、確かめられる。また、後年のものだが、インタビュー『大洞台にて』（昭和二十三年九月二十五日「読売ウイークリー」）で志賀は、「私小説」と「本格小説」について先生はどういう見解をもっていますか。と問われて、《そういうものを書く傾向が多いが、僕は別に「私小説」を主張しているのでも何んでもない。しかも「私小説」といっても、あったことを、その儘、丹念に書くものでもないね。》と答えている。

それでは、二部構成にした目的は何なのか？ 二つに分かれているという状態は、二つの間に両者を隔てる何らかの意味での断層・切断面があって、初めて可能になる事である。逆に言うなら、作者は、むしろそうした断層・切断面を作中に生じさせたいからこそ、わざわざ一つの作品を二部に分けるのである。では、『大津順吉』で志賀は、どういう意味で、断層・切断を必要としたのだろうか？

理由は幾つもあったであろうが、最大の理由は、「第一」がキリスト教への囚われを強調するパートだったため、弱い順吉でなければならなかったのに対して、「第二」では、千代との結婚をめぐる家族と闘わせねばならず、「第一」に比べて実際に強くなった訳ではないが、強気で積極的な順吉にする必要があったことであろう。

この順吉の変化に、須藤氏は違和感を感じられた訳であるが、実際にはこれは、同じ盾の両面なのである。キリスト教という思想を真理・正義と思うために、その性道德の窮屈な枠からはみ出しそうになる自分を弱者と感じて苦しむのが「第一」であり、キリスト教の正義に従っている強者として、正しい結婚を貫こうと闘うのが「第二」なのである。しかし「正しい結婚」に見えた千代との関係も、結局は正義感に災いされた若気の過ちであって、『大津順吉』の中での順吉の変化・進歩は芽生えの段階に止まり、後年、キリスト教を棄てた時に、初めて本当の変化・進歩が生じるのである。

二部構成にした理由の第二は、順吉が《もつと自由な人間》になるというメイン・テーマを実現する上で必要になる具体的なサブ・テーマを分類し、それらを二つの異なるパートでそれぞれ扱うことで、『大津順吉』のメイン・テーマを読者により分かりやすくすることだった、と私は思う。

即ち「第一」では、自由な人間になるための第一歩として、キリスト教の性道德に苦しめられ、その正しさを疑うというサブ・テーマが扱われている。これは「第一」の（二）で、恋を妨げている原因に挙げられていた《「境遇」と「思想」》の内の「思想」の方であり、

同じ箇所挙げられていた《「心」と「体」》の内では、「体」の方の問題なのである（注10）。志賀自身の体験として、女中Cより先に起こったブリンクリーとの関係が、「心」からの恋愛と言うより、外面的な美しさに惹かれたただけだった事が、「第一」で主に「思想」と「体」の問題を扱うことを選ばせたのである。

ただし、『大津順吉』では、キリスト教から来る「苦しみ」は強調されているが、「疑い」の方はまだ微かな萌芽に過ぎず、自覚的な対決と言うには程遠いものに終わる。それでも、この「疑い」と性をめぐる「体」の葛藤が、後に志賀がキリスト教を棄て、独自の人間観を打ち立てる上で大きな突破口になった訳であるから、この萌芽は、やはり重要な一步なのである。

「第二」では、自由な人間になるために、「第一」の（二）で言う「境遇」、即ち個人の自由を妨害している封建的な家族（ひいては社会）との葛藤が、サブ・テーマとして登場している（注11）。

ただし、家族との葛藤については、封建的なものは悪であるというような単純な問題としてではなく、志賀の家族との葛藤を反映した複雑で内面的な問題として扱われているため、『大津順吉』の作中では、十分な展開を見ないままに終わらざるを得なかったのである。

また、《「心」と「体」》の内では、「心」の方の問題が扱われている。「第二」のヒロインが順吉とは身分違いである女中・千代であること、千代が美人ではなかったことが、こうした選択に繋がったのである。

なお、「第一」「第二」を通じて、キリスト教に限らず一般に正義という「観念」への囚われを脱することと、身体性やイノセンスなどの回復がサブ・テーマとなっていると私は考えるが、これについては、後で詳しく述べる事にしたい。

志賀が、主要なサブ・テーマに従って、内容を二つのパートに或る程度振り分けようと試みていたことは、例えば、キリスト教の問題を、なるべく「第一」だけに集中させようと操作した痕跡があることから確認できる。

即ち、『大津順吉』執筆の直前に書いていた『或る旅行記』（五）では、Cとの事件当時、志賀が《考へとしても行為からいつてもかなり堅いキリスト信者であつた》ことを正直に書いているし、事実、毎週日曜日には内村鑑三の所へ通い、手帳にもキリスト教に関する内容をよく書いていたのに、『大津順吉』では、キリスト教の性道徳に苦しむ話を「第一」で中心的に扱った後、「第二」では、性欲に苦しむシーンは一切設けず（注12）、キリスト教という言葉や信仰を連想させる表現も全く使っていないのである（まだ信徒であることが確認できる表現も、《U先生の顔がいい》とか、角筈に枇杷を持って行くという程度しかない）。

また、《親しい友達の一人が近頃真理を恐れ始めた》というキリスト教的なモチーフは、モデルの事実から言えば本来あるべき「第二」に置かず、敢えて「第一」に移動させた。

その一方で、「封建的な家族との対決」は、「第一」の時期にもあつたはずなのに、それは一切取り上げなかった（父に自活を迫られたことは出るが、これは封建的な圧制としては意味付けられていない）。

また、「第二」では、「封建的な家族との対決」の一つとして、ウィーラーの電話を取り継がなかったというエピソードを入れているのだが、ウィーラーは「第二」ではもはや重要ではなく、千代をヒロインにするパートなのに、敢えて入れており、逆に「第一」でのウィーラーとの交際に対しては、家族の反対が全く描かれぬのである（この問題については、「二、解釈と鑑賞の試み」「第二」（ ）「第二」の（三）で、やや詳しく考察する）。

メイン・テーマ、サブ・テーマの明確化と並行する現象として、完成形では、構成についての作者の意識が、取り敢えず書いてみただけの草稿の時よりはるかに明確になっていることも（小説家として当然のことではあるが）指摘できる。

例えば、草稿では（四）で千代が絹ウィーラーの電話を取継ぎ、（七）では類似赤痢

の時に祖母が千代に足を揉んで貰えと言うなど、千代を早くから読者の前に出して置こうとする意図が感じられる。が、完成形では、「第一」での電話の取継は無名の女中に変更され、類似赤痢の時にも千代は全く出していない(注13)。そうすることで、「第一」と「第二」のヒロインをはっきり別にし、キリスト教の性道徳に苦しめられ、その正しさを疑うというサブ・テーマ、従って「体」の問題に相応しい絹ウィーラーのエピソードと、個人の自由を妨害している封建的な家族(ひいては社会)との葛藤、および「心(頭)」の問題に相応しい千代のエピソードを、明確に分離しようとしたのであろう。

ウィーラーは、草稿では、順吉がかなり恋愛的感情を抱いている対象として描かれていたが、完成形では、恋愛感情を殆ど消し去ることで、恋愛ではなくキリスト教のせい「開けない男」になったことが問題の「第一」と、恋愛結婚が問題になる「第二」のサブ・テーマの違いを明確にしようとしている。

ウィーラーは、完成形でも「第二」の(二)(三)に顔は出すが、それは、順吉が若い女と付き合う事を禁じようとする封建的家制度の例として出されているに過ぎない。また、「第二」の(六)で、順吉の日記に書かれる時には、千代とは違って結婚相手にはならない女として対比するために過ぎないのである。

同時に志賀は、草稿では取り上げていた「まき」(注14)と西洋料理屋の女給(注15)と箱根の宿で知り合った女のエピソードをカットすることで、順吉にとって初めての恋愛対象としての千代の存在感を、より強化しているのである。

完成形ではまた、冒頭「第一」の(一)に《もつと自由な人間になりたいと云ふ要求》云々という一節を設けて、メイン・テーマを明確に打ち出している。これに対して、草稿冒頭の乃木希典、新渡戸稲造、そして学習院の生徒たちに対する不快は、封建的なものとの戦いというメイン(またはサブ)テーマに関連するものではあろうが、テーマとして明確に分かりやすく説明したものにはなっていない(必ずしもわかりやすくすることが常に大切という訳ではないが)。恐らく草稿では(三)の《ゴルキーに出て来る強い自由な男に自分は惹きつけられた。(中略)教えに接する前三四年間の自由な生々した生活を恋しく思ふ事が多くなつた》という一節が、キリスト教からの解放というもう一つのメイン(またはサブ)テーマを表わすものだったと思われるが、構成がごちゃごちゃしているため分かりにくい。

完成形ではまた、同じ「第一」の(一)で、《「心」と「体」とが絶えず恋する者を捜しながら、「境遇」と「思想」とにさまたげられてある、その不調和が苦しくて／＼ならない》と、サブ・テーマを明確に繰り返す部分を作っているし、他にも、「第一」の(四)の《開けた人間で私になかつた》、《私には禁欲的な思想と、それから作られた第二の趣味と性質とがあつた》、「第一」の(五)《考へれば考へる程、私が(中略)「開けない男」である事が腹立たしくなつた。自分は何時の間にこんな男になつて了つたらう》と、サブ・テーマを繰り返し、分かりやすくしている。

なお、作品の結末は、作品のテーマを考える上で最も重要な手掛かりになる部分であるが、完成形末尾での順吉が、「第二」冒頭の籠の中の「あうむ」と意図的に結び付けられていることと、その前に出て来る《其時の現在に於て、(中略)私共は皆何かに狂つてゐる猪武者に過ぎなかつたであらう》という一節は、作者がこの作品で、主人公を「まだ自分の問題を解決できずにいる青年」として、また(最終的な敗北者としてではないが)取り敢えずは敗北者として提示するつもりだったことの、明らかな証拠と言える。

『大津順吉』はどこまで事実忠実か？ C どの恋愛の場合

『大津順吉』のように事実をモデルとした小説の場合、作中のどこまでが事実通りで、ど

こがどう変えられているかを調べなければ、作者の意図や工夫の実態を明確には出来ない。しかし、普通は、モデルとなった事実について詳細な記録が残らないため（文献を下敷きにして書かれる歴史小説などの場合は可能だが）、小説と事実との差異を確認することは難しい。ところが『大津順吉』の場合は、Cとの事件当時の手帳類が残されており、志賀自身も『大津順吉』執筆の際、その手帳類を参考にして書いているため、相当多くの箇所について、事実と小説の異同を確認することが可能なのである。そこで、この滅多にない好条件を最大限に活かすべく、以下しばらく事実と小説を比較・考察することを通じて、『大津順吉』はどの程度まで事実に忠実なのか大まかな見当をつけ、同時に、『大津順吉』で、志賀がどういう創作意図で事実を作り替えているのかも、大まかに考察してみたい。後の「二、解釈と鑑賞の試み」に回した方が分かりやすいものもあるので、それらはそちらで取り扱うことにし、ここでは専ら「第二」（六）以下で描かれている順吉と千代の恋愛についてのみ検討を試みることにする。

そもそも志賀は、『大津順吉』執筆当時、Cとの恋愛、そして当時の自分をどう考えていたのだろうか？ 『大津順吉』執筆の直前に書かれた『或る旅行記』（五）でも、事件から二十年後の大正十五年一月に発表された『過去』でも、志賀が最終的にCに幻滅して、自分の意志でCと別れたことははっきりしている。

それでは幻滅した原因は何か？ 『過去』は時期が離れ過ぎていて信憑性が低いので、執筆時期が早く、また、登場人物も実名のままの未定稿で、意図的な事実の改変が少ないと期待できる『或る旅行記』（五）によって考えると、幻滅の原因は主に、Cが《小学校を卒業したゞけの》教養のない、《恋の悲劇の女主人公になるには余りに気楽な女》だったことにある。志賀はその為、一旦結婚を延期して、自分の小遣いの一部で、Cを佐原の井上裁縫女学校（現・学校法人井上学園 千葉萌陽高等学校）に入学させ、一年半ほど寄宿舎に入れて教育しようとしたが、暫くしてCから来た写真の田舎臭さに我慢できず、破り捨てたし、Cが書いて寄越す手紙は、どれも幻滅の種にしかならなかったと言う（注16）。

しかし、当時は、一度でもセックスをした以上は結婚しなければ姦淫罪になると思っていたため、志賀がCに別れ話を持ち出すのは、明治四十一年末にキリスト教を棄てた後の、四十二年四月十三日（明治四十二年五月二十一～二十八日有島壬生馬宛書簡）で、多分、同年九月に《向ふの叔父との話も済むで別れる事にした》（『或る旅行記』）ようである（注17）。

ここに私見を加えるならば、間違いの元は、志賀・Cともに恋愛経験が殆ど無かったこと、身近に交際可能な若い異性が殆どいなかったこと（これらは当時は普通の事である）（注18）、志賀の方は、キリスト教のせいでも性欲を抑えきれずに苦しんでいた時だったこと、今後再び恋愛のチャンスがあるかどうか分からないと思っていたことも加わって、「好き（like）」や「セックスをしたい」というレベルだった相手を、「一生を共にすべき相手」と誤解してしまった事にあるのであろう。なまじCに惚れ込み、魂を奪はれるというような恋ではなかったことも、「冷静によく考えて決めたことだから大丈夫だ」という誤った自信に繋がったのであろう。また、家族の反対も、単純に身分違いを理由に暴力的に引き裂こうとする、封建的で不当極まりないものだったため、逆に屈服すれば正義に反してしまうという気持を強くさせる結果になったと思われる。

志賀はCとの婚約については、婚約の三日後、明治四十年八月二十五日に祖母の反対を受けて、早くも「二人の愛はまだ十分強くないから」《一先づ破約してもよい、》と「手帳9」に書いてはいたが、その夜、Cと肉体関係を生じてから暫くは、キリスト教の信仰もあって、家を出ることも辞さない姿勢で、頑強に意志を貫き通そうとした。しかし、祖母の病気もあって、『或る旅行記』によれば、九月二十四、五日に八王子で住む家を探した頃から、徐々に後悔が心の奥に兆し始め、十月二十四日には父に「結婚については二～四年、考えたい」という手紙を出して、延期を決めている。しかし『大津順吉』では、Cとの事件は

八月末までしか書かれていないため、順吉は熱烈な恋愛でないことは、はっきり意識しているが、後悔するにはまだ至っていない。その為、「志賀がこの恋愛を全面的に肯定してこの作品を書いている」という読みも生じかねないが、それが誤読であることは明白である。

それでは、志賀は事件から五年後、『大津順吉』を執筆する際には、この恋愛事件をどのように考え、どのような解釈で書こうとしていたのであろうか？ 既にCに幻滅して手を切っている以上、この恋愛を積極的に評価するということは、勿論あり得ない。大雑把に言えば、「若気の過ち」と考えていたであろう。しかし、それをさらに厳密に言うと、どのような意味づけで捉えようとしていたのか。

『或る旅行記』で見る限り、志賀は、自分がキリスト教的な「思想」に基づく正義感に囚われていたことが、事件の大きな原因だったと考えていたようである。従って、ここで予め結論を言うてしまうならば、『大津順吉』では、キリスト教から解放され《もつと自由な人間》になるというメイン・テーマのもとに、キリスト教のせいでは生じた誤った恋愛事件として、この事件を位置づけようとしていたと推定できるだろう。

『或る旅行記』（五）によれば、事件当時の志賀は《カナリ堅いキリスト信者で》《猛り狂つて騒いだ点は今の青木（注19）と殆ど変らなかつた。権利を主張し、理屈をいふ点では遙かに烈しかつた。》《彼は彼自身のアツフェヤーを総て正義の為めといふ考へからばかり考へてゐた。然しこれは彼の本然の要求ではなかつた》。《志賀が彼の事件に対してとつた態度は外見からはあくまで勇者の態度であつた。》《理屈に捕らはれて、何所までもガン古だつた》が、《彼の心は決してそんなに勇者でも傲慢なものでもなかつた》。実は武者小路実篤（彼もキリスト教の影響を受けていた）の影響が大きかつた（注20）。祖母に対しては？々、《僕のしやうといふ仕事は今の誤つた社会に反対して、正しくしやうといふのが目的なのですが、今若し、私が自家の人達に自分の全く認められない理屈で譲歩したとすれば私の仕事の立場はそれでなくなるやうなものなんです。宗教上からいつても罪人になるかならぬかといふ所なのです》（八月二十五日の「手帳9」もほぼ同じ）と説明していた。

《だから彼はどんな事をしててもCを捨てる事は出来なかつた。然しそれは何所までも理屈から彼の感情は》恐らく九月下旬頃からは次第に《Cのやうな女の為にそんな苦しみをするのが馬鹿々々しくなつてゐたのである。が、其感情もハツキリと（中略）頭に浮べるやうな事は当時の彼として逆も其賤しさに堪え得なかつたのである。》

即ち志賀は、キリスト教の信仰に基づき、互いをよく知り合つてする恋愛結婚が理想の結婚であること（これは七月十三日、八月五日の「手帳8」などから分かる）、身分・階級は人間の価値とは無関係であり、従つて身分・階級が違ふことを理由に結婚に反対するのは間違いであること（これは八月二十五日の「手帳9」から分かる）、などをはっきり信念とし、意識していたし、自らが女中と結婚することが、《今の誤つた社会》を正す《仕事》の一環ともなると考えていた為、途中で間違いに気付き始めても、なかなか結婚を取り止めるには出来なかつたのである。

『大津順吉』でははっきりしないが、先に引いた『或る旅行記』の中の祖母に語つた言葉からも分かるように、当時の志賀が思い描いていた《仕事》＝文学は、後年の志賀文学とは全く異なり、イブセンやゴーリキーのそれのような、内村鑑三的に社会を敵に回して正義の為に戦ふような類いのものだった（注21）。

イブセン・ゴーリキーの影響を偲ばせる資料を、二三挙げて置く。志賀は明治三十八年十二月の「ノート1」に、《余は、余の國を去らざるべからず、國を出で、余はかんそうせる露國に趣かん、ゴーリキーの食客たるを得ば、快事ならざるべからず》と書いている。また、明治三十七年六月以降、イブセンを研究し、三十九年五月二十二日の末永馨宛書簡に、《僕はイブセンやハウプトマンを読むで、自己に忠実ならん事を志してゐる》と書いたり、同年八月五日の「手帳4」に、竹本相玉の《太十の光秀を聞いて》《イブセンのブラント或、ジョン ガブリエル、ボークマンはこんな男ではあるまいか（中略）彼は当時の道徳に

反抗した（遂に破れはしたが）偉人である（中略）自己を侵害した春長から独立せんとしたのである》と高く評価したりしている。）

例えば、事件最中の明治四十年八月二十四日の「手帳9」では、結婚相手は自分と自分の仕事を信じてくれる女でなければならない理由を説明して、《余のなさんとする仕事は或る時は友にそむかれ、家族にそむかれ又国民の多数に迫害されるやうな時もなしとはせぬ、かやうな時に自分に最も近い妻が世間のものと同様に自分と自分の仕事を解さずにあたら其不快はどうであらう》と、書く程だったのである。『大津順吉』にも触れられている三十九年八月の未定稿20『（きさ子と真三）』は、正義の戦いの矛先を、内村鑑三にも向けようとしたものだったと言って良い。

志賀が、Cとの事件がほぼ一段落した明治四十年十月中頃から月末に掛けて、木下尚江の『火の柱』を読み、民友社の「十二文豪伝」シリーズのシェリー・エマーソン・ジョンソン・ユーゴー・バイロン・ゲーテを立て続けに読み、その後、カーライル・ラスキン・トルストイを扱ったM.A.Ward著『十九世紀の予言者』を読んでいるのも、正義の「思想」を世界に鼓吹する大文豪たらんとする願望ゆえであろう。

しかし、こうしたキリスト教的・「思想」的な正義志向から、志賀はこの後、急速に抜け出して行く。志賀が内村のもとへ通った確実な記録は、明治四十一年五月十日が最後であり、私の想像では、七月下旬、「暴矢」（のち「望野」）に参加した辺りからは行かなくなり、十月二十八日有島壬生馬宛書簡（注22）の後、年内に内村の所へ正式に訣別の挨拶に行ったのではないかと思う。それと歩調を合わせるように、文学についての考えも変化し、例えば明治四十一年十二月頃には、イプセンの話から、里見弴と議論をした際、志賀は社会問題・政治問題の解決の為に書かれた小説（正義のための文学）は、芸術を手段に使う事であり、真の芸術から見れば一段下がったものだと言言するようになっていたのである（里見弴『文芸の岐路（所感）』及び『君と私と』）。

こうして志賀は、ようやくバランスのとれた判断が出来るようになり、四十二年秋には、Cと別れるという正しい道を選ぶことが出来たのである。

しかし、志賀は、『大津順吉』では、こうした経緯をその通りに作中でなぞることはしなかった。それは、一つには、かつて信じていたキリスト教的な価値観も文学観も既に捨て、Cにも幻滅してしまった以上、当時の自分たちをそのまま再現することに、意味があるとは思えなかったからである。また、もし『大津順吉』で、志賀とCの恋愛を、正しい純愛として描くならば、志賀・C・武者が正義で、父・母・祖母らが正義に反対する悪役という単純な図式になってしまい、『大津順吉』は文学としての価値を持ち得ないからでもある。

そこで志賀は、実際には九月以降に起こる幻滅・後悔を言わば前倒しし、「順吉は、そもそもの最初から千代に対する愛に（無意識の警告である）不安を感じ、躊躇していたにもかかわらず、キリスト教的正義感など、「頭」中心の生き方に災いされて、誤った結婚に突っ走ってしまった」という設定にし、この設定に合うように事実を改変して書いたのである。そうする事で、先にも述べたように、キリスト教からの解放というメイン・テーマのもとに、この事件を明確に位置づけようとした、と私は考えている。

以下では、具体的に作中での描写を実際に辿りつつ、「手帳」から分かる志賀の実際とも必要に応じて比較を試みながら、私のこの結論が合っているかどうか、検証してみようと思う。

まず、大きな枠組みとしての、「誤った結婚の大きな原因は、正義感に駆られた事にある」という考えは、『大津順吉』では、「第二」の（八）の箱根の場面で、次のような形で明確に打ち出されている。

《私は函根で考へた。が、それは狭苦しい中で、どう／＼廻りをしてあるやうな考へ方であつた。小さな帳面に千代の事をCとして、私は色々な事を書いてみた。要するに私の躊躇は千代がそれ程美しくない事、及び千代の家が社会的に低い階級にあると云ふ事などから来て

みると云ふ風に、寧ろそれは脅迫観念的にさう考へられた。私は私の虚栄心を殺す事が出来ればそれで此問題は片がつくのだと考へた。》

また、この考えによって帰京後、愛を告白する際、結婚の事は言わずに千代の気持を確かめようとする自分の《ずるい態度》が《みにくくてノヽ堪はなくなつて》、いつの間にか結婚を申し込んだ形になってしまうという展開においても、やはり潔癖すぎる正義感が原因になったとしているのである。

これとほぼ同じ事は、後年の『過去』にも書かれている。即ち、《千代は田舎の左官の娘で、教養もなく、容貌も決して美しいとは云へなかつた。そんな点で、私は愛しながらも迷つてゐたが、仕舞に迷ふ自分に嫌悪を感じ、迷ふのは愛する気持が不純なのだといふ事は結婚の申出になつてゐた》。

しかし私は、これらは、先に述べた方針に基づく意図的な作り事であると思う（『過去』の場合は、志賀自身、『大津順吉』の方が実際だったように、いつの間にか錯覚していた可能性も大いに考えられる）。何故なら、志賀は、Cが美しくないという事や知識・教養の差は確かに多少気にしていたが、「手帳」では、懸念よりもそれを打ち消し、結婚しようという気持の方が、一貫して遥かに強いからである。また、貧富の差・家柄の差を気にして、それを理由に結婚をためらうという趣旨の記述は、「手帳」には一箇所もなく、従って、そういう理由で迷う自分に嫌悪を感じるという記述も、当然のことながら無いからである（七月十一日の項に自己嫌悪と読める記述があるが、これについては、次に問題にする）。

それに、そもそも内村鑑三の忠実な弟子だった当時の志賀が、階級差や貧富の差を気にするということが、本当にありえたであろうか？

完成形では意図的に伏せられているが、草稿の（八）には、この頃の順吉が《富を呪》い、汽車は三等車にしか乗らず、人力車にも何ヶ月も乗らず、小遣いは、芸術研究のために全額丸善での買い物に使い、大学卒業後は田舎の貧しい中学教師になるつもりで、そうした価値観から、ウィーラーとは相容れないと思つたことが書かれていたし、『或る旅行記』にも、この頃の志賀が、武者のトルストイズムの影響で、益々ひどく《富を的てにする仕事を悪く》んだことが書かれている。

また、『大津順吉』には出て来ないが、八月二十四日に祖母から結婚に反対された時、「手帳9」によれば、志賀は《平民の女と結婚したがために志賀家の血統が汚されるといふのなら志賀家を捨て、少しも差し支えない、といつた》。また、「手帳9」九月十五日（回想）によれば、九月九日に、父から《Cを捨てればよしさなくば家を追ふ》と言われて《家を出る事にする》とある（注23）。大金持だった志賀家の財産を捨てても良いと考えるような人間が、貧乏人との結婚を厭うということは、考えられないだろう（注24）。

『大津順吉』には、「第二」の（六）など、志賀が事件当時の「手帳」を自ら引用している例がある。志賀が「手帳」を読み返して見て、なおかつ僅か五年前の自分の気持を正しく想い出せず、全く誤解して気付かないということは考えられない。従って、これは意図的な改変と解すべきだと思つるのである。

例えば、志賀が残した記録で、Cへの愛を最初に記したものは「手帳7」の七月七日の項で、Cは「小学校しか出てないために趣味を解する機会を持った事のない女だ」と書きつ、その《Cを余は愛してゐる（中略）余の愛が尚一年も不変にして（中略）其上、若し彼が余を思ひ、他に約束した人もないならば余は彼を妻としてもよい（中略）彼を愛するならば益々自ら聖く、これに対さねばならぬ》と、結婚に向けて積極的である。しかし、この日の記事は（三時間顔を見ないと淋しいという事以外は）『大津順吉』には使われなかつた。

次にCのことを書いた七月十一日の項では、『大津順吉』「第二」の（六）に引用されている通り、自分に《愛を云ひ表すだけの勇気がない》ことを批判し、それを《悪い意味で》の《利口》さと捉えている。これは一見、「迷ふのは不純だ」という脅迫観念から愛を告白し

た」という『大津順吉』や『過去』と一致するかのようである。が、実際には、「手帳7」では、『大津順吉』に引用された《自分は何も云ふまい(中略)眼で彼を追ふまい》云々に続く部分で、《いけないと思ひつゝ、今余はやめたくない、多分明朝もやめないだらう》と愛の強さの方が勝っているし、その後の部分で《Cと結婚する堅い決心のつくまでは決して己が愛を彼にあかしてはならぬ、》と思いつつ、《(実はいやであるが)》と愛を明かしたくて仕方がないことが告白されている。つまり、「手帳7」の実際のニュアンスは、『大津順吉』の箱根の場面のように、「勇気がなく尻込みする自分を自己嫌悪し、無理矢理、尻を叩いて積極的に結婚に進ませようとする」というニュアンスではなく、「結婚に進みたがっている自分に対して一生懸命手綱を引いて引き留めようとしている自分もいるが、結婚に進もうとする力の方が強くて引きずられる」というニュアンスなのである。同じ「手帳」からほぼ正確に引用していても、省略の仕方によって、ニュアンスは正反対にもなる。志賀がこれを意図的にやっていることは、他の例をも検証することで、次第に明らかになる筈である。

次にCのことを書いた七月十五日の「手帳8」では、結婚相手として《低い生活を送つて来た、高き女を望むのである。》と、寧ろ経済的に貧しい階級出身の女性との結婚を望んでいる(注25)。勿論Cを念頭に置いてである。そして、結婚の条件を列挙した中で、《其人の(中略)無学と病氣 生家の如何とは総て許す決心である》と書いている。《生家の如何》とは家柄のことである。七月十七日の「手帳8」には、(十五日に)Cとお互いにもっとよく知り合うために友達になってくれと申し入れた際、《Cは私見たやうな賤しいものを友達なんて、と笑つて了つたが、余は賤しいのではない。と云つて聴かした》とある。七月二十二日には、《キリストの教は愛であつて理屈ではない、(中略)余はCを愛して初めて雇女に同情をひき起こした、(中略)ア、今の金満家にして若しも貧民窟の一少女に恋しをするならば、此男は初めて美しい同情を貧民に起すであらう、これはヒキンな恋の例であるが恋でなくて真の不偏なる愛を持つ時には人は憐れなる者を知らず顔に過せぬものである、(中略)人を愛する事の出来るやうになれば其人は聖人になつたのである、(中略)愛の泉からはこん／＼として総ての善事善行わき出るべし、(中略)神は愛なり》と書かれている(これは志賀が当時、かなり熱心なキリスト教徒であったことの証拠ともなる文章である)。こういう発想を持つ人間が、身分違い・貧富の差を理由に結婚をためらうとは考えられない。

『大津順吉』「第二」の(六)には、七月二十二・二十八日の「手帳8」を踏まえた記述が七月二十日の日記として使われていて、その後半に、千代が家族に愛されて育ったことを聞いて、《一寸異様な感じがした》と書かれている。しかし、七月二十八日の「手帳8」や、八月二十四日にそれまでの事を振り返って書かれた「手帳9」にも、《異様な感じがした》に当たるような感想はない。ただ《奉公人といふと(中略)車夫や下男と同じやうなきやう遇で流れ込むで来るやうに思つた》(「手帳8」)のがそうでないと知って、非常に好感を持ったことが分かるだけである。『大津順吉』では、順吉と千代との生まれ・育ちの違いを強調しようとして、わざと《一寸異様な感じがした》という言い方にしたのであろう(「二、解釈と鑑賞の試み」「第二」()「第二」の(六)も参照されたい)。

また、七月二十八日の「手帳8」には、Cの家庭のことを聞いて、《Cは美しい家庭を持つた娘である、(中略)家が左官の親方であるのが何んとなん心持がよい、モウ一年も話していよ／＼自分の心が動かず、Cも自分を愛してくれるならば余は彼と約束しやう》とある。《左官の親方であるのが》なぜ《心持がよい》のかは、八月二十五日の「手帳9」の次の一節によって解ける。《社会上の地位は何ンである、人類の王はナザレの大工の子ではなかつたか、それに比するのでは勿論ないが左官の娘と結婚して何が悪いのだ》。キリスト教徒だった時の志賀は、キリストが大工の子だったことに引っ掛けて、左官の娘と結婚することを誇る気持すらあり得たのである。志賀は、身分差・貧富の差を超えて結婚することに虚

栄に近い誇りは持ったかも知れないが、身分差・貧富の差を厭う気持は、（九月以降になってCに幻滅し始めるまでは）全くなかったと見て良い（注26）。

この後『大津順吉』では、先に引いたように、箱根で散々結婚をためらった事になっているのだが（注27）、実際の「手帳8・9」には、そういう記述は殆どなく、八月五日には、《真面目な青年は（中略）彼等の家族と異つて階級について自由な考へを持つてゐる》から《maidと結婚する（中略）傾向が追々出て来るだらう》と、女中との結婚に対して肯定的な考えを書き、八月六日には、（『大津順吉』では触れられていないが）《自分は今、愛するCの顔が亡き母に何所か似てゐるやうに思はれて来た》と書き、八月十日、十一日、十四日と繰り返して、「Cに結婚を申し込もう」という決意を書いている。

ただ、唯一の例外として、帰京二日前の八月十八日の夕方から夜にかけての「手帳9」にのみ、結婚に対する不安が見られる。即ち、志賀は二子山に登って降りて来た後、夕暮れに山の麓から見た《荒涼たる》《景色の中に恋人を思ひ友を思ひ将来を思ひ、人の世を思》い、この《荒涼たる景色は（中略）人の世に似たる哉（中略）風は寒し、人の世は荒し》という感想を記し、さらに《恋は苦しいものである》とか、《余は（中略）意志は弱い》とか、自分は眠りから覚めて居ながら起き上がれない《最も不幸なるものである》とか、「Cとの知識の懸隔が大き過ぎるのは危険だから、結婚するなら智識を得させなければならない。が、Cが余と余の考えを尊敬して聞く気さえあれば、二人の結婚は幸福であるのだが...」とか、「独りで生きたい」「余等を終生苦しめるのは旧思想だ」「自分は自分ばかりを愛して人々を愛せないから苛々するのだ」等と、突然、暗い考えが書き並べられている。しかし、八月二十四日に婚約後、それまでの事を最初から順に振り返って書いた「手帳9」の記述では、最初の内、慎重だったことは書かれているが、途中で結婚を止めようと考えた時期があった様子は一切ない。

この八月十八日の「手帳9」は、私の印象では、《人の世》の厳しさ、《旧思想》と戦ふことの大変さ（例えば、身分違いの結婚に対して予想される反対・迫害・嘲笑。また、先に紹介したようなイプセン流文学者としての自分が世の中から受けるであろう攻撃）を主に考えていて、その時にCが自分にとって力強い味方になれるかどうかや、父や祖母との軋轢に自分が耐えられるかどうか、自分が断固、家を出て自活できるかどうか、などを不安に思ったのではないかと、という気がする。しかし、これらは飽くまでも或る一夜の想念に過ぎず、その影響力が小さかったことは、この後、結婚に突き進んで行った事実が証明している。

なお、志賀はこの翌朝《午前六時》に《昨夕立つた二子山の麓に》（「手帳9」八月十九日の項）までわざわざ出掛けて、日の出の光景を見た。それは、昨夜の暗い想念を打ち消す為だったのではないだろうか。また、十九日のメモには、《今日風呂で風呂の湯をたゞいて見た、力を入れれば入れる程抵抗がひどく そつとすればする程抵抗が少ない》とあるが、これも、《人の世》・《旧思想》・家族との戦い方を念頭に置いて書いたものだったのではないかと思う。

話は前後するが、八月十四日の「手帳8」（そして八月二十四日の「手帳9」）には、ツルゲーネフの『片恋』の《（前略）こんな事は未だ幾らもある事だ、まだノノ之よりも嬉しい面白い事もあらう.....と思つた。》という部分を引用して、感想が書かれていた。ところが、『大津順吉』「第二」の（八）にこれを使用する際には、そもそも二葉亭の翻訳には無く、従つてこの「手帳8・9」にも勿論無かつた、《然し遂に来なかつた》という脅迫的な響きを持つ一句が最後に付け加えられ、順吉がこれを《運命の暗示》として強く受け止め、《これを進まずに避けるならば、それは（中略）臆病者の行である。》と、脅迫観念的に受け取ったように書かれている。

「手帳9」（八月十四日）にも、多少これと似た、《此際結婚を迷ふのは思慮あるといふ》より《臆病なる心からのシリゴミと見られる》から《余は断然帰京してCに己が心を打明けやう》という一句は確かにある。しかし、こちらは脅迫されて躊躇しながら前に進むと

いうニュアンスではなく、結婚したいという元々の考えに援軍を得て勇み立つというニュアンスである。

また、八月二十四日にそれまでの事を振り返って書いた「手帳9」の記述でも、『片恋』を読んで考えた事は、《今度の機会が二度とない機会かどうかはそれはワカラナイ（中略）然しこんな機会はいくらもあると思ふのはそれは誤りである、だから余は此よき機会に出来るだけ注意深く、此問題をとりあつかつて而して若しも、Cが余を愛してくれ尚解してくれたら、約束をしやう、今余がそれを避けるのは、思慮ある仕方といふより、臆病な重荷を背負ふ事を恐れる者の仕方であると思つた》というもので、少しも脅迫観念的ではなく、冷静に熟慮した上で、自分の希望通り、結婚に向かつて一步を進めようと判断した、というニュアンスになっているのである（注28）。

また、『大津順吉』「第二」の（八）では、八月二十日に箱根から帰京した時点での心境として、《若し千代に約束した人とか好きな人とかがあれば自分は一も二もなく念ひ断つて了はうと思つた。私は千代にさういふ人があつてくれればよいと思ふ心さへあり得たと思ふ。若し千代に許婚があると云ふ事であつたら、私は失望しながら喜んだかも知れなかつた。》と書いてあり、これは明らかにまだ箱根にいた時の八月十四日の「手帳8」に基づくものである。

しかし、「手帳8」の方では先ず、《余は断然帰京してCに己が心を打ち明けよう（中略）而して若しいやだといつたらその理由を聞かしてもらはう、余は左の理由の場合には断然彼を思ひ切る、》という前置きがあつて、その後に『大津順吉』に引用された箇所が来るのだが、それも、《Cが前より恋してゐる男があつてそれと約束があると、或は心から余を愛してゐないとかの如き全然相入れざる理由ある時にはそれは余は苦痛を堪えて彼を思ひ切るであらう、》となつており、《苦痛を堪えて》思い切るとは言つても、「千代にさういふ人があつてくれればよい云々」とか「その方が喜ぶ云々」などとは何処にも書かれていないのである。

また、「手帳8」の方では、右に続けて、《然し世間を恐れる事或は親の意志等を恐れるよりして余が願を入れざる時には（注29）、余は言葉をつくしてその誤りなるをいふであらう、》とあり、Cが「愛していない」と言うなら思い切るが、身分違いを心配して断ろうとするなら、言葉を尽くして説得しよう、と言つていたのである。そして、このメモの最後は、《若し彼が余の妻になる事を喜むでくれたら余はどんなに嬉しいだらう》と締め括られているのである。志賀は、このメモの全文に眼を通した筈である。にもかかわらず、敢えて、意味をすり替えて使つていたのである。

『大津順吉』「第二」の（八）では、八月二十日に帰京後も《未だ私には堅い決心が出来てゐなかつた》として、《帳面に「若し此決心が一年、変らなかつたら」とか「結婚するにしても今のCには二三年間の学校教育が必要である」こんな事を書いてみた。》とあるが、八月二十日から愛を告白する二十二日までの間や、それ以降の「手帳」には、これに該当する記述は全くない。「若し此決心が一年、変らなかつたら」に当たる記述は「手帳7・8」にあるが、それは恋愛を自覚し始めたばかりの頃の、七月七日と二十八日のものである。そして「手帳9」の九月十五日に帰京後のことを振り返つた部分（以下、「九月十五日（回想）」と略記する）では、《八月二十日、 芦の湯より帰る、段々お前を深く思ふやうになつた、》となつてゐる。

こうして、愈々Cと婚約する八月二十二日がやって来る訳だが、『大津順吉』では、《私は何にしる千代が私をどう思つてゐるかをはつきり知らずこんな事を考へてゐても仕方がないといふ気がした》ため、《結婚の事は一ト言も云はずに千代がどう自分を思ふかを尋ねようといふつもりであつた》。そして《千代に許婚があると云ふ事であつたら、私は失望しながら喜んだかも知れなかつた。》と書かれてゐる。

念のために確認して置くが、『大津順吉』では、順吉と千代が、用事などで短く言葉を交

わす場面ならば、「第二」の（一）以降、殆どの章にあるし、「第二」の（六）で引用されている七月二十日の日記には、千代と話をして家族のことを聞いたという記述がある。しかし、それらはちょっとした雑談・立ち話以上のものとは考えにくく、長時間、二人っきりで、心を開いて話をしたことは、この愛の告白以前には一度もなかったと見て良い。順吉が、「千代は自分を好いてくれている」と判断しうる根拠も、僅かに一つしか挙げられておらず、それは（六）の七月十一日の日記の《彼も自分の傍で用をする事を好むやうである。》という一句である。が、これも順吉の主観的な印象に過ぎず、余り頼りにはならないだろう。この（六）には、湯殿の小窓を通して千代と順吉の目が合うと、《千代はいつでも怒つたやうな可恐い眼つきをして私の方を見てゐた。》ともあり、本当に好かれているのかどうか疑わしくなるのである（私見では、志賀は事実反して、わざと好かれているとは思えないように書いているのだと思う。詳しくは「二、解釈と鑑賞の試み」（ ）「第二」の（六）参照）。こうした経緯を前提にすれば、帰京後も《堅い決心が出来てゐなかつた》り、《千代が私をどう思つてゐるかをはつきり知らずこんな事を考へてゐても仕方がない》と順吉が思うことは、極めて当然であり、「振られた方が却ってすっきりする」と思う気持ちも理解できる。また、この程度の段階で一気に婚約まで進んでしまうこの後の展開は、全く無謀であり、不幸な結果に終わることが予感されるのである。

一方、現実の志賀は、七月十五日にCと友達になる約束をした時を含めて、手帳に記録があるものだけで三回は長話をしており、箱根に出発する前日・八月三日にはCの写真を貰つて出発し、箱根で一度Cから手紙が来て、返事も出した（これらは『大津順吉』には出て来ないが）。結婚については、七月七日以来、繰り返し、しかも常に前向きに考えて来た。

また、志賀は、七月七日の「手帳7」の時点で既に《Cも余を愛してゐるやうである》という感触を持っていた。七月十一日には、《彼の眼と余の眼は日に幾度会つて、口づけするかよ》と書いている。まさに「眼は口ほどにものを言う」である。また、『大津順吉』「第二」の（八）では、順吉が「千代を箱根に連れて行かないことになった」と告げた時、《千代は只笑つていた》事になっているが、実際は、箱根へ出発する時が近付くと、Cは《皆さんにゐなくなれるのが何むだか悲し》（「手帳8」八月二日の項）いと志賀に訴え、志賀は《Cの元気のないのは自分へ対してのものであらう》（即ち愛する志賀に会えなくなるからだろう）と解釈して喜んでゐる。そして八月十一日には《余は断然Cと結婚しやう（中略）彼は多分余を恋しては居ないかも知れぬ、然し好きである筈だ》と書いている。だから、八月二十二日にCに結婚を申し込むことになつても、唐突な飛躍という感じは全く受けないのである。

こうした違いをよく頭に入れて、次に、婚約の際の『大津順吉』に描かれた順吉と、八月二十四日の「手帳9」に描かれた実際の志賀とを比較して見よう。

『大津順吉』では、先ず、順吉が《千代を部屋に呼んで、自分が愛してゐるといふ事を話した。然し決して熱烈な愛といふ程度のものではないといふ事も話した。》とある。志賀の「手帳9」も、ここまではほぼ同じである。しかし、順吉が話らしい話をするために千代を部屋に呼んだのはこの日が初めてで（注30）、「友達」にもなっていないから、二人は主人側と雇人という身分的關係を変へることなく向かい合っている。即ち《私は縁側へよつた隅の机に背をつけてゐた》のに対して、《千代は次の四畳半から敷居を越した所にかしこまつて坐つてゐた》のである。『大津順吉』では、千代や妹が順吉にお茶や食事を告げに来る時に、千代は階段を登り切った所から膝を突いて、妹は隣の四畳半から手を突いて声を掛けてゐる（「第二」の（一）と（五））。後で《村井のおかみさん》が階段を登りかけただけでも、順吉は《何だつて貴様は無遠慮に乃公の部屋に入らうとした》と激怒するのである。そうした身分關係を反映しているため、この場面でも千代は、辛うじて同じ部屋に入っていると云つても、敷居を僅かに越しただけで、女中としてかしこまった態度のままであり、縁側寄りの隅の机の前に座っている順吉とは、空間的にもかなり距離がある感じがする。愛は

本来、両者が対等な立場でなければうまく行かないものである。二人が愛と結婚について語り合う状況を志賀がこの様に設定したのは、順吉の観念が空回りし、二人がちくはぐなまま結婚に向かって事が進み、結局、破綻する結末を読者にはっきり予感させるためである。

それに対して、実際の志賀が話をするためにCを部屋に呼んだのは、この時が（少なく見ても）四回目で、毎回「友達」として対等の立場で長話をしていた。だからこの時も、本当は主人側と雇人という関係で向かい合っては居なかった筈だし、Cもかしこまっては居なかったであろう。もっとも、実際の志賀とCとの婚約も観念的で、最後は破綻した訳ではあるが、私は『大津順吉』の《千代は次の四畳半から敷居を越した所にかしこまつて坐つてみた。》という設定は、全くのフィクションだろうと思う。

次に、《決して熱烈な愛といふ程度のものではないといふ事》についてだが、これは志賀の「手帳9」にも、確かにそう書いてある。が、『大津順吉』で「熱烈な愛ではない」というのは、煮え切らない、プスプス燻っているような「頭」中心の恋愛で、本当に好き合っていると言えるのかもはっきりしないという事で、順吉が（九）で重見（武者小路実篤）に《ちつとも熱烈でないから（中略）不愉快で仕方がない》と言うように、順吉自身にとってもかなり不愉快な状況として捉えられている。

それに対して、八月十四日の「手帳8」（八月二十四日の「手帳9」はそれを書き写しながら少し変えただけなので、ここは十四日の方を挙げると）に志賀が書いているのは、《余がCに対する恋は、Cの姿容の美に全く魂を奪はれてゐるといふやうなものではない、即ち熱烈なる恋といふべきものではない ジリノゝと根強くいとしく思ふやうな愛である、従つて余の心には充分の余裕があるつもりである、二人の未来といふ事等に関して考へるだけの事は稍や明確なる心を以て出来る》ということ、志賀としては、冷静さを失っていないという、寧ろプラスの意味で使っていた言葉なのである。志賀はその事を百も承知の上で、『大津順吉』では、わざと通常の悪い意味にすり替えて使っているのである（注31）。

次に『大津順吉』の《私は結婚の事は一ト言も云はずに千代がどう自分を思ふかを尋ねようといふつもりであつた。私はまはりくどい、自分でもよく分らない事を切りにいつてゐる。それが、自分の思つてゐることはすつかり云はずに先方の思つてゐることをすつかり聴かうといふ様なずるい態度であつた。その内に自分でもそれがみにくくてノゝ堪はなくなつてきた。》という一節についてである。

先に順吉は、箱根で千代との結婚について考えようとした時、《狭苦しい中で、どうノゝ廻りをしてゐるやうな》状態に陥ってしまった、とあつたが、《どうノゝ廻り》とは、一つの中心点の周りをぐるぐる回り続けるだけで、何処へも進めない、脱出も出来ない不愉快な状態である。もちろん、この場合の中心点は「千代との結婚」である。順吉には千代との結婚への求心力となる千代への愛や、セックス・結婚への憧れと欲望も強くあるが、間違つた相手と結婚しても一生離婚できないと考えているために、相手を選び間違えることへの恐怖心・警戒心（遠心力）も非常に強く、また千代は常識的には人から羨まれるような相手ではないだけに、結婚したくない気持も強かつたのである。

箱根では順吉は、遠心力（結婚を躊躇させるもの）は《千代がそれ程美しくない事、及び千代の家が社会的に低い階級にあると云ふ事》だけであると無理に決め込み、それは間違つた《虚栄心》だとすることと、『片恋』からの暗示とで、中心点＝千代との結婚へ向かつて突き進むべきだと結論する。が、頭ではそう結論しても、帰京後もなお心は迷い続けている状態だったので、《千代が私をどう思つてゐるかはつきり知》ることで、求心力か遠心力かどちらかを強めるような新たな材料を得て、均衡を破つて、不愉快などちつかずの状態を早く終わらせたい、と考えたのであろう。

順吉がここで《結婚の事は一ト言も云は》ないようにしようと考えたのは、「千代との結婚」を恐れる気持から、必要以上に警戒し、話題にすらしないようにするつもりだった、と

いうことであろう。そして、結婚とは切り離して、千代に順吉に対する恋愛感情が有るか無いかだけを言わせようとした。千代に許嫁があるかどうか、結婚問題に触れるため、敢えて訊こうとはしなかった。ということであろう。

しかし、その結果は、《私はまはりくどい、自分でもよく分らない事を切りにいつてゐる。それが、自分の思つてゐることはすつかり云はずに先方の思つてゐることをすつかり聴かうといふ様なずるい態度であつた。その内に自分でもそれがみにくくて、\、堪はなくなつてきた。》となる。《まはりくどい、自分でもよく分らない事》とは、具体的にはどんな事なのか、はっきり決めたいが、大事なポイントは、これが箱根で体験した《どう、\、廻り》の不愉快さの再現になっていることであろう。順吉と千代との会話が《どう、\、廻り》になってしまう原因は、一番問題にすべき中心点、即ち結婚問題を、順吉は戦略的に避けようとし、千代は無理なことだと諦めているため触れようとしなないことにあつたのであろう。そしてそれを順吉は、ちょうど箱根で《どう、\、廻り》の原因を自分の道徳的不純さに帰したように、自分が千代との結婚に及び腰である臆病さ、自分の本音は隠して相手にだけ本音を言わせようとする道徳的不純さのせいだと考え、自己嫌悪に陥るのである。

一方、志賀の実際はどうか？ 八月二十四日の「手帳9」によれば、志賀も、《結婚について一言もいはずにCが如何に自分を思つてゐるかをハツキリ聞いてそれから又考へるつもりであつた》と書いている。しかし、《Cが如何に自分を思つてゐるか》、つまり好きさ・愛の度合を正確に知りたいということ、志賀は、自分としては当然の望みであり、それを単刀直入に聞いたただけだ、としか思つておらず、自分を守るための汚らわしい駆け引きとは感じていなかった。だから、『大津順吉』の《私はまはりくどい、自分でもよく分らない事を切りにいつてゐる。》に該当する記述は、「手帳」には全くない。ただ、Cが《余を想つてゐる 想つたからとてどうもなるものではないと思つてゐる》と答えた時、志賀は、自分がCと結婚可能な立場にあり、《理屈の立場》即ち結婚すべきかどうかを理性的に判断する立場に立って、判断材料を得ようと愛の度合を尋ねているのに対して、《Cは如何に余を愛しても結婚する事などは全然不可能な事と思あきらめてゐるのだ》、それをその儘にして置いて、《お前は乃公を（中略）どの位まで愛してゐるといふ事を無理に聴くのは》残酷だ、と反省したようである。そこで志賀は、《結婚について一言もいはずに》いた《今までの余の態度は所謂慎重な態度であつた、ツルイ態度であつた、自分の思つてゐる事をスツカリ云はずに向ふの思つてゐる事をスツカリ聞かうといふ態度であつた。》と、『大津順吉』と、文章的にはほぼ同じ事を書いているのだが、その後すぐに続けて《勿論それに悪意はなかつた、結婚といふやうな事を一度云ひ出して置いて、矢張り結婚はしないよといふのは、少なからず残酷な事であるから、結婚といふ事は全くいはぬ決心をしてゐたのだ》と、少しも恥じる様子はなく、『大津順吉』のように、《自分でもそれがみにくくて、\、堪はなくなつてきた。》というような事は全く感じていない。何故なら、実際の志賀は、愛するCを傷付けたくないがために、気を使つただけであり、順吉とは違って、この時、Cと結婚したくないなどという気持は持っていなかったからである。

『大津順吉』では、続いて、順吉が自分の醜さに耐え難くなった時に、千代が順吉を想いつつ諦めていると告白したため、順吉は《何も彼も露骨に訊いて了はうといふ氣になつて、許嫁または恋人の有無を尋ね、次いで《若し乃公が結婚を申し込んだら貴様は承知するか？》と訊ね、それが実質的に結婚を申し込んだ事になっていたという風に話は展開し、よく考えた結果ではなく、いかにもものはずみでそうなただけ、という印象を与える。そして、千代が身分を問題にした事に対して、元々身分違いを気にしていただけに、順吉は《いつか興奮して》しまい、《母の不細工な金の指輪》を千代の指に穿めてやり、接吻をしていると千代が気絶する。すると順吉は《いまはしい邪推》を起こして《冷かにな》るが、本当の気絶と分かり、千代は他の女中二人に助けられ、女中部屋に還って行った。《其後暫くは私は一種云ひ難い不快な心持に被はれてゐた。》と、この章は締め括られる。

とても大事なはずの婚約が、成り行きで軽はずみに結ばれ、その後の二人の口づけも何とも言えず無様で、折角、順吉が盛り上がった瞬間に千代の方は気絶するというちぐはぐさで、惨めな終わりを告げるように描かれている訳だが、これは事実通りではなく、志賀の意図的な歪曲であると私は思う。

八月二十四日の「手帳9」によれば、志賀が露骨に訊く気になって、許嫁の有無を尋ね、次いで《余が若しお前に結婚を申し込むなら承知してくれるか》と訊ね、それが実質的に結婚を申し込んだ事になっていたという展開は、『大津順吉』と同じである。が、例えば、『大津順吉』では（約束した人・愛している人は）「ありません」と答えた時《千代は真面目腐つた表情をしてみた。》となっているが、「手帳」にはそういう描写はない。『大津順吉』では、《結婚を申し込んだら貴様は承知するか？》という順吉のプロポーズ同然の言葉に対しても、《千代は一寸驚いたやうな顔をして黙つて下を向いて了つた。》と反応が暗いし、この後も、千代が結婚を喜んでいる幸せそうな姿が描かれる事は一度もなく、その事も、「この二人が婚約して本当に幸福になれるのだろうか」と読者に疑いを抱かせるのである。しかし「手帳」では、同じ問いに対して《Cは驚いてみた、（中略）彼は身分について（注32）何か云つてみたが、余はそれは問題外であると打ち消して聞かなかつた、彼は考へるまでもなく喜むで余の云ふ事を承知した、場合として云つた事は、そのまゝ事実となつて、余はCと其場で結婚の約束をして了つた、》と両者共に喜びに輝いている。

また、『大津順吉』には《只自家の人に相談して決められちやあ困るんだ》というせりふがあるが、「手帳9」にはない。これは、千代の両親に話が行くと、大津家の方で父・母・祖母の同意を取り付けずに正式のプロポーズをしたことになってしまうことを恐れたからで、実際の志賀も言ったかもしれないが、『大津順吉』では、順吉の保身という醜い印象を強める。

また、『大津順吉』では、興奮した順吉が《母の不細工な金の指輪》を千代の指に穿めてやることになっているが、「手帳9」では、単に《亡母のかたみの指環》としか書かれていない。志賀は、《不細工な》という形容詞一つで、二人の関係をひどく醜く感じさせるようにイメージを巧みに操作しているのである。

続く接吻の場面でも、『大津順吉』では《二夕月程前（中略）懐中時計を受け取る時に、私の指の先が千代の掌へ一寸さはつ》て、《案外堅いのに驚いた》と、折角のラブシーンに水を差すような興ざめな回想を、わざわざ書き込んでいる。「手帳9」では、婚約の日のこととは別に、八月二十五日の所で、「婚約以前にCの肉体に触れたことが一回しかなく、それが懐中時計を受け取る時にCの掌に触れた時だった」とは書いてあるが、《案外堅いのに驚いた》というようなことは、何処にも書いてない。さらに、この接吻については、「手帳9」の八月二十二日のものと思われる婚約直後のメモに、《彼を抱きすくめ接吻した 暫く接吻した彼と我とは息をハツマシた、》とあり、実際はかなり熱烈なキスで、Cの方も興奮し、積極的に応じたものと推定されるのに、『大津順吉』の方では、順吉の方が一方的にキスしただけで、千代はただじっとしていたような書き方にされている。

Cが気絶した件については、詳しい記録がないため、正確なことは分からないが、「手帳9」の先に引用した婚約直後のメモには、《彼は遂に目まひして倒れた、余の心には雲が早かゝつた。》とあるので、多少の邪推は実際にしたのであろう。しかし、『大津順吉』の《汗で後れ毛の附いた首筋》という描写は、殊更に不潔感を与えるために志賀が入れたものであるとし、順吉の心が《妙に冷かになつ》て《少し離れた所から凝つとそれを見てみた。》とか、千代が帰った後、《一種云ひ難い不快な心持に被はれてみた。》とかいう順吉の心理は、実際の志賀とは異なるフィクションか、甚だしい誇張の可能性が高い。

「手帳9」の先に引用した婚約直後のメモは、《 八月廿二日夜九時》と始まり、末尾に《（今。）》と記されている。これは夜九時に婚約し、Cが気絶した直後にこのメモを書いたことを意味するのだろう。ところが、「手帳9」の九月十五日（回想）では、《八月二十

日/夜、約束をする。C、気を失ふ、十二時過ぎ向ふへ行く、》となっている。これがもし正確であるなら、実際は、夜九時にCが気絶した後、水は志賀がこっそり汲んで来てやり、Cは間もなく回復し、書生（注33）にも他の女中にも知られることなく、その後もいろんな事を楽しく話し合いながら、十二時頃までCは志賀の部屋にいた後、一人でこっそり女中部屋に帰って行ったと推定できる。『大津順吉』のように、書生の岩井や他の女中に知られてしまったのなら、翌日には、志賀家の中で噂になりそうなものであるが、そうした形跡が全くないことも不審である。

『大津順吉』の方で、岩井のことを、《顔色のよくない肥つた田舎から出たばかりの書生が狼狽した態で独りまご／＼してゐた。》と書いたのは、モデルが実際にそうだったせいもあるのだろうが、順吉と千代の婚約の無様な印象を強めるためでもあろう（ラストの伏線という意味も勿論あるのだが）。千代の気絶を書生の岩井や他の女中に知られてしまうのは、みっともないことであるし、女中が水を持ってこない内に、順吉が急いで《千代の指から》婚約を象徴する《指環をとつて隠す》ことも、婚約を後ろ暗いことのように感じさせる。千代が《他の女中二人に助けられて女中部屋に還つて行つた。》という結末も、千代が汚い女中部屋で、みすぼらしい着物に煎餅蒲団と一緒に寝起きている女中の一人に過ぎないというイメージを、改めて強調しようとするものではないか。

気絶事件の真相については、断定するには証拠が不十分だが、いずれにせよ、実際の志賀が、気絶騒動でCに幻滅しなかったことは、はっきりしている。「手帳9」の、祖母と父が結婚に反対と聞いた後の八月二十五日の所には、《Cと抱き合つて一時間近くも話した》、《余は今Cと話して、こんな心配な時でも話さえすれば心の開く思ひのするのは、性質に於て一生を共にするに適した人であると思ふ、余は今何を迷ふ事があるのか、I must wholly will the THING I will!!! Cと断然一所にならう、》（《一所にならう》は「肉体的に」の意）とあり、その夜、志賀は遂にCと肉体的にも夫婦になり、《この後不真面目であるならば余は（中略）地獄に行くべき大罪人である、》と書いているからである（しかし、『大津順吉』では、これらの「手帳」の記事は、採用されなかった）。

以上は、『大津順吉』で、志賀が二人の恋愛と婚約を否定的に描こうと意図している事の証拠になる。

ただし、誤解のないように付け加えるが、Cとの結婚が間違いであるからと言って、この小説の中の順吉の言動が、全部誤りだということにはならない。例えば「第一」で描かれている順吉の肉体・無意識の発見・評価は正しい事である。また、志賀は、順吉が千代に惹かれたのは、キリスト教のせいでも無意識・身体を抑圧していたために、抑圧を知らない無邪気（イノセント）な子供のような千代と白に特に魅力を感じたためだ、と解釈していたと推定でき、この意味では、惹かれることも間違いではない筈である。ただ、それと、恋愛や結婚との区別が付かなかっただけなのである。

また、志賀（順吉）がC（千代）と結婚しようとしたことは、確かに考えが足りなかったが、それは、「父・母・祖母らの考えの方が志賀（順吉）より正しかった」事を意味する訳では全くなく、身分違いを理由に反対した彼等の考えは、志賀（順吉）以上に間違っていたと志賀は考えているのである。また、彼等が志賀（順吉）とC（千代）の真面目な考え・気持を少しも理解しようせず、単に動物的な性欲に駆られたもの（《痴情に狂つた猪武者》）と見なして軽蔑し、平気で嘘をついて騙した事を、志賀は決して許さず、それに対する怒りは、『大津順吉』執筆時にも変わっていなかった。『大津順吉』は、この怒りの興奮で終わっているため、この怒りこそが全編を貫くテーマであるかのように思われ易いが（須藤松雄氏や中村光夫氏など）、何度も言うように、それは誤読である。

また、ラストが怒りの興奮で終わっている事から、実際には順吉は父に敗北したのに、志賀がそれに気付いていないと受け取るのも誤読である。敗北した本人が気付かぬはずもないし、また、志賀は、「第二」の（一）で出した籠の中のオウムも、ラストの順吉も、どちら

も閉じ込められて出られない鬱憤晴らしに《やけらしい様子》をしているだけだと考えており、首尾を照応させているからである。

それからもう一つ、誤解のないように付け加えるが、私が実際の志賀の事実と『大津順吉』での描かれ方のずれを指摘したのは、志賀が事実通りに書かなかったことを非難するためでは決してない。最初にも断った通り、私は、優れたフィクションである『大津順吉』を、志賀がどのような意図を持って書き、どこでどのような工夫を凝らしているかを明らかにする一助として、事実との比較を試みただけなのである。ただし、これまでの所では、『大津順吉』の順吉と千代との無様な恋愛の描き方がいかに優れているかを、私はまだ論じていない。それは、「二、解釈と鑑賞の試み」の「第二」の方に回そうと思うからである。

読者の中には、順吉と千代との恋愛が熱烈な純愛でないことや、順吉が父と闘って勝利しないことをこの作品の欠点と考え、低い評価を下す者もあるようだが、完璧なヒーロー・ヒロインを描いたかどうかで芸術作品の価値が決まるという考え方は、余りに幼稚すぎると私は思う。逆に私は、そうしたステレオタイプな純愛物語・英雄物語でない所にこそ、この作品の偉大さがあると考えるものである。

純愛物語・英雄物語は、小説・テレビドラマ・映画・まんが等々で、毎年、掃いて捨てる程作られ続けているが、それらは恋に有頂天になっている人間や悪玉と善玉の戦いを、いつも同じように描いているだけで、人間の真実についての新しい発見や深い洞察は何もないのである。それに対して、『大津順吉』は、「頭」中心の無様な恋愛、無様な青春という、現実にはよくあるが、文学作品としては十分に描き尽くされて来なかったテーマを、見事に描き切った傑作だと私は思っている。順吉は、恋愛そして青春が不完全燃焼である御蔭で、しばしば冷めた意識で自分と相手を観察することが出来る。そして、千代や家族、そして自分の中での違和にも眼をつぶらない。だから、古今に稀な、正確な青春小説にそして優れた心理小説になり得ているのである。

二、解釈と鑑賞の試み

以下は、作品の流れに従って、全文の解釈と鑑賞を試みて行く。その為、先学諸氏の指摘と重複する場合が相当に多くなると思うが、御容赦願いたい。

『大津順吉』「第一」

() 序章 (「第一」の(一)・(二))

『大津順吉』「第一」の(一)と(二)は、「第一」だけでなく『大津順吉』全体の序章と言って良い内容で、主人公を強く束縛していたキリスト教信仰の本質を簡単に説明したものである。

順吉の気分は全体に暗いが、それをユーモアを持って描いている。

念のために言い添えるが、『大津順吉』「第一」の(一)のうち、《然しそんな事も私の信仰を変へる迄には其頃の私としてかなり長い時日と動機となるべき色々な事件とが必要だったのである。》という一節までが、全編のメイン・テーマを概括的に述べた部分であり、それに続く《子供から学校が嫌ひで》以下「第一」の(二)末尾までが、入信から明治三十九年秋のウィーラーのダンスパーティーの前までの状況を概略述べた部分で、(三)からいよいよ小説の現在時に入るという順序である。(二)末尾に出る「関子と真三」のモデル・未定稿『(きさ子と真三)』が明治三十九年八月に執筆されたものであることから、ここまでをウィーラーのダンスパーティーの前置とした志賀の意図は明らかである。「第一」の

(一)で《偏屈さが自分でも厭はしく》なり、《自由な人間になりたいと云ふ要求を時々感ずるやうになつた。》と書かれている事を、(四)のウィーラーのダンスパーティー以前から(志賀ではなく)順吉がそう感じていた、という意味に誤解する読者があるようなので、老婆心ながら注意して置く。

さて、ここに書かれている通り、キリスト教徒だった時、志賀にとって一番の問題は、性欲だった。

キリスト教が誕生する以前から、ユダヤ教徒は、紀元前13世紀頃、モーセが神から直接与えられたという戒律(所謂「十戒」)の一つとして、姦通(=姦淫)を禁じていた(「出エジプト記」第20章)。ただし、それは実際の姦通を禁じたものに過ぎなかった。それに対してイエス・キリストは、「『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。」(「マタイによる福音書」5章27~28節)と主張し、また、「不品行以外の理由で自分の妻を出す者は、姦通を行なわせるのである」(「同」5章32節)と説いた。これを文字通りに受け取ると、『大津順吉』にあるように、《妻にする決心のつかない女》に恋愛感情または性欲を抱けば、それだけで、実際には何もしなくても姦通(=姦淫)罪になってしまうということになる。そして、絶対離婚しないという覚悟がなければ、結婚できないことになる。信者でない人間から見れば馬鹿馬鹿しい話だが、志賀はこれを馬鹿正直に守ろうとしたのである。その証拠に、例えば「手帳4」の末尾に志賀は、《希伯來書ニ淫ヲ避ケヨトアルガ、此教ヲ堅ク守ツテ居ル人ハ、見惚レノ思ヒ出ノミヲ多クスルカモ知レヌガ神聖ニモ汚レタニモ、一生恋ト云フコトノ出来又男ナリ、而シテカウ云フ男ニカギツテ神聖ナ恋ヲ夢ミテ居ルモノダ。一体其男トハ誰?》(明治三十九年十月十三日)と書いている。勿論、「その男は自分だ」の意味である。また、明治四十年七月十五日、Cとの恋愛初期の「手帳8」には、《余は女と全く交りなき生活を送つて来た(中略)余は遂に妻なく了るものならずやと屢々思ひたりき》とある。『大津順吉』冒頭の一文《「自分の生涯にはもう到底恋と云ふやうな事は来はしない」かう云ふ事を思つては私はよく淋しい想ひをした時代があつた。》は、この「手帳8」に拠って書かれたものであろう。

恋愛が出来ないだけではない。売春婦を買うことは、勿論、罪であり、『内村鑑三先生の憶ひ出』で志賀が書いているように、当時は自慰行為もまた《キリスト教でいふ罪》と考えられていたため、性欲のはけ口となるものは一切無く、満十八歳でキリスト教徒になった志賀は、これにひどく苦しんだ。『濁つた頭』で言うように、《ナイフを腿へ突きたてようとした事も》《マッチを擦つて腿へのせた事も》、恐らくあつたであろう。『大津順吉』に言う通り、《烈しく自身の肉体を呪ふやうになつた》ことも、《レイノルズの「天使の頭」》(注34)が《来世での理想だつた》というのも実際に、明治三十五年八月十五日の未定稿1『人身発達の理想的想象』で志賀は、《我腦の支配の下に在りながら最も不従順屢々吾人をして良心の許すはんいより逸せしむる》情欲を生じさせる首から下の《肉体は全く捨て頭部のみになる事》が自分の理想だ、と書いているのである。

また《ヴィーナスの石膏の首》の件も事実のようで、『濁つた頭』の草稿とされるものの始めに、《青山高樹町の石膏像を作る家へ行つてヴィナス・ド・ミロの像を作つて貰はうと思つた》が、断られたため、《人間大の顔だけのヴィナスを買つて帰つて》《床の間へつるし》、『大津順吉』にある通り、接吻を繰り返す内、ヴィーナスの鼻が黒くなった為、《一緒に湯に入つてシャボンで洗つた》。《此事実》を《多少「彫像師」》(恐らく失われた志賀の未定稿であろう)に《入れた》、と出る。

内村鑑三が、《姦淫の大きな罪である事を本統に強く云ひ出したのはキリスト教が初めで》云々と説教したのも事実で、志賀の「手帳2」によれば、明治三十九年五月十三日のことらしい。そして、志賀がこの説教に対する疑問から、同年八月七日から九日にかけて書い

た未定稿『(きさ子と真三)』が、『大津順吉』に言う「関子と真三」なのである。

分かり切っているようなことを、わざわざしつこく確認したのは、明治四十年当時・作家以前の志賀直哉が、今の日本人なら笑ってしまうようなことで、本当にひどい苦しみを味わい、『大津順吉』に書かれたようなことを本気で考えたり実行したりしていたことを、確認したかったからである。

ただし、私は、志賀が愚かだったと言おうとするものでは決してない。一つにはこれが信仰というものだからであるし、一面では時代のせいでもあり、また志賀の若さ・純粹さから来る真剣さでもある。それは、決して馬鹿にすべきことではなく、いつの時代にもある青春の姿と言えるものなのである。(後でも述べるが、大津順吉は完成された大人ではない。だから、青年の未熟さがこの作品に描かれていることを非難するような一部の研究者の態度は、根本的に間違っているのである。)

自伝的な小説の場合、作者は過去の自分自身を主人公として描くことになる。これは簡単なようで、実は自分自身をも周囲の人間をも客観的に正確に理解・認識できなければならず、なかなか難しいことなのである。

が、『大津順吉』を書いた時、志賀は幸いにして、既にキリスト教の信仰からは完全に脱していた。だから志賀にとって、キリスト教徒だった過去の自分に対して距離を置くことは容易であり、「第一」の、中でも(一)(二)では、自らが選んだユーモラスなトーンを以て主人公を描くことに成功しているのである。しかし、「第二」のCや父との問題については、キリスト教の問題ほど吹っ切れてはいなかったため、客観的に見ようと努力はしていても、ユーモアを醸し出す所までは持って行けなかったのであろう。『「好人物の夫婦」あとがき』で、《余りに直接的な気分の露出することを厭い、その頃読んだアナトール・フランスの『シルヴェストル・ポナールの罪』の持味である余裕ある気分をこの作に持ち込みたいと思ったが、それは成功しなかったようだ。》と回想しているのは、主に「第二」の家族との衝突を描いた部分を指して言ったものであろう。

序章(「第一」の(一)・(二))では、志賀は大津順吉を、「頭」をもって肉体を何とか制圧しようと試み、逆に肉体に翻弄されている哀しいピエロ・弱者と見なそうとしている。これは、明治三十九、四十年当時の実感通りではなく、執筆時の考えに基づいて意図的に誇張を加えたものであろう。ただし、志賀は順吉の弱さ・情けなさを繰り返し指摘することで、順吉を否定・軽蔑するのではなく、人間一般の免れがたい弱さの一例として、暖かくユーモラスに提示しようと目論見、その事に成功しているのである(注35)。

「自分には恋は出来ないのか」と淋しい想いをする哀しいピエロとしての大津順吉から始めて、《仕事にも全で自信がなかつた》《私は生ぬるい基督信徒だつた》《子供から学校が嫌ひで、物に厭きッぽく》《信仰上の事にも實際怠惰者》《自分の信仰は(中略)U先生に預かつて居て貰ふやうな心持で居た》《只々偉い思想家だと決めて、それを手頼つて居た》という駄目尽くし。これは読者の微笑を誘うように、志賀の実際よりは、かなり誇張して書かれていると私は思う。

また、「第一」の(二)の最初にある、順吉の志望が貿易業から伝道者 哲学者 純文学へ移り変わったという記述も、事実その通りだったのではあるが、草稿にはなく完成形で追加されたもので、順吉の志望なるもののあやふやさを印象付けようとする意図であろう。《外国貿易で大金持にならう》という元々の志望の浅薄さを強調し、一時は伝道者を考えつつも、それを輝かしい未来としては考えられず、《「結局自分は伝道者になるやうな事になりさうだ」》という言い回しが表わしているように、周囲の環境に強いられてそうになってしまいさうだという心細い考えでしか無く、《聖いような淋しいような心持ちにな》る、と順吉の頼りなさが強調されているのである。

こうした自信のない、情けない大津順吉像が与えられているからこそ、《私は何よりも彼によりも、先生の浅黒い、総て造作の大きい、何となく恐ろしいやうで親しみ易い其顔が好

きだつたのである。》という理由付けが、すっきり納得できるのである。（草稿では説明されていた入信の経緯が完成形では省略されたため、顔が気に入ったことが入信の決定的な動機であるかのような印象を与えるが、実際はそうでもなかった筈で、これは志賀の意図的な誇張であろう。）

肉体と性欲を否定し、頭と道徳だけで生きようと頑張っているキリスト教徒が、結局は恋愛的に先生の強さと顔（一応、頭部ではあるが）に惚れ込んでいるという矛盾・自己分裂した在り方。しかし、悪いのは無理な道徳を遮二無二押し通そうとするキリスト教の方であって、肉体・性欲・無意識の声には、耳を傾けるのが正しい生き方である。だから、この一節を読んだ読者は恐らくほっと安心するのではないだろうか。今までの建て前で不自然だったが、これは確かに自然な素直な本音だからだ。

順吉がU先生と結び付けているのは、超人を説いたニーチェ・『英雄崇拜論』のカーライル・交響曲「英雄」のベートーベン。弱者であるからこそ順吉は、強者・男性的なるものに憧れ・惹かれる。これは、十代の少年少女が、年上の同性に自己の理想像を見出して、初恋のような感情を抱く心理である。U先生は、順吉の理想の自己像となり、彼の心の中で良心（超自我、そして道徳）の位置を占めていたのであろう（志賀は自我を貫徹する強者だと思っている研究者が多いようだが、実際の志賀は、鼻っ柱は確かに強いが、神経質で痩せっぽっちで疑り深く、大津順吉程ではないにせよ、かなり弱い所があったからこそ強いものを求めたのだと私は思っている。『或る旅行記』（五）でも志賀は、ことの事件を振り返り、当時自分には文学上も自信が無く、《外見のやうに勇敢では決してな》く、内村先生に対しても《いつも其前に出ると、ろく／＼話も出来なかつた》と回想していることに注意すべきである。）。

頭に属する「思想」・道徳と、肉体に属する自然な感情・欲望との極端な乖離。それは、キリスト教に囚われていない人間には滑稽でユーモラスな光景である。だから、志賀はこの「首から上の頭部」と「首から下の肉体」の分裂をことさらに強調し、読者を笑わせる。

その一つは、子供の頭が飛び回っているレイノルズの奇妙な写真銅版画であり、もう一つは、ヴィーナスの石膏の首である（注36）。

レイノルズの絵は、全くキリスト教的な理想を表わしている天国の「天使」であり、懸けてある場所も《鴨居》で、部屋の中では一番天国に近い高い所を選んである。「天使の頭」の原作は油絵で色彩があるが、志賀が持っているのは写真銅版画だから色が無い。この事も、官能性の否定に繋がるであろう。

こんなグロテスクなものを《来世での理想》とすることは、それだけでも読者の失笑を誘わずにはないが、さらに駄目押しとして、志賀は《未だ新米の信徒だつたから私は恐る／＼小声で云つた。／＼「僕は首から上だけで復活して呉れないと困ると思ふんです》と書く。新米の信徒で自信のない順吉の気の弱さを強調しつつ、それでも彼にとっては《首から上だけで》なければ絶対に困る、それが余りに切実な問題だったため、勇気を奮い起こして、本当に困り切った情けない顔と声で、恐る／＼発言したのである。しかし、《誰も相手になつて呉れなかつた。》

見事な落ちで、また読者の笑いを誘う仕掛けになっているのである（注37）。

一方、ヴィーナスは、ギリシャ・ローマのエロチックな異教の女神である。だからキリスト教の天国からは遠く、順吉がキスできる《床の間》に懸けられている。しかし、キスは出来ても、このヴィーナスには乳房も下半身も無く、性欲の本当のはけ口にはなり得ない。キスをした所で、相手は冷たい石膏で、何の反応もない。このヴィーナスは、順吉の性欲と禁欲とのアンビヴァレントな葛藤と妥協の産物であり、哀れを誘う。

本来、《床の間》は、悟りに通じるような高い精神性を有する書画・陶磁器などを飾る場所であり、そこにヴィーナスの顔が掛けてあるということは、それ自体、滑稽である。

その上、この後のヴィーナスの鼻が薄黒くなり、風呂で洗うという展開は、噴飯ものであ

る。こんなおかしな事を小説に書いた例は、世界の文学の長い歴史の中でも、他には無いだろう。しかも、ここには深い意味が込められているのである。

ヴィーナスの首は、いつまでも清潔に白いが、それは生命を持たない石膏だからである。それに対して、私の鼻と触れ合うヴィーナスの鼻が薄黒くなるのは、生きた肉体というものは、油や汗を出すからである。石膏の白は美しく、脂汗は汚く臭いかもしれない。しかし、石膏に生命は宿らない。順吉の性欲は、油や汗と同様、彼の肉体から生じるものである。キリスト教はそれを醜いとする。しかし、性欲と油と汗を否定することは、結局、生命を否定することにしかならない。性欲と油と汗にまみれた肉体こそが、実は人間の真実であり、生きることの根っこなのである。だから、このエピソードには強い実感があり、人間の真実がそこにある事を、読者を不愉快にすることなく納得させてくれるのである。(或いは、志賀はポール・グセル編『ロダンの言葉』第二章の「自然にあって醜と考えられているものが、往々にして、美と称せられているものよりも豊かな性格を呈しています」「芸術家にとっては自然の一切が美しいのです」などからも励まされて、これを敢えて書いたのかもしれない)

この様に、この一節は、極めて正しい真実を語っているものなのだが、それを堅苦しいお説教としてではなく、まことにユーモラスに語ってくれている。もともとユーモアとは、人間の弱さや矛盾を指摘し、かつ優しくそれを肯定することである。例えば、セクシーな女性を見た途端、思わずペニスを勃起させてしまった男の漫画がユーモラスなのは、それが意識的・意志的に我慢しようとしてもコントロールできない不随意的・反射的な生理現象で、どんなに強がっている人間も免れ得ない弱点だからであり、かつその弱点を許せるからである。

ここでの主人公の行為は、《悶えるやうな堪へられない気分に》駆り立てられてする、つまり弱さ故の、一種の自慰的行為と言える。しかも、鼻は男性の性器を連想させる。ヴィーナスの鼻の汚れは、キリスト教的観点からすると、許しがたい自慰行為の穢れ・罪に当たるはずだ。罪は石鹸で消すことは出来ない。しかし、主人公はそれを、あっさりシャボンで洗い落としてしまう！ 鼻歌交じりの気楽さで…。つまり、主人公は自分では知らない内に、キリスト教から一時解放され、性欲と油と汗にまみれた肉体を肯定しているのである。

このエピソードは、主人公がU先生から《姦淫は殺人と同程度に大きい罪悪である》と言われて、《此言葉から恐ろしく不愉快な響を受けた》直後に置かれているのだが、そこにも志賀の周到な(しかし恐らくは直感的な)計算があるのだろう。読者は、主人公と一緒に「恐ろしい大罪人」呼ばわりされたような厭な気持ちになって、U先生に反発しているからこそ、ここでその《不愉快な響》を、《シャボンですつかり洗》い落として貰ったような、救われた気持ちになれるのである。(ここで《不愉快な響》という言葉を使っていることにも注目したい。「響」は振動で、すべての物質の奥まで浸透して、否応なしに共振させる。理屈を超えて、肉体の奥まで侵入して来るものなのである。後でも()「第一」の(四)や「第二」()「第二」の(一)などで指摘するが、『大津順吉』において志賀は、声や音に現われる身体的なものを巧みに使っていることが多いのである)

「関子と真三」のエピソードがこの次に置かれているのも、U先生に反発する読者の気持ちの残響にうまく波長を合わせるためであり、その《結婚しない相愛の男女の性交にも姦淫でない場合が幾らもあると云ふ考》が、「第二」で描かれる順吉と千代の性交を正当化する理論的背景となっているのである。

ここで、試しに、《私は此言葉から恐ろしく不愉快な響を受けた。》という一文から、後のヴィーナスの挿話を全部飛ばして、直接《さう云ふ私は先生の言葉に反対して「関子と真三」と云ふ小説を其時書いた。》以下を繋げてみると、どうなるか？ 論理的には、こちらの方が筋が通っていて、ヴィーナスの挿話は脱線的な挿入であることが分かる筈である。しかし、ヴィーナスの挿話を抜いてしまうと、「関子と真三」は観念的な理屈に過ぎず、小説

と言うより論文のようで、ここだけ読むと、順吉のU先生に対する反発も、「頭」だけのものに感じられる。実際にも、志賀自身、明治三十九年十月二十一日の「手帳5」に、《今晚山内が来て、「真三きさ子」の小説を読むで見たが思想は大きなもので（比較的）別に悪いとも思はなかつたが、（中略）何んとなく、理屈臭くて、少しも美感を起さぬ》と自ら不満を感じていた。つまり、志賀は、順吉のU先生に対する反発が、「真三きさ子」に現われているような「頭」だけの薄っぺらなものではないことを表わすために、ヴィーナスの挿話を間に挿み込むことで、説得力を高めることに見事に成功したのである。

なお、草稿では、この後に《ゴルキーに出て来る強い自由な男に自分は惹きつけられた。（中略）教えに接する前三四年間の自由な生々した生活を恋しく思ふ事が多くなつた》というメイン・テーマを表わす一節があったが、完成形では削除された。これは、読者の頭の中で、順吉が既にU先生の軛をはね除け、かなり《強い自由な男》になっているというイメージが付着してしまうことを嫌ったためであろう。

（ ）「第一」の（三）

序章（「第一」の（一）・（二））は順吉の過去を簡単にまとめたものだったが、（三）からは、いよいよ小説の現在時に入る。現在時が年代的にいつに当たるのかは、ここには明記されていないが、『大津順吉』末尾に明治四十年八月三十日と出ること、「第二」の（三）に、ウィーラーと会ったのは《前の年の秋》とあることから、「第一」の（三）は明治三十九年秋と分かる。モデルの事実から言えば、ダンスパーティーは十月三十一日（水曜日）に開かれているので、ウィーラーからの電話はその二三日前、二十八日か九日と考えられる（注38）。

「第一」の（三）（四）（五）は、キリスト教のせいだ《女に縁のない生活》を強いられていた順吉が、初めて異性との接触（？）に近いものを持ち、ダンスパーティーの経験を経て、自分の《偏屈さが自分でも厭はしく》なり、《もつと自由な人間になりたいと云ふ要求を》初めてはっきりと自覚的に感じるまでを描く部分である。そして、「第二」の千代によって、さらに深く女性と接触することになるという段取りである。

（三）では（一）（二）に引き続き、順吉をやや皮肉に、ユーモアを持って眺めている。先ずモデルとの事実関係から確認して置こう。

《親しい友達》のモデルになっているのは、黒木三次で、稲ブリンクリーのパーティーの翌明治四十年六月二十八日の志賀日記に《夕方電話を黒木として不快になる、彼は真理を恐れるやう思ふ》とあり、同三十日の「手帳7」に、「真理を恐れるようになれば救われざる墮落の第一歩である。黒木は実業家になろうとしているから、その仕事の下らなさに目をつぶろうとするのだ。それでいて真理に反対する勇気もないので新渡戸稲造の所に喜んで行くのだ」という意味のことが書かれている。（三）の冒頭で順吉が《小さな手帳》に《書きとめて》いる《所感》は、この「手帳7」の右の箇所に基づくものである（注39）。志賀は、明治四十年の出来事を、三十九年の全然関係のない所に移して使っているのである。

なお、黒木の墮落に腹を立てた明治四十年六月は、志賀の事実で言うと、ブリンクリーとの写真の遣り取り（完成形では「第二」の（三））の翌月である。Cとの事件当時、志賀が真面目なクリスチャンだったことは、この事からも確認できる。

黒木のエピソードは、志賀が友人の信仰の生温さに腹を立てた例として、他に適当なものがなかったため、特に使いたかったようで、Cとの事件最中の明治四十年八月九日の「手帳8」にメモされた「秋」又は「冬」というCと自分を描く小説の構想に「青木三郎」という名前で既に登場しており、明治四十二年六月の「手帳12」に書かれた『大津順吉』の原形とも言える「濁水」という小説の構想メモにも《（一）（中略）榊と二人演説を聞いてかへる所（中略）（二）何か書いてる所へ電話〔欄外〕青木へ手紙を書く時にする アトボ

ーットする、(中略)会話がうまくなるよ 男が足りないから考へる。(中略)(三)舞踏会、写真(中略)(四)瀧との事、(外山先生のカン淫の話、)》などとある(注40)。

草稿 では、高等学校の校長(新渡戸稲造)の演説に腹を立てて帰ってすぐに、「佐々木」(黒木)に手紙を書こうとする所へ電話がかかってくる、という形で、その使い方は「濁水」のアイデアと殆ど同じである。輔仁会大会での乃木・新渡戸に対する不快との関連で、内村から新渡戸に鞍替えしようとした黒木に腹を立てるという風に結び付ける意図だったのであろう。完成形 では、演説が無くなったため、友達(黒木)に手紙を出す程でもないという事で、手帳に書くだけになった。

「濁水」・草稿「第三篇」・『大津順吉』いずれの場合も、このエピソードは、主人公が真面目なクリスチャンとして友人の信仰の墮落を攻撃しようとしている所へ女から電話がかかると、途端に態度が変わり、読者がニヤニヤする、という所に狙いがある。『大津順吉』では、《殊に》《不機嫌》だった順吉が、《小むづかしい顔》で偉そうなことを書いていたのに、《女の人から電話》と聞くと、《胸を躍らせながら電話口へ出》、《電話を断つて二階の部屋へ帰つて来ると、もう私の気分は余程変つてゐた。》となり、《座布団を四つ折りにして、それを枕に寝込ろん》で、長々とウィーラーのことを回想し、本箱の抽斗から雑誌を取り出し、口絵に載った女の写真を見詰める、という展開になっている。

しかし、志賀は、真面目なクリスチャンであることが良いことだと思っている訳ではないので、順吉が女性に心を惹かれることを読者に批判させようとして、笑わせているのではない。ここでも、笑いは人間の自然な姿を肯定する温かい笑いである。

この章からはまた、キリスト教に代表される意識・「思想」・道徳とは異なる人間的自然に属するもの、即ち無意識・気分・感情、そして身体的なものに対して、志賀は特に読者の注意を向けさせようとしている。志賀の文学では「気分」に極めて大きなウエートが置かれることは、以前から指摘されている事だが、実はこれは、志賀が意識・「思想」・道徳ばかりを重視するキリスト教に苦しみ、そこから逃れ出た結果、キリスト教が軽視して来た無意識的・身体的なものの大切さに目覚め、確信を持つようになって行ったもので、志賀文学の価値の中心を成す画期的な発見なのである。(この志賀の「発見」の過程については、いずれ別稿を用意し、詳しく説明する予定である)。

例えば、右に挙げたものの中で言うと、《不機嫌》《小むづかしい顔》《胸を躍らせながら》《私の気分は余程変つてゐた》《座布団を四つ折りにして、それを枕に寝込ろん》だリラックスした姿勢、などがそれである。キリスト教は不機嫌に、女性に惹かれる自然な気持は、自然な感情・身体的反応に結び付いて行くのである(注41)。

ウィーラーについての長い回想の中にも、同じ意味で注目に値する表現がある。例えば、《娘は何かしらいやに高慢な顔つきをしてゐるので、それが自然私をも娘にだけは高慢な顔つきにしてつて、遂に挨拶は互に仕舞まで仕舞に了つた。》という箇所。これは、草稿 では、お絹が《自分の美を自覚したらしく、何所か傲慢な顔をしてゐる》ので自分は《口をきかなかつた》と書かれていた箇所であるが、完成形の方が、ウィーラーの顔つきが無意識のうちにそのまま順吉の顔つきに伝染してしまうという、身体から身体への直接的な反応になっている点に、志賀の改訂の意図があると私は思う。

それに続く所で、百人一首で順吉と並んだのを厭がったウィーラーが、《更つて頂戴」と兄の彼方に身を差し入れて、無闇と兄の体を此方へ押しよこした。》という表現も非常に身体的で、ウィーラーの、単に傲慢なだけでなく、惹かれるからこそ反発する思春期特有の、自分の意識と無意識をうまく調和させることが出来ない在り方が、暗黙の内に見事に捉えられている。この後に、《娘とは其後色々な所で会つた》が、《いつでも両方で知らん顔をしてゐた。》とあるが、実は互いに相手に惹かれるものがあって、自意識過剰になっていたと推定できる。この後の方に、《不愛想に断つて置きながら、後暫く其事に就て私は色々な事を考へないでは居られなかつた。そしては仕舞に私はよく自己嫌悪に陥つた。》とある

のも、惹かれつつ惹かれまいとする葛藤のせいであろう。

ブリンクリーが志賀を好きだったことは、ダンスに何度も誘ったり、志賀の写真を欲しがったことから想像が付く。また、志賀の側も相当にブリンクリーが好きだったことは、種々の資料から分かっているのである。

やや脱線になるが、幾つか紹介すると、草稿によれば、七世市川八百蔵が土佐坊昌俊の芝居（「御所桜堀川夜討」）をやっている時（明治三十八年五月二十二日から）、志賀は歌舞伎座でブリンクリーをそれと気付かずに見て《美しい女だ》と思い、一週間くらい忘れられなかったと言う。その時は、前年の夏、箱根へ行く時、電車で向かい合ったお嬢さんだと思い込み、性質・趣味すべて立派な人だと想像の中で拵え上げていたが、一ヶ月後に人力車に乗ったブリンクリーを見掛けた時に初めて気が付いたと言う（注42）。

また、これは完成形にも出ているが、草稿（四）によると、志賀は妹の所に来た女性雑誌の口絵に、（明治三十八年九月五日の）日露戦争の講和を祝う宴会でブリンクリーが大和姫に扮した写真を見て、この雑誌をもう一冊買って来て、本箱の抽斗に隠し持っていた。好きでなければ、こんな事をするはずがない。

翌明治三十九年一月頃の「ノート1」には、《高慢なる美しき女あり 余は、彼を憶はざるを得ざる時あり しかれども彼の前に跪く事は如何にしてもしたくなし、彼をして跪かしめたく思ふなり》とある。

同年六月十二日にブリンクリーからダンスの誘いの電話があった際の「手帳3」には、行きたくない理由として、《常から美しいと思つてゐる此娘が。人を迷さんと装ひこらしてゐる姿に心を奪はれはしまいかといふ恐れ》があると書かれている。この「手帳3」によれば、この時ブリンクリーは《男が少なく困るから来てくれ》と言ったというから、この電話が『大津順吉』に言う《初めて娘と口をきいた》電話らしい。

そして、多分この直前に、《速夫》（モデルは高崎弓彦）から《「ウィーラーの所のダンスで男が足りないから君に来て呉れとさ」》と言われたのであろうが、草稿では、《「ダンスは閉口だ」/自分はダンスを少しも知らない上に、かういふ事には悪意を持つてみたのだ。然し行つて見たい気がした。》と書かれていた。行つてみたい理由は書かれていないが、ブリンクリーの美しさに惹かれていたからであろう。

なお、草稿でも完成形でも、この時、ダンスを習いたての下手な人の相手役にするつもりではないかと、ひがんだ考えを起こすことが書かれているが、これは完成形によれば、《速夫と其娘とが互に有頂天になつて居ると云ふ噂》を既に聞いていたからで、好きでもないのに自分を指名するのは良い意味の筈がないという考えなのであろう。

同年十月二十何日かに、志賀はブリンクリーから電話でパーティーに招かれ、「たいがい出ます」と答えた。志賀が行く気になったのは、ブリンクリーが高崎弓彦に振られたことを知っていたことも大きな原因だったのではないかと私は思う（志賀は、そんなことは言っていないが...）（注43）。パーティーに行く前日の「手帳5」に志賀ははっきり、《愛しては居る、而して同時に愛にとらはれて不自由になる事を大に恐るゝ者なり》と書いている（注44）。

そしてパーティーの翌三十一日の「手帳5」では、「ウソをつかれながら、おこる事も憎む事も出来なかったことを不愉快だ」と言い、《彼は益々美しくなつた》と書いている。「おこる事も憎む事も出来なかった」のは好きだからだろう。

同年十二月十二日付けで有島壬生馬に宛てた手紙の中でも、志賀はこのパーティーのことを報告して、《此事は色々な人に話した、然し何時もウソをつかれたと云ふ事と、浮薄なものであつたといふ事と癪にさわつたといふ事だけで、女については何もいはない、況んや自分の心中の矛盾の事などはオクビにも出さない、而して自分自身でもそんな事を忘れて、そんな所へ接近しまいと思つてゐる》と書いている。志賀が誰にも言わなかった《心中の矛盾》とは、ブリンクリーに対する愛と軽蔑の葛藤を言うのであろう。

翌明治四十年五月二十九日の「手帳7」では、《自分は自分の知つてゐる女の内では、I. Bが一番美しい人であると思つてゐるのだ、左うして全く愛してゐないワケではない それも美しさだけにヒキ付けられてゐるので、其人間には全くヒキ付けられてはゐないのだ だから尊敬といふ念は殆どないといつてよい、始終、チャームされまいと予防してゐるやうな体度である、結局どうなるのだらう、去るものは迂しと、近づく機会がない所から迂とくなつて、遂には忘れるやうな事になるのだらう、親しく接するやうな機会が若し出来たら、たしかに今のまゝの感情ではゐない》とある。

同年七月十三日頃の「手帳8」では、《余がCに対する心は恋でなくて何であらう》と書いた後、《余は仮令恋する事あるとも、例へばI.Bの如く、徹頭徹尾結婚する事の出来ない女が世に多い事を知るものである、即ち貴族主義の栄華のみこれ願ふといふやうな女とは到底結婚のできない事をよく知るものである》と書いている。

以上の様に、志賀は相当に強くプリングリーの美貌に心を惹かれながらも、好きになるべき相手ではないと考え、近付かないようにしていたのである。

私見によれば、志賀とプリングリーは顔立ちがかなりよく似ている。顔立ちが似ている者同士は恋に落ちやすい。二人が惹かれ合ったのはその為もあろう(注45)。

しかし、先に「一、予備的考察」の「所謂「断層」問題 二部構成の意図」でも述べた通り、『大津順吉』では、順吉のウィーラーに対する感情は、極めて淡いものに留め、恋愛の対象になったのは千代だけであるかのように描かれているのである。

() 「第一」の(四)

これは、ウィーラーのパーティーを描いた章で、出だしから重苦しいが、最後は明るさを取り戻して終わる。

実際の志賀直哉がこのパーティーに対して抱いた感想は、パーティーから帰宅直後の「手帳5」によれば、ひたすら不愉快であり、腹立ちであった。プリングリーに嘘をつかれたことに対する腹立ちと、自分が《人をあざむいて来た》こと(これは西洋人に日本文学を研究していると嘘をついたことを指すのであろう)に対する腹立ち、《浮薄な男女が浮薄な体度を以つて、浮薄におどる》ダンスというものに対する腹立ち、そして、それにもかかわらず、プリングリーに心を惹かれ続けている自分に対する腹立ちであった。ただし、プリングリーについては、《益々美しくなつた、(中略)以前は彼は男を男とも思はない頗る傲慢な女であつたが今は大変、変つた》という感想を書き残している。

草稿でも、パーティーに対する順吉の在り方は、体調の悪さを強調していること以外は、さほど変更されていなかった。それは、草稿では、(五)のパーティーに関しては、当時の自分の現実を、ほぼその儘再現するという方針で書かれているためである。

例えば、草稿(五)では、上流社交界というものをキリスト教的価値観から軽蔑していた当時の考えをそのまま踏襲している。

即ち、順吉は、玄関で出会った燕尾服で踊り靴の二人を見るや、《極く僅かな好意も嘗つて持つた事のないかういふ人々が自分と一緒に招かれてゐやうとはマルデ思はなかつた自分は、其時来べからざる所へ来たといふやうな気がした。どんな事をしたつて踊りなんぞするものか、と思つた。》と、たちまち強烈な拒絶反応を示す。

また、ダンスについては、一面では《自分で自分の心のカタクナなのが堪えられない位にカタクナな心持になつてゐるのをどうする事も出来なかつた。キリスト教に接する迄では自分はもつと社交的であつた(中略)。もつと快活だつた。気持が自由だつた。邪推深くなかつた。傲慢でなかつた。》と、反省しつつも、《自分が若しあの時にキリスト教徒にならなかつたら、其頃恐らく、ダンスなどを自慢にしてゐるやうな男だつたかも知れない。同時に其所にゐる人々と同じやうな事をしながら自ら少しも不思議に思はないやうな人間になつて

あたかも知れない。》と、上流社交界およびダンスへの軽蔑を露わにし、キリスト教徒になったことを《悔ゆるのではなかつた。》と、結局はキリスト教をも肯定する（信者だった当時は、実際そう思ったに違いない）。

ただし、草稿の順吉も、自分を全肯定している訳ではない。（五）の末尾では、パーティーの経験の総括が次のようになされている。

《其夜は今まで殆ど経験した事のない程に不愉快な晩であつた。不気嫌な表情を隠しきれなかつた。（中略）ウソを云つた（中略）どの男も燕尾服かタキシードを着てゐる中に自分だけ毛バ立つた大学の制服を着てゐるミナリの見すばらしさも決して無心ではゐられなかつた。それを耻かしく思ふまいと思ふ心が、自分の心をイヤに堅く、重たくした。（中略）ジョージの母に対しても或る程度の好意を見せたいと思ひながら、自分の気分はそれを許さなかつた。》

この様に、守るべき礼儀を守れなかつたこと、嘘をついたこと、みすばらしい服装を恥じる虚栄心に打ち克とうとして出来なかつたことなど、反省すべき点を幾つも挙げている。翌日の（六）の所では完成形とほぼ同じ《余りに「開けない」自分自身に対する嫌悪の情が強く起つてゐた。》という言葉も出る。が、草稿の（五）は、様々な要素がごっちゃに出ていて、作品として何を狙っているのか、方向性が明確でない、と感じられる。事実というものは、本来様々な要素のごった煮なので、それをその儘再現してしまえば、必然的にこうなるのである。また、作者と主人公との間に距離感が足りないことも、失敗の原因となっている。

それに対して完成形では、志賀が順吉に対して距離を置き、キリスト教を否定するという作品全体の方向性をはずすことがないように、事実を取捨選択したり、改変したりした結果、印象がはるかに鮮明になっている。

具体的には、先ず何よりも、上流社交界を軽蔑するキリスト教的価値観が、ほぼ消し去られていることが重要である。

例えば、玄関で出会った二人に対する先に引用したような草稿での拒絶反応は、完成形では削除される。順吉が二人を見た後《不快な気分には被はれ》ていることは同じだが、それは体調が悪いせいと、《二人共燕尾服で踊り靴を穿いてゐ》るのを見て、ウィーラーの言葉に反してダンスが行なわれることを知ったせいに過ぎない。

草稿では、キリスト教的価値観が、順吉が周囲を上から見下す根拠となっていたが、完成形ではこれを消し去っただけでなく、逆に、順吉が周囲から見下されることの正当性を強調しようとしている。

例えば、西洋人と会話をするというエピソードだが、これは草稿では極めて短い。そして、嘘をついたことについては、《自分は娘の事をいつてゐるジョージの母の話が聴きたかつたのだ。一時は林檎の汁だけを吸つてゐたといふやうな事が、自分を妙な心持にさせたのである。》と弁解（？）のようなものが付けられていた。

また、草稿では、会話が續かなくて西洋人が行ってしまった後、さっき玄関で会った厭な奴が一部始終を見ていたことに気付いた順吉は、《何故自分一人こんな侮辱を受けるのか》と反発し、嘘をついた娘に対して改めて《心から腹を立て》ることになっていた。これは、パーティー直後の「手帳5」の《自分はおどりを知らなくても、西洋人と話が出来なくても、一生何んにも差し支えない日本人である》という啖呵と同じ心境である（が、これは負け惜しみで、本当は英語もダンスも出来ないことが恥ずかしく口惜しいのである）。

ところが、完成形の方では、西洋人との会話の途中で、《余談になるが》として、順吉の駄目人間振り・矛盾・滑稽をユーモラスに指摘する文章が大量に付け加えられているのである。曰く、順吉は英語が出来なくせに英文科に籍を置き、卒業後は田舎の中学の英語教員になろうと考えていたこと、順吉は作家志望と言つても、自信に裏打ちは無く、子供が「大きくなったら陸軍大将になる」と言うのと大差なかつたこと、父が

らは、《偏屈で、高慢で、怒りッぽくて、泣虫で、独立の精神がなく、怠惰者で（中略）社会主義者》とされていること（ほぼ当たっているということであろう）、父から「自活しろ」と言われると、臆病者が強い子供に意地悪をされる時のような心細い心地になること、自活の手段として中等教員になろうと《虫のいい》ことを考えているのだが、その癖、順吉は英語も国文も漢文も同程度に不得意であること、等である。そして、この余談の直後に、作者は西洋人に《何の文学を研究してあるかと訊》かせる。順吉は正直に「英文科」と答えるには英会話が下手すぎて恥ずかしいので、つい「日本文学だ」と嘘をついてしまい、自己嫌悪に陥るのである。その後、話しかけても英語が分からないので、西洋人は諦めて行ってしまふ。そこでも、《不機嫌な顔》をした順吉に対して、西洋人の方は《微笑しながら起つて行つた》と書き、悪いのは順吉の方であることを明確にしている。そして、順吉は、さっき玄関で会った男に今の場面を見られていたことに気が付くが、当然のことながら、草稿の時のように反発することもなく、ウィーラーに改めて腹を立てることもないのである。

また、ウィーラーの母が順吉にダンスの相手を決めさせる所は、草稿では、《「エ、？ お上手なんでせう？」／底に鉾が打つてないといふだけの頑丈な靴を穿いてある自分に空々しくこんな事をいつた。》と、ウィーラーの母を批判する書き方になっていたが、完成形では、《「ええ？ お上手なんでせう……」と笑ふ。／私は「底に鉾の打つてないだけの此靴を御覧下さい」と云ひ度かつた。然し第一にそんな事が軽く云へる程、開けた人間で私がなかつた上に、其時の気分が益々私をかたくなにして居たから返事を仕ずにゐた。》と、順吉が開けた人間でないことに主たる責任があるとし、キリスト教から離れて自由になるというメイン・テーマと繋げているのである。そして、順吉からダンスを断られてしまふ遠藤さんの奥さんについても、完成形では《内気な、いい人であつた》という描写を付け加えて、罪滅ぼしをしている。

ダンスというものについても、草稿ではダンスに対する軽蔑の姿勢を貫いていたのに対して、完成形では、《私の性質からも趣味からも、かういふ事は好きである筈だつた。》と正面から肯定し、《然し私には禁欲的な思想と、それから作られた第二の趣味と性質とがあった。しかも、それらは本来の趣味や性質より私の意識でいやに明らかなる点で、私は知らず／＼、それへ義理立てをしないではゐられなかつた。》とし、やはりキリスト教から離れて自由になるというメイン・テーマと繋げている（注46）。

そして、パーティーにおける順吉には、《殊更な軽蔑の眼で、顔に血の気を上げて踊り廻つてゐる人々を見》させつつ、キリスト教を棄てた語り手としての現在の順吉には、《今の私は思想に義理立てをするやうなかういふ弱い心を恥ぢてゐる。》と言わしめている。志賀は、キリスト教徒だった時の順吉と棄教後の順吉では、価値の序列が一八〇度転倒して居ることを、この一文ではっきり指摘しているのである。即ち、キリスト教徒時代には、ダンスこそが軽蔑すべきもの・恥・弱さであり、順吉は強者として踊る人々を見下しているつもりだったのだが、棄教後は、「思想」に囚われることこそが軽蔑すべきこと・恥・弱さであり、今の順吉はかつての順吉をこそ見下しているのである。

草稿と完成形の違いで、もう一つ重要なのは、（ ）「第一」の（三）でも指摘して置いた身体的なものへの注目が、草稿の（五）にもあるにはあつたが、完成形ではさらに重視され、見事な表現にもたらされていることである。

例えば、絹ウィーラーの最初の描写の中の《メランコリックな顔の表情と細々と如何にも疲れた様な弱々しい体の表情とが其処にゐる他の男女の誇つたやうな一種緊張した心持で見得を張つて居る中に際立つて私に親しみの感じを起させた。》という所は、草稿とほぼ同じだが、「体にも表情がある」という捉え方は、志賀独自の、世界文学史上、画期的なものではないかと私は思う（注47）。

そもそも、順吉がここでウィーラーに《親しみの感じを起》こしたのは何故か？ 志賀

は、その原因は主として、二人の身体のコンディションであると、明らかに考えている。この直前の段落で、絵を見に行くが、立っていられなくてソファに戻る順吉を描いているのは、その伏線である。また、《広間との界の大戸が両方に開かれた》ことで、正装した人々がダンスを心待ちにしている体の表情を、《誇つたやうな一種緊張した心持で見得を張つて居る》と、僅かな言葉で巧みにスケッチし、病み上がりのウィーラーのそれと対比しているのも、ダンスの雰囲気から疎外されている二つの病んだ身体が、だからこそ互いに引き合うドラマとして、志賀が二人の出会いを演出しようとしているからなのである。

順吉は、病気と、ウィーラーに嘘をつかれたことと、ダンスから一人だけ疎外されている苦痛とで、不快感を全身に表わしてしまふ。その為、ウィーラーは順吉に近付きたいのに近付けない。その事を 完成形 では、《娘は時々私の方を見てゐた。けれども私が私の顔に表して居た表情が娘の近よる事をこぼんでゐるらしかつた。》と表現している（草稿にはこれに該当する文章はない）。ここで、《私》が意識して拒んだと書かなかつたことに注意すべきである。無意識の内に自然に浮かんで来る《表情》が拒んでいる。その事を《私》は多分そうなんだろうと推量しているだけである。自分のことではあるが、他人事のように《らしかつた》としか言えない。それが身体というものなのだ（注48）。

脱線ついでに書いて置くが、志賀は『「白樺」と西洋美術』で、「短篇小説を書く時、よくロートレックの画集を身辺に置いて、筆が渋って書き続けられないような時にはそれを開いて見ると、端的に創作の刺激になつた。」と言ひ、事実、『大津順吉』執筆中の明治四十五年六月十七日の日記に、「ロートレックの本を借りてくる」とある。私の印象では、ロートレックはまるで写真のように、或る動きの中の一瞬を巧みに写し取る。しかもそれは見られている事を意識していない瞬間の、無防備な、放心した、決して美しいとは言えない、むしろ普通なら醜いと考えられるようなリアルな姿態が多い。そうした点が、志賀がシーンを描く時の刺戟になつたのではないだろうか？

遠藤さんの奥さんにダンスを断る場面も同じである。《私は（中略）静かに慇懃に断つたつもりだつた。所が、気分と体から来る不快が私の声帯で裏切つて居たから何にもならなかつた。》私の意志に、《声帯》という肉体の一部が反逆するのである。（草稿にも同趣旨の一文はあるが、《声帯》が《裏切》るといふ表現はなかつた。） 完成形 では、この後も、声についての言及がしばしばなされているが、言葉の意味という意識・「思想」的側面よりも、声の調子に現われる無意識的・身体的な気分・感情を志賀が重視していることに注目すべきである。

ダンスが進むにつれて、《私はいつか自身の不愉快な気分中毒して了つて（中略）ソファに腰掛けた儘、不愉快な凝結体にでもなつたやうな気持》になる。《不愉快な凝結体》とは、周囲の人々皆を嫌悪し、硬い殻に閉じこもつて、身動きも出来ず、心を開く事も出来ない状態を言うのであろう。そして志賀は、まるで厭がらせのように、そういう順吉とは正反対に《愉快さうに、時々話しながら、時々笑いながら、（中略）烈しく踊つて居る》人々の姿を描写して見せる。話す事も笑う事も出来ない硬直した順吉の身体と、自由な開かれた身体との意地悪い対比である（草稿には、これら二つの文章はない）。

やがて、ウィーラーはダンスの輪を抜け出し、頃合いを見計らつて順吉に近付こうとするそぶりを見せる。《娘は時々此方を見た。私は踊の方ばかりを見てゐた。少時すると、娘は兎も角もと云ふやうに起ち上つた。其時私は凝つと寧ろ一層堅くなつて前からの姿勢を保つてゐた》。立ち上がり方に《兎も角もと云ふ》ニュアンスを読み取る所も見事な捉え方である。そして志賀は、それを見ぬ振りをしながら見て、無意識に一層堅く身構えてしまふ順吉の反応を、やはり《姿勢》によって、指摘するのである。

ここは 草稿 も大体同じであるが、次の一節は 完成形 で新たに追加されたものである。

《其場合若し私が少しでもくつろいだ姿勢に変れたら娘は必ず私の方へ寄つて来たに相違な

かつた。娘は体で話しかけた、所が私の体はそれに答へる自由を失つてゐた。》

意識をも言葉をも超えて、体が話しかけるといふこの見事な場面は、『大津順吉』「第一」のクライマックスと言って良いと私は思う。

大津順吉（志賀直哉）は、キリスト教徒であった時、性欲を生み出す肉体というものを、無理にも軽蔑し抑圧しようと苦闘して来た。だから、彼がキリスト教の抑圧から自らを解放する為には、性欲と肉体を肯定し、身体の声なき声、無意識の言葉なき言葉を無視するのを止めて、それに耳を傾けなければならないのである。つまり、この小説において順吉が、娘が《体で話しかけた》声なき声を聞いたことは、キリスト教という病いからの快癒に向けた大きな一歩なのである。

こういう事がどうして可能になったのかと言うと、物語の論理としては（実際の志賀直哉の場合は、もっと遥かに複雑であるが）、《「心」と「体」とが絶えず恋する者を探》す年齢であることに加えて、ウィーラーと順吉、両者の病気に因る所が大きいと考えられる。人は、健康な時には、肉体の声を無視して生きることも出来る。しかし、病気の時には、肉体の声に従うしかないのである。その意味で、病気はこの小説においては、今後もプラスの意味を持つであろう。この日は、ウィーラーは《永い病気》からの回復の途上だったし、順吉は、自分では気付いていなかったが、類似赤痢のために体調が悪かった。その事が、二人が互いの肉体の声を聞くことを可能にしたのである。

なお、『城の崎にて』や『暗夜行路』末尾にも、病気や怪我で肉体の声に従うことが、主人公を悟りの心境へと導く例が、見られる事を指摘して置く。

さて、順吉はこわばった防御の姿勢を変える事は出来なかったが、ウィーラーが思い切つて順吉の隣に腰掛け、二人は話し始める。会話の内容は、たわいないものであるが、《話してある内に、私は段々に堅くなつて行つた結びつこぶがゆるめられるやうな快さを感じた》。

ここで注目したいのは、ウィーラーについて使われる《子供らしい》という形容詞が、草稿にはなく、完成形で新たに二つ挿入されたことである。即ち、ウィーラーは速夫を話題にして、《子供らしい悪意を見せ》る（草稿では《悪意》のみで、《子供らしい》という形容はなかった）。そして順吉は、《偏屈な、邪気のある不愉快な心理を散々にくぐつて来て私は今、意味もない子供らしい会話の相手になつて了つた。》と描かれている（草稿にはこの一文はない）。ついでに言うと、次の（六）にも、順吉が翌日《娘の美しい細々とした体や、子供らしい其つまらない言葉をてにをは一つ誤らずに憶ひ浮べては、長い／＼痴考に耽つて居た。》という一節があり、ここでも《子供らしい》が繰り返されている（草稿にもこれと類似の一文はあったが、《子供らしい》という形容はなかった）。

子供は、無意識・気分・感情・身体的なものを肯定し、受け容れている存在だ。キリスト教のために意識・「思想」・道徳で雁字搦めになった順吉にとって、子供は回復すべき自由の象徴の一つなのである（もう一つは動物で、これは（ ）「第二」の（二）で述べる）。

（四）の末尾で順吉は、《凝結しきつた心持から多少自由になつ》て辞去する。草稿の方では、先にも紹介した通り、末尾でパーティーの体験を総括し、《其夜は今まで殆ど経験した事のない程に不愉快な晩であつた。》云々と不愉快の棚卸しをしているのに対して、

完成形では、あっさりとも明るい終わり方に変えてある。これは、完成形では、順吉が身体を極端にこわばらせてしまった体験を経て、最終的には身体の声に耳を傾け、子供の柔軟性を取り戻すことの大切さを感じ取っており、解決への大きな一歩が踏み出された一夜だったと、前向きに意味付けているためであろう。

もちろんこれは、小説における意味付けで、実際の志賀は、当時、そこまで深い認識を持ち得た筈はない。

() 「第一」の(五)

これは、パーティーの翌日を描いた章である。不快感から始まるが、最後は回復に向かう。

順吉は昨夜の体験を振り返り、《考へれば考へる程、私が通俗な言葉で云ふ「開けない男」である事が腹立たしくなつた。》(これは 草稿 もほぼ同じ)。《自分は何時の間にこんな男になつて了つたらうと云ふやうな事を考へた》(これは 草稿 にはなかつた)。勿論これは、「こうなつたのはキリスト教のせいだ」の意味である。

「開けない男」とは、体も心もオープンではない人間、《偏屈》な人間のことであろう。「開けた人」「さばけた人」になるためには、自分の弱点や恥も、こだわらずに率直に人前にさらせることが、特に重要である。昨夜の順吉には、それが出来なかつた。自分の弱点や恥にこだわつた。例えば、他の客は皆正装であるのに自分一人みすばらしい格好であること、他の客はダンスが出来るのに自分一人だけ出来ないこと、西洋人と英会話が出来ないこと、体調の悪さ、といった弱点から劣等感を刺激され、自分の殻に閉じ籠もり、逆にダンスをする人々を軽蔑・無視することでプライドを守ろうとした。その結果、自分も不愉快になり、ウィーラーとその母、話しかけてくれた西洋人、ダンスの相手を引き受けてくれた奥さんらに対して、失礼な振る舞いをしてしまったのである。

もともと順吉は、U先生に強さを求めていた。明確には書かれていないが、恐らく順吉にとってキリスト教は、自分の弱点や恥をなくしてくれるもの、罪深い立派でない弱者たちとは異なる、道徳的に非の打ち所のない強者の道、に見えていたのであろう。だから、キリスト教から脱出するためには、先ず強さ・完璧さを志向することを止めなければならない。その意味でも、強者ではない子供や動物の在り方、それに病気が大事な役割を果たすのである。

なお、志賀直哉は、ブリンクリーのパーティーから六日後、明治三十九年十一月六日の「手帳5」に、《何んでもウント強クならねばならぬ、ウント自由ナ人間にならねばならぬ、思ヒ切ツテ怒ルコトの出来る、思ヒ切ツテ笑フコトの出来る、思ヒ切ツテ泣クコトの出来る、何んでも思ヒ切ツテ、他のマジリツ気ナシニ何んでも出来る人間にならねばならぬ》、と記している(《強ク》とは言っているが、弱点がないという意味ではなく、「率直」と言うに近い意味である事は明らかだろう)。また、同年十二月十日付けの「手帳5」に、《自分は近頃理屈の為めの理屈、不平の為めの不平。気六ヶしい顔をしてる為めの気六ヶしい顔が嫌いになつた、(中略)自分は、少し考へが變つて来た、悪くいへば、ナン化したのかもしれないが、進歩したのだ、自己の考へになつて来たのだ。大変自由になつた感がある》と書いている。詳しいことは分からないが、ブリンクリーのパーティーの不愉快な経験は、実際に志賀がキリスト教から自由になる一つの大きな切っ掛けになつたようである(詳しくは別稿で論じる予定)。

ウィーラーのパーティーは、順吉にとっても一つの大事な切っ掛けとはなつたようだが、勿論、人間は一日で生まれ変わるものではない。だから順吉は、ウィーラーについての《長いノ痴考に耽つて》置きながら、《偏屈》にも(草稿 には《 哀哉、偏屈な心! 》はない)、ウィーラーに対して《前夜の不快を書いて送らう》と考え、さらに、手紙ではなくじかに言うべく出掛ける。本当は、ウィーラーに会いたい気持がそうさせたのであろうが...

しかし、道でウィーラーの母に会つたため、予定を変更して渋谷の友達を訪ねた順吉は、留守だったため《其屋敷の裏の広い空地になつてゐる原》の《木の蔭になつた草の上に横になつて、暫くは深い溜息をついて居た。ノ澄み切つた空の高いノ所を白い雲が静かに動いてゐた。時々鳥が飛んで行つた。(中略)不知眠つて(中略)私は幾らか軽い気分になつて

(中略) 帰つて来た。》となる。この休息・眠りは、類似赤痢の体で歩いた疲労を癒すためのものであるが、象徴的には、身体の声・身体の欲求に素直に従うことの必要性、そして、人間の身体が元来そこに繋がっている所の母なる大自然のリズムを受け容れることの必要性、子供または動物に還ることの必要性と快感、を暗示していよう(これは『城の崎にて』や『暗夜行路』の大山の場面等と同様の意味を持つものと言えるだろう)(注49)。

() 「第一」の(六)

順吉が類似赤痢だったことが判明し、祖母の看病を受ける章である。病気であるにもかかわらず、全体に心地よく、癒しの雰囲気漂っている。

祖母の看病については、明治四十年七月八日付け有島壬生馬宛志賀書簡と一致するので、事実通りと見て良い(注50)。

草稿(七)では、パーティーの翌日以降に順吉が類似赤痢と診断されたこと、その時点で《母は末の妹が病気だつたので》祖母が順吉の看病をしたことが書かれているだけで、末の妹の病気の種類も発病時期も曖昧になっていた。それを明確にしつつ簡略化するために、志賀は、完成形では、パーティーの翌日に妹と自分が同時に赤痢と判明したという形に一括したのである。

最初の方に、順吉の居る離れの説明があるが、これは後で必要になるため、ここで説明を置いていたのである。

ここでも病気はプラスの意味を持っている。普段は一人で何でも出来るような傲慢な考えに囚われているが、病気になれば、誰でも他人の世話に身を委ねなくてはならない。それは、赤ん坊や子供の状態への一時的な回帰である。そしてそれが、強い振りをやめる事を可能にし、弱さも醜さも含めて、本当の欲望・身体性・ありのままの自分の現実を受け容れること、即ち本当の自由を可能にするのである。

また、志賀にとって祖母は、実質的には母であった。母は、赤ん坊の時から、弱さも醜さも含めた本当の欲望・身体性・ありのままの現実を受け容れてくれた人なのである。だから、順吉が病気になることにも、祖母の看護を受けることにも、また《祖母の体の独特な香》から《幼年時代を突然に憶ひ起すこと(草稿にはこの事は出て来ない)》にも、そして、「第二」の(四)(五)などで、順吉が祖母に愛着を見せることにも、キリスト教の歪みからの治療的な意味があるのである。

また、順吉が祖母の香に反応したことを、《「犬だネ」》と友達が笑うが(草稿にはこの事も出て来ない)、勿論、作者・志賀は笑っていない。後で詳しく述べるが、動物は子供以上に自然で伸びやかな身体性を有しているからである。順吉が《此経験から色々な人の独特な香(中略)を中々多く自分が知つてゐる事に心づいた》ことも、身体に付随する香を蔑視せず、肯定できるようになったことで、キリスト教という病いからまた一歩前進したという事なのである(注52)。

() 「第一」の(七)

病後の回復期を描いた章である。全体にのんびりとした雰囲気が漂っている。

食欲が回復し、食辛坊になった順吉。これも自然な身体性の肯定であり、一種の幼児回帰でもある。

病気になってからは、身体の声に忠実に従っているから、寝転がって《暢気な気分の本》を読んでいられる。

下腹を温め続けているため、《皮が赤茶けた色に》変色したという部分も、身体的な醜さを、隠す事もなく有りの儘に肯定している所に意味がある。

そして、「第一」全体を締め括る最後の言葉《娘からは其後全く電話がかからなかった。／そして其頃は私も竹葉とか大金とか風月とかをそれ程考へなくなつた。》は、絹ウィーラーの件が完全に終わったこと、主人公にとって絹は、風月等の料理と同程度の、一過性のものでしかなかったことを、暗に示したものと考えられる。草稿では、前に紹介したようなプリンクリーに対する志賀の本当の気持が詳しく説明されていたが、それをカットすることで、元々大して心を惹かれていなかったことにしたのである。

『大津順吉』 「第二」

「第二」でも、順吉が《もっと自由な人間》になろうとするというメイン・テーマは変わらないが、キリスト教を対決すべき相手と明確に定めていた「第一」とは違って、「第二」では、キリスト教の問題・性的な問題はなるべく表に出さないようにし、千代との結婚問題を中心に、個人の自由を妨害している封建的な家族（ひいては社会）という「境遇」との葛藤と「心」の問題が、サブ・テーマとして登場して来る。また、どの時代の青年も必ず経験する、自分は何者で何を為すべきなのかがはっきり掴めなかつたり、自分の才能に自信が持てなかつたりする事から来る焦燥感や、何が問題なのかも分からないまま閉塞感に苛立つといった状況も、よく捉えられている。

なお、主人公の順吉については、「第一」では自己を確立できていない頼りなさ・弱さが強調されることが多かったが、「第二」では、「第一」に比べて実際に強いという訳では決していないのだが、強気で積極的な順吉を意図的に打ち出そうとしている。これは、「第一」がキリスト教への囚われを強調するパートだったため、弱い順吉でなければならなかったのに対して、「第二」では、千代との結婚をめぐる家族と闘わせねばならないためである。

順吉の強気に読者が違和感を持たないようにさせる手段として、「第二」では、結婚問題で衝突するまでは、父の存在感をなるべく無くし、順吉との対立も無いようにしている（「第一」では、パーティーの所で、順吉が父に批判される無力な存在であることが、明確に示されていた）。同時に、順吉を大津家で唯一の大人の男、家長に準ずる存在として印象付けるようにしている。特に千代や妹のうやうやしい態度（例えば「第二」の（五）末尾で、妹が隣の部屋で手をついて「お兄様御飯」と言う等）と祖母・母に対する対等以上の態度が目立つ。これは、実際にもそういう面があったのだが、「第一」ではU先生など大津家以外の人たちとの関係を中心にし、女中や家族との力関係を隠す事で、感じさせないようにしていたのである。

（ ） 「第二」の（一）

兵隊たちとのトラブルを描いた章で、出だしは憂鬱だが、全体的には明るい楽しい章と言える。

時期ははっきりしないが、「第二」の（三）末尾で、ウィーラーについて、《前の年の秋見て以来、半年》と言っている所から、これを五月頃と推定すると、「第二」の（一）（二）も、四月下旬から五月に掛けて、と考えて良さそうである。

この章は、「第一」で弱者という印象だった順吉を、強気で積極的という印象に切り替えることを最重要目的とし、その為に兵隊たちに強い態度を取る順吉を描いたものと推察される。ただし、強い態度を取らせているだけで、実際に強いとは意味付けられていない。

また、強気な順吉を見せる前に、冒頭には神経衰弱を出し、「第一」に引き続き自己を確立できず、また「頭・心」と「体」の不調和に苦しんでいる順吉を垣間見せている。これは、今後、彼が周囲と闘わなければならなくなることの予兆ともなっている。

この章に出て来る兵隊たちは、志賀家のすぐ北側にあった赤坂歩兵第一聯隊所属のもの

思われ、恐らくは概ね事実通りと思われるが、このトラブルについて志賀は全く記録を残していないし、草稿にも出て来ない。草稿段階では、冒頭から順吉を、新渡戸・乃木を批判する強い存在として描いていて、弱者としてアイロニーとユーモアを以て描くという構想になっていなかった為、このエピソードを入れるべき場所がなかったのであろう。

この章ではまた、千代と小犬の「白」をちらっと出して、後で活躍させる伏線としている。

千代の初登場シーンで、千代の肌が《浅黒い》と紹介されていることは、「色白で大人しく従順」という古風なヒロイン像とは異なる少年的な元気さ・無邪気さを予感させる。が、その一方で、千代が《梯子段を登りきつた所に膝をついて、》部屋の外から《「お茶が入りました」》と知らせることは、現代では考えられない封建的身分関係と厳しい礼儀作法を偲ばせるもので、二人の結婚がいかに困難かを予兆するものともなっている。

さて、(一)の冒頭には、《春の末から初夏へかけて私は毎年少しづつ頭を悪くする》とあるが、草稿(十)では《気候が直ぐ気分に影響するのは》《五月の末から七月の初めまで》となっており、こちらの方が志賀の実際には近いようである。「頭を悪くする」は、神経衰弱のことで、当時はよくこの様に言っていた。が、或いは志賀は、順吉がキリスト教的な「頭」(心)と「体」の不調和に苦しんでいることを意識して、わざとこの様に書いたのかも知れない。

日記・手帳・書簡で見える限り、明治四十年に志賀が神経衰弱になった記録は、七月八日付けの有島壬生馬宛書簡に、《凡ソ一週間計り前から、何だか云ふに云はれない不快に陥つて(中略)本当の原因がよくワカラズに随分苦むだ、(自分で自分をあざければ陽気のセイで神経衰弱の気味ともいへるかも知れないが)》と出ると、八月二日の「手帳8」に出るだけである。従って、「第二」の(四)の《不機嫌》も、モデルは同じ七月初旬の分ということになる。《毎年》のことだとされているが、日記・手帳・書簡などで確認できるのは、この他では、明治三十五年春頃(『山荘雑話』)、明治四十三年四月二十一日(日記)、明治四十五年四月末から五月、七月、十二月(『廿代一面』と日記)、大正三年二月(座談会『よもやま話』など)、だけである。

志賀および大津順吉の神経衰弱は、《泥水に浮び上つた錦魚》の心持と言われるように、周囲との不調和、不自由感、閉塞感、焦燥感を伴うもので、キリスト教から来るものの他に、遺伝的体質(留女・直温にも脳病の既往歴がある)・家庭環境・石川啄木が『時代閉塞の状況』で指摘したような時代状況、また青年期には不可避の要因など、様々な原因が重なって生じたものと考えられる。

ここで鳴き立てる隣家の鸚鵡は、実は草稿では、(四)で、佐々木(完成形「第一」(三)の《真理を恐れ始めた》《友達》)に手紙を書く所で、《ケタタマシク啼き立てるのが聴えた。聯隊が直ぐ傍では号令の真似を始めた。》とごく簡単に出るだけだった。恐らくそれは、実際にあった事だったからその通りに書いただけだったのでであろう(モデルの事実から言えば、黒木を不快に思ったのは三十九年秋ではなく、四十年の六月二十八日のことなので、その意味では、むしろ完成形の方が、季節感は合っている)。

しかし志賀は、完成形を書くに際して、この鸚鵡がいろんな意味で順吉の象徴として使える事に気付いた。と言うのは、籠に閉じ込められている鸚鵡は、キリスト教ほか様々な原因で閉塞状況に苛立つ順吉の象徴になる。また、鸚鵡は体の割に特に大きな「頭」が目立つ鳥である。その事が、「頭」ばかりで生きがちな順吉の戯画となりうる。そして、結局最後まで閉塞状況を打破できず、ただわめき立てることしか出来なかった明治四十年の志賀は、全体としてこの鸚鵡になぞらえることも出来るのである。こうしてこの鸚鵡は、順吉を象徴する戯画として、また『大津順吉』「第二」の最初と最後を結び付ける重要な伏線として、使用される事になったのである。

具体的に確認すると、まず、閉塞状況に苛立つ順吉の象徴という意味では、順吉がまさに

《泥水に浮び上つた錦魚の心持》で居た時に、鸚鵡が《けたたましく地声で鳴き立て始めた》としている点が、両者の分身的な類似を表わすものと言える。また、本来は空を自由に飛び回ることでできる鸚鵡が籠の中に閉じ込められて《わめき立てる》ことしか出来ないでいることと、《籠の針金を熱心に噛んでゐる》姿は、閉塞状況にある者の良き象徴となっている。特に、鸚鵡の堅い嘴・乾いた舌と鳥籠の針金の取り合わせは、潤いのない苛立たしい閉塞状況を見事に象徴しているし、針金を噛むことは、人間の爪噛み同様、ストレスを感じさせる。

次に、「頭」ばかりで生きがちな順吉の戯画という側面については、志賀は、《薄黒い円い舌を見せて羽ばたきをして、頭を振り立てながら、わめき立てる其やけらしい様子》や、《あうむは其時短い首を出来るだけ延ばして籠の針金を熱心に噛んでゐる》など、鸚鵡の頭部を主に、そして鮮明な印象を与えるように、巧みに描写していることが指摘できる。

また、理性的に話すのではなく、感情的に大声を出して《けたたましく》《わめき立てる》という身体的なストレス発散を、《人間にもあんな真似が出来たら、こんな時には幾らかいいだらう》と順吉に羨ましがらせていること、そして、その後、勝手に屋敷内に入り込んだ兵隊たちに順吉が大声を出す様子を、《只がみノゝと丁度鸚鵡がけたたましい地声を出すかのやうにわめき立てたのである。》と鸚鵡に結び付けていること、そして順吉が大声を出した結果、《今迄の気分が大分直つ》たとしていること、これらすべてが、順吉が頭と体の調和を失っていることの皮肉な戯画となっているのである。

なお、先にも「第一」()序章で少し触れたように、志賀が、声の調子(けたたましい鸚鵡の地声・只がみノゝとわめき立てる順吉の大声)に現われる無意識的・身体的な気分・感情に敏感であり、それを巧みに使用していることは、注目に値する。「けたたましい声」・「がみがみ声」は、言わば頭だけから出ている声で、頭と体が調和し、落ち着いた気分の時に腹の底から出る深みのある声との違いを、志賀は意識しているのである。

その他、鸚鵡が《「前へ！ オイツ」とか「気を付け……」とか》《号令》を真似て叫ぶことが、いかにも偉そうでありながら、実際には何の力もなく、滑稽でしかないことが、後で順吉が兵隊たちに《「オイ降りないか」》とか《「何しろ帰つて貰はう」》とか命令することが、いかにも偉そうでありながら、本人の頭の中で偉がっているだけで、実際には滑稽でしかないことの皮肉な指摘になっている。

また、千代と順吉の会話で、《「今朝旦那様がお出かけ遊ばした後に士官の方が御出でになりました」》と聞かされ、《「何だつて？」》と順吉がにわかに緊張するのは、この家の真の支配者・権力者は父であり、「もしかしたら自分が知らない間に父が許可を与えていたのかもしれない」と順吉が不安に思ったからである。そして千代が、《「よく解らないから(中略)お留守ですと申し上げたんです」》と言うと、ほっと安心して、順吉が再び勢い付き、《「そんなら駄目ぢやないか」》とまた偉そうに言うという展開も、順吉が地に足の着かない「虎の威を借る狐」「鳥無き里の蝙蝠」でしかないことを表わすためのものである。

最後に、この鸚鵡は、明治四十年の志賀の象徴ともなっている。「第二」の(十三)で、千代を奪い去られ、父に相手にされなかった順吉が、空箱を畳に叩き付ける時、《然しこんなやけらしい様子も余儀なくされてするのでない事を、其時の現在に於て、明かに知つてみた。》《「こんなやけらしい様子も仕まいと思へば直ぐよせる、然しそれを押へたつて偉くもない」》と二度も《やけらしい様子》を繰り返すことで、志賀は、順吉がどんなに怒りを爆発させようとも、結局は籠の中でわめき立てる鸚鵡でしかなく、家や社会に太刀打ちできなかったことを、はっきり指摘しようとしているのである。

念のために言えば、志賀は日露戦争当時から内村鑑三の影響で反戦平和主義者になっていたが、ここでは兵隊を悪とは見ていない。それは、このエピソードを、順吉が社会的悪と戦って、勝利した話にしたくなかったからであろう。《伍長も兵隊も皆善良な人々だつた。》とわざわざ断ったり、無邪気な小犬が兵隊たちにじゃれつくことや、《怒つた顔》の

順吉とは対照的に、千代は《笑ひながら》話すこと、《小さい妹》が兄の大声に《驚いて還つて行つて了つた》ことなどを書き添えているのは、順吉の怒りが八つ当たりのな不当で場違いなものでしかないことをはっきりさせるためなのである。

() 「第二」の(二)

仔犬の「白」を紹介し、かつ順吉が千代を意識し、好きになって行く切っ掛けを説明する章である。明るい楽しい章だが、末尾で電話取り継ぎを巡って、次章につながる暗い影がよぎる。

「白」のモデルとなった仔犬は、明治四十年一月十日の日記に《白犬来る ドウカ達者に育てたいもの》とあり、生後間もなくに貰ったらしい。それが、同年七月五日に《白犬死むであつた 毒殺されたらしい》となる。草稿(十)で、「白」が死んだ際に、《一年にならない可愛らしい犬だつた。》とあるのは、恐らく事実通りなのであろう。

ここで、「白」の仔犬らしい《いたづら》振りが特に強調されているのは、先に「第一」の(四)の所で説明したように、子供と動物(仔犬は両方を兼ねる)が、順吉が目指すべき、意識・「思想」・道徳に囚われない自由な開かれた身体と心の象徴だからである。

「白」にあつては、人間の世界を支配する道徳・秩序・規則は意味をなさない。だから、順吉の父の強大な権力も形無しである。平気で父の盆栽の土を掘る。また、長男で父に次ぐ権力を持つ順吉をも全く恐れない。箒で叩かれても直ぐ忘れる。

この、順吉に竹箒で追い掛けられた時の「白」の描写もまた、なかなか優れたものである。《仕舞に追ひつめられると、尻を丸くして地面へ腹ものども着けて了つて、目を細くして閉口しきつて小便を洩らしてゐる。其癖二つ三つ撲つて許してやるともう直ぐ足へからまりついて来る》。犬の心と体の動きを実に良く観察し、(閉口しきつた)体の表情として捉え、まことに簡潔に描写している。《小便を洩らしてゐる》という所も良い。これは、人間なら恥ずかしいことだが、動物にとっては、恥でも何でもない。それをその儘受け容れることが、順吉および読者を癒やすのである。

志賀は、ここで《竹箒を振りあげて》「白」を追い掛ける順吉を出して置いて、直ぐ次の段落で、今度は千代が《竹箒を丁度私がやるやうな恰好に振り上げて飛び出して来た》姿を出す。これも、まことに見事な手腕だと私は思う(注51)。

これは、映画の方ではgraphic parallelismと呼ばれる技法(注53)で、複数の登場人物などの形・動作などを故意に類似させることで、両者が類似した性質を持っていたり、仲が良かったりすることなどを表わす手法なのである。志賀はここで、二人の動作、そして追い掛ける対象も同じ「白」というgraphic parallelismを使用することで、どんな意識・観念・言語も介在させることなく、順吉と千代の無意識的な共通性・相性の良さを、うむを言わさぬ説得力で、読者の脳裡に刷り込んでしまうのである(ただし、二人の間には、知的な側面などに大きな隔たりもあり、結局、結婚には至らないのである)。

この千代が飛び出して来るシーンは、別の意味でも映画的である。即ち、最初は先ず、《庭の方から尾を下げて》《一生懸命に逃げて来た》「白」だけが倉の陰から見えて来る。犬がしっぽを巻いて逃げるのは、しっぽに噛み付かれない用心なので、順吉も読者も、「白」の後からどんな怖い物が追い掛けて来るのかと思う。すると、それが千代なのである。この予想と結果の落差・意外性が、強い新鮮な印象を与える。

しかも、竹箒を振りあげて犬を追い掛けるということは、常識的には大人の女性らしくない振る舞いである。それをやったことで、千代は大人の女性と言うより、子供らしく無邪気であるという強烈な印象が、読者にも順吉にも与えられる事になるのである(七月七日の「手帳7」にも、Cは《別に偉い女でもない、憐れな女でもない、何んとなく無邪気な所のある女だ》とある)。

もちろん、千代と言えども普段からこの様に振る舞っているのではない。現に千代の初登場シーンでは、千代は主人に対する厳しい礼儀作法をきちんと守っていたし、この後もそういうシーンが多く、ここは例外と言える。この時は、千代からは順吉の立っていた場所が死角になって見えなかった為に、ついやってしまったことなのである。が、だからこそ、普通なら隠す真実の姿が無邪気だという事になり、それだけに一層、印象的であり、また魅力的なのである。

ところで、先に述べたgraphic parallelismは、同じ倉の陰から相次いで飛び出して来るという点で、「白」と千代との間にも成り立っている。この事によっても、「白」と千代が共に子供らしく無邪気であるという印象が、読者の無意識に刷り込まれる仕掛けになっているのである。

後の(七)で、「白」が行方不明になった際に、《私には此小犬が私と千代との間で何かの役をしてゐるやうな気がしてゐた》と書かれているが、志賀は、作品の終わり近くで連れ去られてしまう千代と、毒殺されてしまう「白」を、共に貴重な、そして失われやすいイノセンスの象徴とするために、「白」をなるべく千代と結び付けて読者に提示するように工夫しているのであろう。

ちなみに、後年の作だが、『矢島柳堂』ものの『鶴』(大正十五年一月発表)に、柳堂は鶴という鳥からいつも《十四五の美しい小娘》を連想すると言い、《今から十何年か前、京都に住んで居た頃、町家のさう云ふ小娘に對し、彼は或しくじりをした。(中略) / 最初彼は自身のした事を甚く良心に咎め、弱つて居たが、年が経つに従ひ、それもそれ程には思はなくなつた。そして却つて、その小娘を美しい気持で色々憶ひ浮べるやうになつた。よく夢にも見たが、それは決して彼を不愉快にするやうなものではなかつた。そして何時とはなし彼の頭では、其小娘と鶴とが結びついて居た。 / 同じ女が今は既に三十歳だといふやうな事は、彼には考へられなかつた。》と書いている。これは、恐らく女中Cを主たるモデルとし、美化を施して書かれたものであろう。志賀は動物と結び付くような無邪気な少女が好きなのである(注54)。

() 「第二」の(三)

(二)の末尾で、ウィーラーからの電話に対して、祖母と母が警戒の色を見せたことを伏線として、ウィーラーからの電話と写真のことが描かれる。全体に冴えない気分の章である。

時期は、末尾でウィーラーについて、《前の年の秋見て以来、半年》と言っている事と、続く(四)に《湿気の烈しい、うつたうしい気候》とある所から、梅雨入り前で、五六月頃と推定できる。

志賀家では、電話は母屋の茶の間のすぐそばにあったらしく(草稿(九)による)、直哉は離れに自分の部屋があったため、電話がかかると、女中が呼びに行くことになっていたらしい。祖母や母の部屋は茶の間に隣り合っていた為(旧全集・月報9の志賀家間取図による)、二人が電話に出て取継がなかったり、女中が出た場合も取継がないように命令するという事も、全く考えられないことではない。

完成形では(恐らくは草稿でも)、ウィーラーの電話が取継がれなかったことは、後で千代との結婚問題に「家制度」が干渉して来る先駆けという意味が与えられており、(四)(五)の祖母との衝突の直接の引き金ともされている(草稿(十)でも祖母との衝突と関係付けられているが、完成形ほど明確ではない)。しかし、これは創作である可能性が高い。

何故なら、《「何だか余り度々なので止さうかと思ひましたが、昨日歸つて参りましたもんですから……」》という問題の電話は、五月二十九日の「手帳7」から、五月二十八日の

電話の際に言われたことが判る（注55）。

しかるに、志賀が祖母を呼んで話し合ったのは、日記等によれば七月六日であり、ブリンクリーの電話からは丸一ヶ月以上も隔たっている。

また、ブリンクリーとの音信自体、六月九日に志賀が葉書を出した記録が日記にあるのが最後で、以後は、電話も手紙も来なくなったようである。そして、後で詳しく述べるが、祖母との話し合いについて報告している明治四十年七月八日の有島壬生馬宛書簡にも、ブリンクリーや電話取継問題は一切出て来ない。そして、不快の原因は、祖母が志賀を《愛しては呉れるが少しも解してはくれぬ》ことだったとしている。つまり、祖母との対立とブリンクリーの電話とは、実際には関係がなかった可能性が高いのである。

さらに、五月二十九日の「手帳7」には、ブリンクリーの《何んだか余ンまり度々ですから》云々という発言を聞いても、「意味が分からず不審に思った」というようなことは全く書かれていない。従って、電話を取り継がなかったという事件は、実際には無かった可能性もある。五月十二日の日記には、《稲より電話かゝりしと、》と記されていて、留守中にブリンクリーから電話がかかったことの報告が、少なくとも一回はなされたことが確認できるのだが、取り継ぎがなされていなかったことが発覚したという記述は、どこにもない。そうした干渉は、当時の日本では、確かにありふれた事ではあったのだが、前年、ブリンクリーのパーティーに出掛けた時にも、志賀家の家族が反対だったという話は、『大津順吉』にも、志賀の記録にも出て来ないし（注56）、志賀の遺した日記・手帳・回想の類からは、志賀家の人々が二人の交際を妨害しようとした痕跡は、何一つ見出せないのである。

「手帳」の文言を殆どそのまま使いながら、意味をすっかり変えてしまうという例は、『大津順吉』の場合、八月十四日の「手帳8」の意味をすり替えて使った「第二」の（八）の例がある。私はここも、五月二十九日の「手帳7」の記述から思い付いて、電話を取り継がなかったという、いかにもありがちなエピソードを創作した可能性が高いと思っている。

（ ）「第一」の（三）で述べたように、実際の志賀は、四十年五月二十九日の「手帳7」で、稲からの前日の電話について、《I. Bは自分を何んと思つてゐるのだらう、他の人にもあゝなのであらうか、（中略）自分は自分の知つてゐる女の内では、I. Bが一番美しい人であると思つてゐるのだ、左うして全く愛してゐないワケではない》など書いていた。

また、草稿のこの章に該当する（九）では、ウィーラーからの電話の直後に《自分は此娘と話した後はいつも気分が変化した。》とあり、好きであることが示されていたし、ウィーラーから写真が届いた際には、「手帳7」とほぼ同様に、順吉は《自分が娘にとつて、一人か、多勢 少なくとも何人かの一人であるか》を気に病むことが書かれていた。そして、順吉がウィーラーに「電話が茶の間のすぐそばで具合が悪いので、電話より手紙を寄越して貰う方が良い」、と書いて手紙を送ったが、返事が無く、自分からもそれっきり出さず、関係が途絶えるという書き方になっていた。志賀の日記で見ても、六月九日に志賀がブリンクリーに葉書を出したのがブリンクリーとの交渉の最後なので、草稿の方が事実に近いと思われる。

しかし、完成形では、貰った写真のウィーラーが、別人のように再び太ってしまったことで、ますます関心を失い、自然、関係が途絶えたような書き方になっている。草稿等にはウィーラーが太ったという記述はないので、これもフィクションかも知れない。

なお、Impressions ではない方の「手帳1」（旧全集第8巻所収）に、ブリンクリーからの電話と思われる次のような記録がある。

《己が美を誇り切つて女が、自分寫真をくれていふ事には、「本當に可笑しいんですよ、よござんすか」「エ、」「可笑しな顔に撮れちやつたんですよ」「さうですか」と男は平気である、お前の顔が可笑しく寫らうが美しく寫らうが自分にとつてそれ程大した事ではないから「さうですか」といふより他にない、女はもどかしい、「他の方に見せちやいけませんよ」「ナゼ」「だつて可笑しいんですよ」「いゝぢやありませんか」「いゝえいけませ

ん、貴方も、餘ンまり度々見ちやいけませんよ」「承知しました」と男は真面目である、》書かれた時期ははっきりしないが、この次に六月二十三日付けのメモがあり、その次の、島崎藤村の『老嬢』（明治四十年一月刊）と二葉亭四迷の『其面影』（明治四十年八月刊）についてのメモがこの「手帳」の最後の記事である。プリンクリーからの電話は、志賀が残した記録では、五月十二、二十八、六月七日の三回しかない。他にもあった可能性はあるが、一応、六月七日の電話と見て置く。

草稿 では、この電話に基づき、ウィーラーが「自分の写真を別に仕舞って置いてくれ。」と頻りに頼むことを書いているが、《可笑しな顔に撮れちやつた》からだとは書いてないし、《貴方も、餘ンまり度々見ちやいけませんよ》という発言もないので、なぜ別にして貰いたがるのかははっきりしない。強いて想像すれば、二人が親しくしていることを順吉の家族や友人に知られたくないのだろう、と推測できる程度である。

完成形 でも大差はないが、《誰方にもお見せなすつちやあいやですよ。貴方も余り見ちやあ厭ですよ》という言葉が付け加えられた結果、恥ずかしがっていることだけは解るようになった。

この「手帳1」の記録は、五月二十九日に「手帳7」に《自分は自分の知つてゐる女の内では、I.Bが一番美しい人であると思つてゐるのだ、左うして全く愛してゐないワケではない》と書いた時に比べて非常に冷淡になっている。しかし、『大津順吉』のように、太って美しくなくなった、とは書いていない。原因は不明だが、志賀の心は、六月に入ってから急速にプリンクリーから離れたようである。プリンクリーとの交際の記録が、六月九日で終わるのも、その一つの結果であろう。そうした志賀の心の変化は、七月七日に初めてCを愛していると「手帳7」に記し、以後、急速にCへの愛情を募らせて行くことの原因または結果であろう。

完成形 では、ウィーラーのことは、基本的には「第一」だけで終わらせる方針であり、ここでは、千代との結婚を巡る家族との対立の前触れとすることと、(六)以降、順吉と千代の恋愛に集中できるようにするために、順吉のウィーラーに対する感情を完全に終わらせる都合から、ここにウィーラーを出しただけと考えられる。

この章でもう一つ重要なのは、ウィーラーに送る自分の写真について、写真屋で撮った《如何にも気六ヶしさうに、寧ろ陰気な顔に写つ》たものと、友達に撮って貰った《最も通俗な意味でいい顔に撮れてみた》ものとの、どちらにするか迷ったが、ベートーベンやU先生の顔が良いという価値観から、《結局私は矢張り可恐く写つた方を選ばずにはゐられなかつた》というエピソードである。これは、順吉がまだキリスト教と内村鑑三の価値観に囚われていることを表わそうとしたものである。

日記によれば、志賀は四十年五月十六日に望月という写真屋で写真を撮り、さらに十八日に友人の細川護立に撮って貰ったことが確認できるし、志賀が内村から離れるまでには、まだ一年余りかかっている事から、これは概ね事実通りと見て置いて良いであろう。しかし

草稿 の(九)では遥かに簡略にしか書かれておらず、キリスト教の価値観に囚われていたせいだという解釈は、完成形 に至って初めて思い付いたものらしい(注57)。

() 「第二」の(四)(五)

祖母との軋轢を扱った章で、(四)は終始不機嫌であるが、(五)の末尾で気分が直る。

この二つの章の目的は、一つには、個人間の愛情よりも「家」の利害が優先され、若い男女が勝手に愛し合わないよう厳しく監視されていた当時の封建的な家族(社会)と順吉との葛藤、中でも、祖母との愛憎を描くことである。その中には、順吉が目指していた金銭を離れた精神的な仕事(この点では、順吉とU先生とは目標を同じくしていた)を全く理解できない旧世代との葛藤関係が含まれる。前者は、千代との結婚をめぐって、この後、ますます

激しく現われることになるサブ・テーマであり、後者は、(十二)末尾で、もう一度、取り上げられるモチーフである。

次に、モデルとなった事実との外形的な異同を簡単に述べると、先ず(四)の祖母との遣り取りは、日記によれば、七月五日午前の出来事で、(五)は翌六日午前のことである。それを草稿(十)・完成形ともに一日に圧縮している。ただし、特に(四)の祖母との遣り取りの内容(草稿(十)も完成形と殆ど同じ)は、概ね事実通りのように感じられる。

また、(七)に出る「白」の死体発見は、日記によれば、実際は七月五日午後のことだったが、草稿では事実通りに描き、完成形では、いつかはっきりしないが七月二十日以降月末までの出来事のように描いている。これは、祖母との軋轢と「白」のことを時間の順序に従って一緒に書くと、どちらの印象も薄れてしまうので、別々にしたかった事と、千代を好きになったことを先に書いてから、イノセンスにおいて共通する千代の分身的な存在として「白」の死を描く方が、より効果的であることから、実際より後に回したのであろう。

また、草稿(十)には、五日午後に武者小路実篤に来て貰った事実が書かれていたが、完成形では削除された。紙数節約のためと、順吉一人に焦点を当てて、友人関係(そして家族も妹たちや弟)は殆ど全面的にカットしている作品の基調を、なるべく乱したくなかったからであろう。

また、草稿(十)には武田(武者)が「人間の価値」という論文のようなものの内容を話して聴かせたことが出ていたが、これは、実際には明治四十年五月二十六日の夜、武者が来て、《世のあらゆる悪は、人間が人間の価値を認めぬによつて起るといふ真理を発見した》と語ったこと(「手帳7」明治四十年五月二十七日)をここへ移して使おうとしたものである。武者はこれを演説「人間の価値」として六月四日に学習院で演説し(志賀も聴いて、明治四十年六月八日の有島壬生馬宛書簡で報告している)、『荒野』に収録している。『荒野』によってその内容を略記すると、「真心から為す真の善と真の快樂・幸福が一致し、真の利己がそのまま人類の為になるように人間が創られている所に人間の価値はある。George Frederic Watts のThe Happy Warrior(幸福なる戦士)のように、《自分の主義の為に戦ふて、功成らずに誰人にも認められずに死んだ勇士》の美しく清く安らかな、幸福な死に方が出来る所に人間の価値はある。地上に不幸な人が一人でも居る間は真の快樂・幸福を味わうことが出来ず、不幸な人の為を計る事によってのみ幸福になれる所に人間の価値はある。しかし世の人々が人間の価値を知らないために、幸福になれずにいるのだ。世の人々に人間の価値を知らせるためには、人間の価値を発揮して一步も譲らず、遮るものを破って行くことが必要だ。そうすれば「神の国」をこの世に建設できる。」といった趣旨である。

これは、Cとの事件に臨む際の武者の考えであるだけでなく、武者の影響が強かった当時の志賀の考えでもあったから、事実と比較的忠実だった草稿の段階では入れようとしたが、この価値観はキリスト教的・観念的で、完成形での「第二」には合わなくなった事もあって、削除したのであろう。

次に、モデルとなった事実との内容的な異同としては、先にも述べた通り、(四)(五)を通じて、電話取継問題と祖母との対立とが、密接に関連している事を草稿より強調した点が、完成形の大きな特徴である。

即ち、完成形では、(二)末尾に、ウィーラーの電話について、《祖母も母も押黙つてゐるのが何となく無心でないやうに感ぜられた。》という伏線が張られている(これは草稿にはなかった)。そして、続く(三)で、祖母が電話を取継がせなかったことを、千代の証言ではっきりさせた後、ウィーラーから届いた写真をわざと母と祖母に見せたことを記し(これらは草稿(九)にもある)、(四)の冒頭で《私は其頃祖母に対して何となく不快でならなかつた。私【初出では《娘》】に対して或警戒でもしてゐるやうなの

も私の気分を苛々させた。》（草稿にはこれに該当する記述が無い）と、電話取継問題が不快の一因であることを明確にして、祖母が順吉の御機嫌を取ろうとする話に移って行く。だから、（五）で祖母が入って来るなり順吉が、「……若しお祖母さんに少しでも僕を監督しようといふやうな気があれば、それは大変な間違いですからネ」と話し始める時、《監督》するとは、主に「女性との交際を監督する」の意味だと見て間違いはない。

それに対して、草稿の方では、（九）で祖母が電話を取継がせなかったことが出て来た時に、《自分は祖母を二階へ呼んで怒らうかと思つた。》とあるのと、電話が茶の間のそばで具合が悪いとあることから、（十）での衝突の際の「僕の監督をしようとするのは大間違いだ」と言う所に、電話取継問題が含まれているのだろう、と想像が付く程度である。

また、順吉が、祖母を呼んで話をしようと思う原因も、草稿の方では、白の死について祖母が、「誰でも余ンまり意地きたなしをすると白のやうになつて了ふ」と言ったことに対する腹立ちが中心である。だから、いざ祖母が部屋に入って来て、「何んです？」かういはれても自分にはハツキリとこれといつていふべき事もなかつた」となる。そして、その後の順吉の発言も、殆ど自分の仕事についてのものである。

恐らく、草稿の方が事実に近いのであろうが、その分、焦点が定まらず、雑然とした散漫なものになっていた。その為、志賀は虚構の軸を一本通して、引き締めたのであろう。

次に（四）のみについて注目したいことを挙げて置く。

一つは、順吉に相手にされず、祖母が寂しく帰って行く所で、草稿では、《かういつて降りて行つた。／ 祖母が居なくなると直ぐ自分は独り散々泣いた。》となっていたのを、完成形では、《こんな事を云ひ／＼静かに用心をしながら急な梯子段を降りて行つた。ドンと一番下の段を降りる音が暫くして聞こえた。／ 其後で私は独り泣いた。》と変更している点である。

昔の日本の家では、一般に階段が今より急であつたし、この離れの階段は、「第一」の（六）によれば、当時としても《恐ろしく険しい》ものだったようである。志賀の祖母・留女は天保七年（一八三六）生まれであるから、明治四十年（一九〇七）には満七十一歳。今より老けるのが早かつた時代の七十一歳であるから、脚も相当に弱っている。だから用心をしながらゆっくり／＼降りなければならず、最後の一段を降りる時には、膝に弾力がない分、ドンという音がするのであろう。その間、順吉はじっと耳を澄ましながら、階段を降りる祖母の身体の動きを心の眼で追っている。そして、ドンという音と共に、涙が思わず涙腺から迸つたであらう。『大津順吉』では、草稿段階より完成形の方が、身体的なものの捉え方が一段と細やかに、鋭く研ぎ澄まされ、それが作品の質を高めているのである。ここは、ちょっとした違いに過ぎないが、やはりそういう例として、敢えて指摘して置きたい。

（四）で注目したいことの二つめは、右の描写の直ぐ後に出る、隣家の温室のガラス屋根に反射した夕日が順吉の部屋の天井に映って《ギラ／＼と赤味を帯びたものが震へる》のが《気分の悪い時には一番いけない事》であるとか、「油煙がコロ／＼と行列を作つて転げ回る」のに腹を立てるとか、夜が更けてしーんとして、淋しさに襲われる時に、《ゴトツ、ゴトツと老人でもつぶやくやうな厚味のある音をチューブの中でスティームがたててくれる》のが不安な心持を慰めてくれる、という一節である。

これは、ストーリー的、論理的には無意味に近い一節なのであるが、無意識的・気分的・感情的・身体的なものの間接的・象徴的な表現には、こういう神経的で、好き嫌いに過ぎないようなものの方が、却って効果的なのだと思う。特にこの場面では、気候から来る不機嫌や祖母に対する不満に加えて、泣いて頭痛がして、そのまま昼寝をして目覚めたばかりという、一番頭がもやもやしている時なので、一層、適切な感じがする。

志賀が、声の調子に現われるものに敏感で、それを巧みに使用していることは前に述べたが、《ゴトツ、ゴトツと老人でもつぶやくやうな厚味のある音》は、落ち着いた気分の時に

腹の底から出る深みのある声と似ている為に、不安な心持を慰めてくれるのであろう。

次に（五）についてであるが、草稿では、先にも述べたように、肝心の祖母との対決が、《自分にはハツキリとこれといつていふべき事もな》く、やや取り留めのない遣り取りで終わってしまう感があった。これは、実際の志賀と祖母との話し合いがそうであったためらしい。

明治四十年七月八日の有島壬生馬宛書簡での説明によれば、《一週間計り前から、何だか云ふに云はれない不快に陥つて（中略）本当の原因がよくワカラズに随分苦むだ、（中略）不平は祖母に対する不平なのだ、二日計りは一切此方から口をキカナイでプリノ、怒つて居た、》《祖母は僕を非常に（中略）愛しては呉れるが少しも解してはくれぬ（中略）僕の不平はこれだつたのだ》。《昨朝は（中略）あんまりクサノ、してやりきれなかつたからトウノ、二階に祖母を呼んで、不平のタケをブウブウ並べた、思ふ事をスツカリ云ふつもりだつたが、自分でも何むだか自分のいふ事がよく解からなかつた。（中略）静かに秩序を立て云つた所が逆も通じない所を、只「おバアさんは駄目だノ、」いつた調子なので、凡そ一時間位何か云つてみたが遂にいひたいと思つた事は少しも通じなかつた、（中略）がそれでも何か通じた或るものがあつたのだ、そんな無意味な事をしてゐる内にスツカリいゝ心持ちになつて了つた。（中略）遂に和睦といふ事になつた、祖母も何の事がワカラヌなりに喜ぶでゐる（中略）それから一緒に裏の枇杷の実を取つた、となる。

この壬生馬宛書簡及び草稿に比べると、完成形の（五）は、比較的論理的に整理されていて分かり易い。そして、余裕とユーモアがあつて面白い（書簡もリアルで面白いが、草稿のこの場面は面白くない）。その原因の一つは、書簡及び草稿では、祖母の発言を相手にせず、殆ど取り上げていないのに対して、完成形では祖母の発言も取り上げ、すれ違ひはすれ違ひなりに、よく活かして使っている事である。

例えば、完成形には、書簡及び草稿には無い次のような一節がある。
《祖母は極端に私を値打のないものにしてゐる。それが少し可笑しくも思はれた。
「そんな事を云つて、一体僕が何をしてゐるか、何を考へてゐるかがお祖母さんに解りますか？」

「ええ、解ります。毎朝寝坊をして、学校は休んでばかりゐるし、毎日お友達の所へ行くか集めるかして、やあ芝居だ寄席だと、そんな話ばかりしてゐる……」

「へえ、それが何です。」

「用と云つたら手紙一つ本統に書けもしない癖に……書けないのもいいが読めもしない癖に……」》

祖母の見方・考え方の方向性は明確である。一方、順吉の目指す方向性も明確である。明確なもの同士が明確にすれ違っているから、対立の原因も、二人の人間像も、よく分かるのである。

その上、ここでの祖母の批判は半ば当たっている。そこにユーモラスな可笑しみがある。しかし、祖母の批判は半ばは見当違いである。順吉は遊びほうけているのではなく、小説家を目指しているいろいろと勉強中なのだし、手紙は書けないのではなく、古臭い儀礼的な手紙を書くことを無意味なことだと思つているだけなのである。それが理解できない祖母の古さを、順吉と読者は、一緒に余裕を持って笑える仕組みになつているのである。

順吉は最後に、《「どうせ理解は出来ないのだから、迷信的に信じておいでなさい」》と締め括っているが、祖母の発言を読めば、順吉を祖母が理解できないことは明らかであり、そうである以上、迷信的に信じて貰う以外に、愛する祖母を安心させる方法が無いと言うのも、決して好い加減な気休めではない。論理的な結論であり、かつ真心から出た祖母へのアドバイスなのである。祖母には理屈は解らないが、順吉の愛情は無意識的に通じる。だから二人とも（そして読者も）気分が良くなれるのである。

実は草稿にも、《理解しなくていゝから迷信的にでいゝから信じてみてくれゝばいゝ

のだ》という発言が最後の方にあった。しかし、草稿では、その前に祖母の考えを明確に表わす発言がなく、順吉の主張ばかりが一方向的に並べ立てられているために、順吉との対立の原因が最後まではっきりしない。しかも、《「何しろお祖母さんなんか駄目なんだから」》という、論理抜きに祖母を頭から否定する言葉が、最後に付け加えられる（壬生馬宛書簡によれば、実際の会話では頻りに使ったらしいが、完成形では使っていない）。その為、草稿の方では、《信じておてくれよばいよのだ》も、相手を馬鹿にした傲慢な発言としか聞こえない。草稿は、最後まで《祖母は何の事が解らなかつたらしい。それでも自分の気分は大変よくなつた。》と、自己中心的で、自分さえ良ければ良いと言わんばかりである（完成形ではちゃんと、《祖母も何となく愉快さうに見えた。》と付け加えている）。

また、草稿では、順吉が《自分の将来の仕事》は《富や名誉に換算されるものではない》、《実世間的の》《仕事》ではないというひどく抽象的な理屈（正論ではあるが）を振りかざして、それを理解しない祖母を頭ごなしに否定しようとしている所に、読者は反感すら感じる（既に成し遂げたなら威張っても良いが、実際には何も出来てないからこそ、祖母は心配しているのだ）。それに対して、完成形では、《私だつていまに何かしますよ。》としか言っていない。「具体的に何が出来るかは分からないが、何かは出来そうな気がする」というのは、まだ思うような作品を書けていないけれど、夢と希望を抱いて頑張っている青年・順吉の発言として、より適切で、真情の籠もったものであり、共感できるものなのである。

一方、壬生馬宛書簡では、志賀は自分が主張した理屈は全く駄目なものだった、お祖母さんに解らなかつたのは当然、《自分でも何むだか自分のいふ事がよく解らなかつた》と認めて、自分の発言内容を具体的には何も書いていない。そして、理屈ではなく《何か通じた或るものがあつ》て、二人とも良い気持になったことを、感情というものはそういうものなのだ」と明確に自覚して書いている所が面白く、優れている。完成形では、二人の会話をもっと論理的に構成しているが、最後は理屈を超越した所で、二人とも良い気分になる点は同じなのである（注58）。

なお、（五）で祖母が順吉に言おうとしていることは、「まっとうな社会人に早くなれ」ということで、「第一」の（四）で順吉を心細い心持にさせる父の言葉《大学を出たら必ず自活して呉れ》と、本質的な差はない。また、祖母の発言の中には、《「お前はお父さんが平常どんな事を云つとんなるか知らないから、そんな事を云ふんです」》とか、《お父さんや親類からはお祖母さんが甘やかしたから、あんなやくざになつたと云はれる》という言葉があり、祖母が順吉の父から聞かされた批判を踏まえて小言を言っていることは、明らかであろう。「第一」の（四）で《「いまに何かする」かう思つても、それが何時の事が少しも見当がつかなかつた。》と書かれてから、この半年余りの間に、順吉が小説家として自信をつけるような事が何か一つでもあつたとはどこにも書いてないのに、志賀は何故、ここで順吉に《私だつていまに何かしますよ。》と妙に自信ありげに発言させるのだろうか？ しかも順吉は、これより後の「第二」の（十二）では、《仕事に対するその烈しい野心と、実際持ち得る自信とは何処か不均衡な所のあるのは自分でも感じてみた（中略）其時の現在に於て、多少なり自信を持ち得るやうな仕事が出来てゐなかつた》と再び認めているのに。

私はこれを、矛盾とは考えたくない。同じ一人の人間が父親に対する時と祖母に対する時とでは、気分や言うことが変わってしまったとしても、それは少しも不思議なことではない、人間は必ずしも論理的には生きていない、という志賀の考えの現われであると解釈したいし、そういう志賀の考えを私も支持したい。順吉は祖母の前に出ると元気になり、強気になり、バラ色の未来に今にも手が届きそうな気分になる。ところが父の前に出ると、すぐに結果を出さない限り許して貰えないと感じ、今の灰色の現実を思い出し、自信もなくなるのであろう。

なお、小説の都合から言うと、次の（六）からは、千代との結婚が焦点になって来る訳で、結婚を考えるためには、ましてや、家族の反対を押し切ってそれを実行するためには、自活できなければ話にならない。だから、モデルとなった志賀の事実には反していても、ここで《私だつていまに何か仕ますよ。》と自信満々の順吉を読者に見せて置かなければいけない。そういう都合もあった、と私は思っている。

（ ）「第二」の（六）

千代への愛情を自覚し始めた順吉を描く章であるが、迷いがあるため、気分は今一つすっきりしない。

以下ラストまで、千代との恋愛を語る章が続く。

志賀とCの恋愛の実際と順吉と千代の描かれ方との異同については、「一、予備的考察」の「『大津順吉』はどこまで事実忠実か？」で、既に比較検討を終えているので、以下ではなるべく繰り返さないようにし、志賀が『大津順吉』で意図していた、キリスト教的正義感など「頭」中心の生き方に災いされて、誤った結婚に突っ走ってしまった順吉の無様な恋愛・無様な青春が、いかに見事に正確に描かれているかを中心に、鑑賞を試みたい。「『大津順吉』はどこまで事実忠実か？」では、「事実とは異なる」とか「無様」とか批判めいた言い方で（本当は批判ではないのだが）述べていた同じ事柄を、志賀の意図を見事に実現したものとして賞め贅える事になるので、面食らわれる方もあるかも知れないが、私の論旨においては少しも矛盾はないのである。

さて、この章では、初めて愛を自覚した後、急速に愛が昂進する過程を、日記を引用する形で辿っている。ただし志賀は、順吉が千代を本当に好きなのかどうかすら確信が持てず、「頭」中心の、甚だ理屈っぽい観念的な思考に終始するよう、「手帳7・8」の記事を書き変えている。

順吉が愛を自覚する理由を志賀は、《不機嫌な時に千代と話をすると、それが直ぐ直る事がよくあつたので》気付いたとしているが、これは常識破りでユニークで、純愛物語でないからこそ可能になった、面白い捉え方だと思う。

こうした捉え方は、四十年当時の「手帳」には出て来ないが、一応、志賀の実体験に基づくもののようで、明治四十二年九月十七日以降に書いたと思しき「手帳12」〔手帳後より〕の、Cとのことを小説にするための覚書の中に、《不機嫌は直らなかつた。然千代と話した場合だけ愉快的心持がある。》と記されている。

これはしかし、事実通りに書こうとしたものでは恐らくなく、半分は順吉の恋愛が決して熱烈なものにならないことを予告し、強調するために選んだ表現であろう。

そして、残りの半分は、意識より無意識を重視する（順吉の、と言うよりは）作者の考えの表明でもであろう。「機嫌」は感情・無意識・体調に強く左右されるもので、「道徳」や「礼儀」から不機嫌になってはならないと意識していても、コントロールが難しいものである。その「機嫌」をバロメーターとして信頼することは、無意識的なもの・身体的なものを重視する志賀のユニークな作家的信念と言って良い。例えば、『暗夜行路』後篇第四の六の《何でも最初から好悪の感情で来るから困るんだ。好悪が直様此方では善悪の判断になる。それが事実大概当るのだ》という一節に見られるような好悪の感情に対する信頼も、これと根底を同じくする考え方なのである。これについては別稿で詳しく論じたいと思うが、志賀はキリスト教からの離脱の過程で、こうしたものの見方を信念を持って身につけて行ったのである。

「不機嫌」云々には、やや誇張があると思うが、恋愛というものは、必ずしもすぐに、意識ではっきりと、「これは恋愛だな」と分かるものではない。恋愛経験が少ない若者なら尚更である。だから、順吉のような青年が「彼の事を考える時に苦しみ（愛で胸が締め付けら

れるような気持)を感じずる」とか「三時間、顔を見ないと淋しさを感じずる」とかを自ら観察して、「これは恋ではないか」と意識し始めるといふ捉え方は、恋愛心理の捉え方として、極めて正確だと私は思う。

また、七月十一日・十五日の日記で、順吉が早くも結婚について考えていることは、普通の恋愛とは違っているが、順吉としては当然の事なのである。何故なら、順吉の場合は、キリスト教の教えから、結婚するつもりのない相手に恋をしてはならないと考えていたし、結婚するからには必ず添い遂げねばならないと思っていた訳だから、少しでも好きになりかけると、この女性への自分の気持、そして二人の相性は、結婚にまで推し進めるべき程のものかどうかを急いで見極め、進むべきか退くべきかを直ちに決めなければならなかったからである。

七月十一日の日記では、自分に《愛を云ひ表すだけの勇気がない》ことを《悪い意味で》の《利口》さと批判し、それは《彼が美しい女でない事》《彼が自分と自分の仕事を解するやうな女でない》ことから、《結婚はしたくないと云ふ気が充分にあるからである》と説明している。これは、(八)の箱根で、《要するに私の躊躇は千代がそれ程美しくない事、及び千代の家が社会的に低い階級にあると云ふ事などから来てあると云ふ風に、寧ろそれは脅迫観念的にさう考へられた。私は私の虚栄心を殺す事が出来ればそれで此問題は片がつくのだと考へた。》という正義感への観念的囚われへの伏線である。

七月十五日の日記では、《自分はK.W.をも愛してゐるかも知れない。然しあの貴族主義な女とは徹頭徹尾結婚は出来ない》《自分は自分の仕事と撞着する結婚は断然出来ないと決めてゐる。K.W.とは此の最後の条件でどうしても相容れない。千代に於ては此点に少しの撞着もない》と十一日に続いて再び《仕事》との撞着を問題にしている。現実的に結婚を考える以上、仕事との関係が問題になるのは当然であろう。順吉が大学卒業後、田舎の中学教師をしながら小説を書くつもりであることは、「第一」の(三)に書かれていた。それを踏まえて、贅沢な生活を求める(これを「貴族主義」と呼んでいるようだが)ウィーラーとはとても結婚できないが、千代なら大丈夫ということなのである(しかし、仕事に関してもう一つ大切な「理解力」については、実際の志賀の場合は最後まで問題になり、二人が別れる大きな原因となった)。

また、七月十五日の日記の末尾には、《千代との関係が雇人と雇主の関係であるのが甚だ物足りない》とあるが、『大津順吉』では、これは恋愛感情の表現の一つに留まっていて、順吉は婚約するまで、この点について何ら行動は起こしていない。

一方、実際の志賀は、「手帳8」によれば、「互いによく理解し合った上でなければ結婚したくない」が、「雇主の子と雇人という対等でない関係では、いつまでたっても互いを理解し合うことは出来ない」という考えから、実際にこの日Cに申し入れ、取り敢えず「友達」になる約束をしている。そして、その後、何度かCを部屋に呼んで長話をし、その上で婚約ということになった訳である。だから、実際の志賀は、婚約前にかなりよくお互いを知り合い、恋愛感情も強く、自然な流れで婚約し、肉体関係に進んだ訳である。しかし、順吉の方は、友達になることはなく、従って殆ど話らしい話もしないまま、観念的に「頭」の中だけで恋愛をし、婚約へと突き進むことになる。つまり、順吉の観念的な「頭」中心の恋愛を描く上で、友達にならなかつた事は、とても大事なポイントなので、私は、志賀がその事をはっきり意識して、故意に二人を友達にさせないことにした、と考えている。

続いて二十日の日記では、最初の段落で、順吉が《雇人と云ふ者に対して今迄になかつた同情を持つやうになつた》こと、次の段落で、千代が家族に愛され、我が儘を言って育つたことを聞いて、《一寸異様な感じがした》ことが書かれている。これらは、十五日の日記で挙げた結婚の条件の一つである《自分が其人をよく知》ることを目指した結果という事なのである。が、千代が普通の家族の中で育つたことを、志賀の事実と反して(「一、予備的考察 『大津順吉』はどこまで事実と忠実か?」参照)《異様》と感じたことにしているの

は、その前の順吉の雇人に対する「同情」なるものが、非常に観念的なものに過ぎないことを暴露する意図で書かれたものと思う。本当に千代も雇人も自分と全く同じ人間なのだと実感した上での「同情」なら、千代が家族に愛され、我が儘を言って育ったことも、当然のこと、微笑ましいことと感じる筈である。これは、順吉が、悪気は全くないが、キリスト教やら文学やらを頭の中で捏ね繰り回しているだけの、観念的で社会の現実とうとい青年であることを表わし、同時に、順吉と千代の生まれ・育ちが違い過ぎて、結婚してもうまくいかないことを暗示するためのものなのであろう。

念のために付け加えるが、志賀は別段、人道主義や社会主義の立場から、順吉を非難しようとしている訳ではない（むしろ非難すべきだという人もいるだろうが、私も志賀直哉も、芸術としての文学は、人道主義や社会主義の宣伝の道具ではなく、もっと遙かに優れたものであると信じている）。何かの「思想」・観念（人道主義・社会主義も含めて）に囚われること自体の危険性を指摘しているだけである。そして、青年とは、得てしてこういうものなのである。

続いて、千代と湯殿の小窓越しによく目を合わせたことが描かれる。《神経質に日に幾度か手を洗ふ》順吉の癖は、キリスト教的な潔癖性と結び付いているものであろう。

《千代はいつでも怒つたやうな可恐い眼つきをして私の方を見てゐた。》とあるが、これは、明治四十二年の「手帳12」〔手帳後より〕に《湯殿で顔を見合はせる》というメモがあるので、一応、実体験に基づくものではあろう。しかし、志賀は、初めてCへの愛を記した七月七日の「手帳7」で、《Cの眼はよく何かを語る、余は眼で余の心を彼に話して了つた、彼の眼も何か返事した。》と書いていたし、七月十一日には、《彼は余の傍で用をする事を好むやうである》《彼の眼と余の眼は日に幾度会つて、口づけするかよ》と書き、七月十五日には友達になっている。こうした点から考えると、『大津順吉』では、敢えて事実と反して《怒つたやうな可恐い眼つき》にすることで、順吉と千代との間の距離を強調したと考へた方が良さそうである。或いは、順吉を好きである気持を千代が無理に抑え付けている為にそうなるという考へも、志賀にはあつたかもしれない。また、壁の《小窓》には、そこから目を見合わせることは出来ても、二人が結ばれることは阻む強力な「壁」があることを象徴させているのであろう。

日記中心であるため、総じて観念的なこの章の中で、最後の《怒つたやうな可恐い眼つき》は、唯一身体的で、鮮烈な印象を与える。それは、順吉の観念性を暗黙の内に浮き彫りにし、順吉に対する志賀の批評を代弁しているとも取れるであろう。

() 「第二」の(七)

犬殺しと白の死を語る恐ろしい章である。

先にも述べたように、白の死体発見は、実際は七月五日午後のことだったが、効果を考へて、七月二十日以降、月末までの出来事のように描いている。

犬殺しについては、志賀は記録を残していないが、『大津順吉』を信じるならば、白の死体発見より五日から七日ぐらい前のことで、六月二十八から三十日の間ぐらいの出来事だったと考へられる。草稿には描かれていないが、実際にあつた事と見て良いだろう。

この犬殺しの描写は、身体的なものの捉え方が鋭く研ぎ澄まされており、まことに優れたものだと私は思う。

最初の《二階の部屋で本を読んでゐると、表の往来で不意にキャン／＼と烈しい犬の啼声が出て、続いて棒か何かで肉体を直接に撲るバツタン／＼と云ふ気持の悪い響が聞えて来た。全く受け身なむごたらしい犬の悲鳴と棒の音とが暫く入り乱れて(中略)仕舞にそれもたうとう止んで了つた。》は、直接眼に見えるように描写して見せるより、音だけ聞くことによつて、むごたらしさ・肉体的な痛さが効果的に伝わって来る。見えないだけに、主人公

と一緒にあって、犬の悲鳴と棒が体に食い込む鈍い音に、読者は自分も耳を澄ましているような気持になり、犬の痛みを強く想像してしまうせいであろう。『大津順吉』において、志賀は声や音に現われる身体的なものを巧みに使っていることが多いが、ここもその一つである。

しかし、さらに優れているのは、犬が殺されるのを見て強いショックを受けた、まだ小学校一年の男の子を描写した、この後の部分である。

《其春から小学校へ通ひ出した肥つた男の児が、開いた大きな洋傘を肩にかついで堅くなつて二三歩先の地面を見つめて急ぎ足で其方面から帰つて来た。顔色を変へてゐる。そして息をはずませながら、小声で、「犬が殺された……犬が殺された」こんな独言を云ひながら、真直ぐに自分の家の門を入つて行つた。車を引いた羅宇屋煙管の爺が、「坊つちやん／＼」と声をかけたが子供は振り向きもせずに入つて行つて了つた。》

志賀は子供の身体に現われたショックを实によく見ている。肩にかついでいる傘は何のためか、その前に雨が降っていたのか、日傘代わりにさしていたのか、いずれにしても、恐怖で呆然として、傘の事など忘れていた風である。体が《堅くなつて》いるのも《顔色》が青ざめているのも、恐怖感のため、自分が襲われたような気持になり、無意識に自分の身を守ろうとしているからである。こういう時、人間の体は、襲われて怪我をしても余り出血しないように、血管が収縮し（その為、顔が青くなる）、筋肉も堅くなるという防御反応が自動的に起こるのである。《二三歩先の地面を》じっと見据えているように見えるのは、実は何も眼に入らなくなり、ただ犬が殺された恐ろしい場面が目に焼き付いて離れない為である。

《急ぎ足》は早く安全な家に逃げ込みたいから、羅宇屋に声を掛けられても耳に入らないのも、同じ理由からである。《息をはずませ》るのは《急ぎ足》のせいもあるが、恐怖感から、運動能力を高めるように呼吸が速く浅くなる防御反応のせいもあろう。「犬が殺された」と繰り返し独言を言うのも、犬が殺された事以外、何も考えられなくなっているからだが、それでも繰り返し言葉にして声に出すことで、意識化でき、多少は落ち着けるのである。実際には、二階から見ていた志賀には、この子の独言は、正確には聞き取れなかったであろうから、推測で書いたのだろう。

志賀（順吉）自身は目撃していないのに、目撃した少年の身体から、彼が目撃したものを読み取ってみせる。これは、なかなか出来る事ではない。

この犬殺しと、それにショックを受けた子供のエピソードは、千代とも白とも、直接の関係は無い。しかし、恐らく志賀は、この犬と子供によって、『大津順吉』のテーマの一つである自由な身体とイノセンスを象徴し、それが社会によって圧殺されてしまうことの恐ろしさを表わしたのであろう。

この直後に、心配になった順吉が「白」を呼ぶと、《頭も尻尾も低く下げて、転がるやうに滅茶苦茶に駈けて来た。そして無闇と胸へ飛びついた。》と、生きる喜びを全身で表わす「白」の姿が描かれているのだが、これも、殺された犬およびショックを受けた子供との間に強烈なコントラストを付けることで、自由な身体とイノセンスの価値を強調したものと考えられる。そして、この《頭も尻尾も低く下げて、転がるやうに》という描写も、全速力で走る時の犬の姿勢の特徴を、実的確に、実に簡潔に写した見事なものである。

続いて門の所へ順吉が出て見ると、《労働者としては綺麗な顔立ちをした、シャツ一枚の若者がむしろをかけた小さい荷車を挽いて、急ぎ足で丁度前を通る所だつた。私は其興奮した赤くなつた顔を見ると、立派に「兇行者」の表情があると思つた。》とある。

《労働者》という言葉は、当時は今より狭い意味で、下層の貧しい肉体労働者を指していた。夏の《シャツ一枚》の服装からはみ出した筋肉は、犬殺しに相応しい逞しさであろうし、白いシャツと対照的に《興奮した赤くなつた顔》は、流血を暗示する。

《綺麗な顔立ち》は、事実そうだったからそう書いたのではあろうが、綺麗であることが、逆に悪魔的になる事もある。また、綺麗を目指すことは、有りの儘の自然を、「汚い」

ことを理由に綺麗に消し去ってしまうことも、決して珍しいことではない。目的の正しさを信じていればいる程、人間は冷酷になるのである。この犬殺しも、狂犬病予防という衛生上の目的で、野犬駆除に雇われているのであろうが、名目は何であれ、実際にやっている事柄の野蛮・残酷さに変わりはない。

また、《綺麗な》若者の赤い顔に表れた《興奮》は、この若者が、実は殺害に本能的な快感を感じていることを暗示している。志賀がこの若者を、《「兇行者」》というかなり特殊な言葉で呼んだのは、「兇」という文字で、日本人の深層心理の中に潜んでいる血を流すことを嫌う神道的な「まがこと」「まがまがしい不吉な罪・穢れ」という感覚を呼び起こしたかったからであろう。『祖母の為に』の夢の中で、《「何か居るぞ！」（中略）「凶」かう云つた見えない力が此家中を一ぱいに支配してゐる、こんな気がした。》と出る「凶」に通じる語感なのであろう（注59）。

《綺麗な顔立ち》の《「兇行者」》は、自然な生命・身体を尊重しない、野蛮で不吉な悪魔的存在であり、一方、犬殺しにショックを受けた《肥つた男の児》や殺された野犬は、体型も顔立ちも綺麗ではなかったかも知れないが、自然・有りの儘に生きていた筈なのである。

続いて章の後半では、「白」の行方不明、そして死体発見が描かれる。

死体発見は日記から七月五日午後と分かり、草稿を信ずるなら夕方ということになる。『大津順吉』によれば、行方不明になったのは、その二三日前であるから、七月二日か三日ということになる。志賀は二日と三日は、友人達と三浦半島の三崎に遊びに行っていたのだが、それは『大津順吉』には出て来ない。先にも述べたように、『大津順吉』では、友人関係（そして家族も妹たちや弟）は殆ど全面的にカットし、順吉に焦点を絞っているからである。

ここでも、《真白かつた毛が炭の粉で薄よごれて、前足は前の方へ、後足は後の方へ真直ぐに延ばしたまま腹をペツタリ地へつけて、妙に平つたくなつて死んでゐた。》という死体の身体描写、特に《妙に平つたくなつて》という所に実感がある。生きていた時にはふっくらしていた体毛が、死ぬとぺちゃんこになるため、《妙に平つたくな》るのである。

一緒に飼われていた赤が、《平気らしい顔で、死骸の方は見向きも》しないとか、《腰を下して横腹の蚤を噛んでゐる》即ち、ナルチスティックに自分のことに没頭している、というの、仲間の死の受け止め方が人間とは異なる犬の現実をしっかりと見据えていて、リアルである。

赤を殺すつもりを「白」が食べたらしい、ということもあって、千代が赤に八つ当たり気味に、《「エイ、憎らしい！」と平手で強くその頭を撲》ったことは、かつて竹箒を振り上げたシーンに続いて、千代の大人の女らしくなく、子供っぽく純情な所が窺え、印象的である。

この時、一緒にいた者たちが千代と一緒に悲しみ怒るという訳ではなく、《皆は笑つた。》と突き放した終わり方にしているのも良い。

それはまた同時に、千代が例外的に、他の人々より強く「白」を愛していたということの意味している。それは、千代と「白」が共に子供らしく無邪気だからであり、だから順吉も千代と「白」を愛したのである。

この「白」の死体発見の場面は、順吉の胸中を一切語らず、客観的な突き放した描写に終始しているため、印象が非常に鮮明である。千代以外にその場にいた《皆》とは具体的には誰であるのかさえ明らかにしていないことが、却って千代の孤立と悲しみを際立たせる。

一方、同じ場面を扱った草稿（十）では、先ず《上の妹》（モデルは英子）が《「イヤだ」といふやうなワザとらしい表情》で《「白が死むであるの」と》順吉に告げる所からシーンが始まり、《由子》（モデルは淑子）と祖母が「白」を食辛坊と言ったことに順吉が腹を立て、後で祖母を呼んで話し合うという展開になっていた。此方の方が恐らく現実に近い

いのであろうが、順吉の感情を逆撫でした妹たちと祖母を消し、順吉の感情さえも消し去り、千代と犬にだけ焦点を当てた完成形は、焦点の鮮明さで圧倒的に優れていると思う。

() 「第二」の(八)

前半三分の一で箱根における順吉の考えを描き、後半は、愛の告白と婚約を描き、ストーリーの転回点となる重要な章である。結果的には婚約するが、終始迷いに満ち、不快感が強い。

志賀は順吉を、実際の自分より遙かに観念的な青年として巧みに造型している。そして、二人の婚約の経緯を無様でちぐはぐで惨めなものとする事で、順吉の観念性を容赦なく暴き出して見せるのである。が、既に「一、予備的考察 『大津順吉』はどこまで事実忠実か？」で詳細に取り挙げているので、ここではなるべく重複を避け、別の観点からの指摘を中心にしたい。

正義という「観念」への囚われを脱するという志賀のサブ・テーマが、この章で一番はっきり現われているのは、《私は函根で考へた。が、それは狭苦しい中で、どう／＼廻りをしてゐるやうな考へ方であつた。小さな帳面に千代の事をことして、私は色々な事を書いてみた。要するに私の躊躇は千代がそれ程美しくない事、及び千代の家が社会的に低い階級にあると云ふ事などから来てゐると云ふ風に、寧ろそれは脅迫観念的にさう考へられた。私は私の虚栄心を殺す事が出来ればそれで此問題は片がつくのだと考へた。》という一節である。人に自慢できる美人の妻を持ちたいとか、家柄を気にするような間違つた《虚栄心》によって、身分差別という不正に僅かでも荷担してしまう事を厭う不潔恐怖症的な正義感と、《どう／＼廻り》を続ける苦しさから、順吉は誤つた結婚へ向かつて突き進んでしまった、という作者の考えの中心点が、ここに示されているのである。

ところで、この箱根での想念は、七月十一日の日記での、自分に《愛を云ひ表すだけの勇気がない》のは《悪い意味で》《利口だから》だ、という考えと全く変わっていないと言つて良い。つまり、この《どう／＼廻り》は、実は最初に愛を自覚した時から、ずっと続いているのである。なぜ、そうなってしまうのかと言えば、その一番の理由は、順吉の千代への愛が、言わば「頭」の中に留まつたまま、現実的には、この一ヶ月間、一步も進展していないからである。そしてそれは、七月十一日以前も以後も、順吉と千代が、用事を離れ心を開いて仲良く話をしたことが、一度もないからである。順吉はただ黙つて千代を眺め、千代の映像を「頭」の中で反芻していただだけである。これでは結婚すべきかどうか、決心の付きよう筈がない。それなのに順吉は、決心が付かない理由を、身分差の問題にすり替え、「頭」で考えた正義の理屈によって、無理矢理「心」を決めようとするのである。

順吉は《二週間でも三週間でも千代を離れて考へる必要がある》と思つてわざと千代を連れて来なかつたというが、これも本当は逆であるべきだったのである。千代を連れて来て、なるべく多く一緒に話をすべきだったのである。連れて来ないで一人で考えているから、ますます「頭」の中だけになり、《どう／＼廻り》になってしまうのである。勿論、志賀は、それを百も承知の上で、わざとこのように設定しているのであるが...

実際の志賀は、七月十一日の「手帳7」で箱根にCを連れて行くべきかどうかを考えた際、《連れて行けば、彼はホゞ解かる》し、《連れて行けば、彼を妻にする気になるか断然断念するか決心が自分につくだらう》ことをメリットとしての確に挙げている。志賀は順吉のように観念的ではないからである。もっとも、実際の志賀も、《永い間同じ部屋にゐれば(中略)愛情も益すだらうし、或る誘惑も力をかそうし、危険である》という理由で、キリスト教的な性の抑圧から、箱根にCを連れては行かなかつたのだが、その代わりに、箱根に行く前に、Cと友達になって、或る程度、時間を掛けて話し合っている。だから実際の志賀

は、《脅迫観念》のせいではなく、自然に婚約できたのである（それもまた、「好き（like）」や「セックスをしたい」というレベルだった相手を、「一生を共にすべき相手」と思い込んだ「若気の過ち」ではあったのだが...）。

正義感から来た《脅迫観念》に加えて、もう一つ順吉に影響を与えたのが、たまたま読んだツルゲーネフの『片恋』の《こんな事（こんな恋）はこれから先にもまだ幾らでもある、もつと嬉しい事があると考へてゐた。然し遂に来なかつた》という意味の句で、順吉はこれを《運命の暗示》として強く受け止め、《これを進まずに避けるならば、それは（中略）臆病者の行である。》と、脅迫的に受け取った。恋愛結婚が滅多に実現しない時代状況からすれば、無理からぬ所であろうが、本に強く影響されたというこの挿話は、やはり順吉の観念的なあり方を強調するために選ばれたものであろう。また、《眼のただれた見すばらしい貸本屋》（注60）という描写は、この本屋が、温泉地の逗留客相手の、主にレベルの低い本を扱う貸本屋に過ぎないことに読者の注意を向けさせ、店主の《眼》が《ただれ》ているとする事で、この店の本の《暗示》は、言わば悪魔が呪われた運命へと騙し導こうとする罠のようなもので、信じるべきではないことを、暗示しようとしたものなのであろう。先の《脅迫観念》と言ひ、この《眼のただれた見すばらしい貸本屋》と言ひ、この後の順吉と千代の婚約に、暗い不吉な影を投げ掛ける暗いイメージを、志賀は巧みに配置しているのである。

なお、順吉は、七月十一日の日記では《勇氣》を問題にし、箱根では《虚栄心》に負けることと《臆病者》になることを恐れていた。「二、解釈と鑑賞の試み」（ ）「第一」の（五）で述べたように、順吉は「道徳的に非の打ち所のない強者の道」を求める傾向が強く、それがキリスト教に囚われたり、「頭」を偏重して心身のバランスを失う原因になって居た。結婚についても、順吉は同じ過ちを繰り返す事になるのである。

順吉は、箱根で「頭」の中での結論は出したが、当然、帰京後もまだ《堅い決心が出来て》おらず、《帳面に「若し此決心が一年、変らなかつたら」とか「結婚するにしても今のCには二三年間の学校教育が必要である」》とか煮え切らないことを書いている。千代という現実と直接ぶつかって話し合ってみない限り、順吉の観念的《どう／＼廻り》が続くのは当たり前なのである。

そこで順吉もやっと重い腰を上げ、《千代が私をどう思つてゐるかをはつきり知らずこんな事を考へてゐても仕方がない》と、分かり切ったことをやっと思い付く。しかし、まだ話もしない内から、《若し千代に約束した人とか好きな人とかがあれば自分は一も二もなく念ひ断つて了はうと思つた。私は千代にさういふ人があつてくれればいいと思ふ心さへあり得たと思ふ。若し千代に許婚があると云ふ事であつたら、私は失望しながら喜んだかも知れなかつた。》と、むしろ断られることを期待するのである。これは、「頭」中心の順吉には、結婚を巡って「頭」の中で《どう／＼廻り》が続く苦しさ比べれば、失恋しても結婚のことを考えなくて済むようになる方が、魅力的に思えたからであらうか。それとも、本当の所、《結婚はしたくないと云ふ》気持の方が強かつたからであらうか。千代の事件が最後まで描かれていないので、断定することは難しい。

こうして、ようやく愛の告白が始まる。が、それは愛の告白としては、世界の文学史上にも希な、全く頭と心と体がばらばらの、そして二人の気持がちぐはぐな、まことに奇妙なしろものとして、見事に描かれている。

順吉は《愛してゐる》と告白はするものの、急いで《然し決して熱烈な愛といふ程度のものではない》と付け加える。確かにこれは嘘ではない。正確と言へばまことに正確だ。が、本来、感情の問題であるものを、そのように「頭」で正確に処理しようとする事自体が、アンバランスという印象を強烈に与える。

文章の技巧としては、
 《愛してゐるといふ事を話した。》
 《然し決して熱烈な愛といふ程度のものではないといふ事も話した。》

という対句仕立てが、「愛している事」と「熱烈ではない事」とのちぐはぐさを際立たせる。

続く二つの文も対句仕立てである。

《私は縁側へよつた隅の机に背をつけてみた。》

《千代は次の四畳半から敷居を越した所にかしこまつて坐つてみた。》

対句が持っている二つのものを比較対照する作用が、順吉と千代が対照的な存在であること、そして二人を隔てている距離が意味するものを強調する。即ち、（隣家の庭に臨む）《縁側》と（階段に近い隣の四畳半との）《敷居》はこの部屋の両端にあり、二人はまるで、なるべく間を広く取ろうとするかのように離れて座っている（注61）。それは、順吉は主人であり、千代は女中であり、二人はその身分関係とその儘に向き合っているからなのである。二人はこれから対等に話し合おうとするのではなく、まるで御白州で御奉行様と罪人が向かい合っているかのようなのである。

順吉が《机に背をつけてみた》という設定は、志賀の身体的なものに対する鋭敏さを改めて感じさせる。心からの愛に突き動かされている若者は、もっと力の籠もった、動きやすい姿勢で、女性に向かって積極的に迫って行こうとするものである。それに対して、順吉が《机に背をつけ》ている事は、言ってみれば「背水の陣」のようなものであろう。即ち、順吉は言わば敵（千代、そして結婚するかどうかという問題）を恐れ、逃げ腰になり、しかし、「これ以上、後ろに退いては《臆病者》になるから」と諦め、いやいやながら事に当たろうと覚悟はしている、しかし、「むしろ千代に許嫁が居て、結婚の可能性がなくなってくれた方が良い」と内心思っている、そういう姿勢なのである。《机》は大津家の御曹司・この部屋の所有者としての権威を表わし、順吉は《机》にへばりついていることでやっと安心できる。そこから進み出て、千代と対等の裸の人間として、心を開こうとはしないのである。

一方、千代の《かしこまつ》た姿勢は、女中という分際からは一歩たりとも踏み出すことは出来ないものと諦め切った姿勢である。

順吉は「千代との結婚」を恐れる気持から、必要以上に警戒し、結婚は話題にすらしめないようにするつもりだった、が、その結果は、箱根で体験した《どう／＼廻り》の不愉快さの再現となってしまう。そしてそれを順吉は、箱根の時と同様、自分が千代との結婚に及び腰である臆病さ、自分の本音は隠して相手にだけ本音を言わせようとする道徳的不純さのせいだと考え、自己嫌悪に陥るのである。

順吉が自分の醜さに耐えられなくなった事と、千代が順吉を想いつつ諦めていると告白した事から、順吉はようやく積極的になる。即ち、結婚の事も話題にし、許嫁または恋人の有無を尋ね、千代が「ありません」と答えると、《若し結婚を申し込んだら貴様は承知するか？》と尋ね、それが実質的に結婚を申し込んだ事になって、一応、婚約が成立したような形になる。

しかし、千代は拒否こそしなかったものの、積極的に喜んで結婚を受け入れた風にも見えない。千代は身分違いの結婚に不安を感じ、「身分が…」と言ったのである（そして、この不安は正しく、結婚は間違いだったのである）。ところが、順吉は元々身分違いを気にし、正義の味方でありたいと思っているだけに、それを《諾かな》い。これを男らしく立派な行為と考えるのは、観念的な自称「正義の味方」だけだ。順吉は実は相手の言葉と今の気持を無視し、一方的に強引に、観念的に正しいと信じ込んだ結婚を押し付けようとしているだけなのである。（ちなみに、「第二」の（一）にも、《興奮》した順吉が伍長の弁解を《諾かなかつた》ケースがあった。順吉の悪癖なのである。）順吉は《いつか興奮して》、《母の不細工な金の指輪》を千代の指に穿めてやり、接吻するが、その行為は、二人の愛の高まりによって自然に行なわれるのではなく、順吉の独りよがりな興奮から押し付けられるだけなのである。

志賀は、順吉のプロポーズに対して、千代が喜んだことを窺わせるような表現は一切して居ない。それどころか、千代の気が進まない事を暗示するような身体的な兆候を、いつもの鋭さで、繰り返し描いているのである。

例えば、(許嫁も恋人も)「ありません」と答えた時も、《千代は真面目腐つた表情をしてゐた》し、《若し結婚を申し込んだら貴様は承知するか?》と尋ねられた時にも、《千代は一寸驚いたやうな顔をして黙つて下を向いて了つた》。そして身分違いへの懸念を言おうとした。指輪をされた時も喜びの反応はなく、接吻の時も、ただされるままにじっとしていただいけのように描かれている。その総仕上げとして、志賀は千代を気絶させるのである。

この夜、二人の心と体は、終始全くかみ合っていなかった。しかし、千代の体と心が、柔らかい温かい喜びの反応を示すことが出来なかったのも、遂には気絶という一種の拒絶反応にまで至ったのも、本当は千代が悪いのではないのだ。順吉が、千代が本当に心を開くことが出来るような環境を整えることなく(本当はもっと何週間もかけて、理解し合い、対等になる事が必要だったのだが)、千代の体と心の動きに全く鈍感に、自分の方の都合と独り決めの観念だけで、正義の味方のつもりで、強引に結婚へと突き進もうとしたことの、これは当然の報いなのである。

順吉の《興奮》は、千代が気絶すると、たちまち冷める。これは、一面から言えば正しい、自分の観念的な正義の《興奮》が全くの空回りで、千代に喜ばれていないことに遅まきながら気が付けば、そうなるのが当然だ。しかし、もし順吉が本当に千代を愛していたのなら、気絶した千代を《冷か》に《凝つと》眺めたりはせず、すぐに本気で心配し、介抱したであらう。

順吉は自分が悪いことに気付かず、千代の気絶を単に身を守るための意識的演技と邪推する。《邪推》とは、回転は速いが現実との接触が不十分で、空回りしている自己中心的な頭脳が生み出す妄想である。意識的で自己中心的な順吉は、他人の内にも自分と同じ、意識的・自己中心的な意図を見出しがちなのである。しかし、意識的演技でこそなかったが、接吻以上のことを千代の体が無意識に拒もうとしたことは、恐らく事実だろう。

この時、順吉の冷やかな目に映った千代を、志賀は《汗で後れ毛の附いた首筋を見せて》《畳に突伏してゐる。》と描写する。この(八)章は、観念的な順吉の想念を主に描いているため、これまで身体についての鮮やかな描写は少なかった。その中で、箱根での《眼のただれた見すばらしい貸本屋》という描写と、接吻をする際の、《二夕月程前(中略)懐中時計を受け取る時に、私の指の先が千代の掌へ一寸さはつ》て《案外堅いのには驚いた》という回想と、ここが優れた描写となっている。これらは、三つ共に順吉の観念的な理想主義を嘲笑し、幻滅させるもの、と言える。最初は「結婚せよという暗示だと受け取る順吉に対する」、二番目と三番目は、「女性の身体に対する順吉の期待に対する」嘲笑である。しかし、disillusionment(幻滅)は、illusion(幻想)より正確な現実認識である。主人公が間違っているとしても、読者には真実が与えられているのである。或いはむしろ、順吉の観念の破れ目から現われるからこそ、これらの身体描写は、真実の優れた描写として、読者の心に刻み込まれるのだと言うべきかもしれない。こうした美しいとは言えない真実の身体性を、自然なものとして受け入れられないような理想主義なら、それは有害無益だというのが志賀の考えなのである。

この後の《顔色のよくない肥つた田舎から出たばかりの書生が狼狽した態で独りまご／＼してゐた。》という描写、そして千代が一人では歩けず、他の女中二人に助けられて、女中部屋に還って行ったという描写も、同様に順吉の観念的な理想主義を嘲笑し、幻滅させる身体的描写である。そして、《其後暫くは私は一種云ひ難い不快な心持に被はれてゐた。》と、順吉の幻滅を以てこの章は締め括られるのである。

() 「第二」の(九)

婚約に続く五日間、志賀の実際に即して言えば、八月二十三日から二十七日までを描く章である。婚約の発表と家族の反対が主な内容だが、出だしは（八）の気分を引きずり、冴えない。しかし、家族が反対したことで、順吉の行動に迷いがなくなり、ちょっと見には力強い印象を与える。ただし、肝心の千代との関係がかみ合っていないのだから、これは見掛けだけに過ぎない。また、章の最後では、母の同情を得て、明るい気分になって終わっている。が、これも長続きはしない。

「手帳12」明治四十二年六月二十六日の「濁水」の構想メモの中に《彼の事件は最初めは彼対Cの問題だった次に彼対家族の問題になった、最後には彼対当時尽力してくれた人の問題となった。》とあるように、Cとの事件の中心が「志賀対C」の二者関係だったのは婚約発表までで、発表後は「志賀対父・母・祖母」の段階に移り、Cが連れ去られた後は、志賀を支援した武者・勘解由小路資承・有島武郎・田村寛貞や、忠告した内村鑑三・徳富蘆花ら、多数の人々が入り替わり立ち替わり関わる段階になった。

『大津順吉』「第二」の（六）から（九）の始めまでは、「志賀対C」の二者関係だった段階が中心で、この段階については、事実にかなり手を加えて、実際より遙かに観念的な、すっきりしない恋愛にしており、順吉・千代の設定は、志賀・Cとは一致しない所が多い。作品のトーンも、「頭」中心である事から来る不調和と不快感が中心になっていた。

（九）の途中で婚約が発表されて以降は、「志賀対父・母・祖母」の段階に入るが、『大津順吉』はその途中で終わってしまい、「志賀対当時尽力してくれた人」の段階は、武者のことが少し出る以外は描かれない。「志賀対父・母・祖母」の段階の、小説に描かれた範囲内では、事実の大きな変化はなく、当時の実際の志賀と順吉のずれも、婚約以前に比べれば、比較的少ないように感じられる（手帳類の記述が、婚約以後の方が簡略なため、確実なことは言えないが）。

ただ、一つ注意して置きたいのは、順吉の家族に対する戦い方である。『大津順吉』では、千代との結婚を反対された順吉は、父・母・祖母に対して、恋愛結婚の正当性を、キリスト教と西洋の近代的人間観に基づいて、論理的に説明して説得しようとして試みていない。しかしこれを、志賀が論理的・思想的な頭脳を持たないせいだと解してはならない。この書き方は、志賀が意図的に選んだものなのである。

「一、予備的考察 『大津順吉』はどこまで事実に忠実か？」で述べて置いたように、事件当時の志賀は、キリスト教の信仰に基づき、互いをよく知り合っている恋愛結婚が理想の結婚であること、身分・階級は人間の価値とは無関係であり、従って身分・階級が違ふことを理由に結婚に反対するのは間違いであること、等をはっきり信念とし、意識していた。そして『或る旅行記』（五）によれば、事件当時の実際の志賀は、《彼自身のアツフェヤーを総て正義の為めといふ考へからばかり考へてゐ》て、《権利を主張し、理屈をいふ点では（中略）烈しかった》し、祖母を理屈で説得しようとも試みていたらしい。八月二十八日の「手帳9」に《理屈で押しつめやうとするのは無益である》と書かれているのは、理屈で説得しようとして失敗した時のメモであり、恐らくは祖母に対しての事であろう。

しかし、この小説の中で、もし順吉にそうした正論を言わせたなら、『大津順吉』は文学ではなく、「議論」になってしまう。そして、恋愛結婚に関しては、順吉・千代・重見がいかなる問題もなく「正しい存在」で、父・祖母が単純明快に「間違った存在」になってしまうだろう。志賀が書きたかったものは、そういう単純明快な「議論」ではなく、順吉の（そして人間一般の）、特に青春期には起こりがちな、奥深い複雑な内面的な問題だった。従って、葛藤は、単純明快な「正しい存在」と「間違った存在」の間の「議論」という形で現われるのではなく、順吉自身の心の奥深くに隠れ潜んでいるものとして表現されなければならないのである。だから志賀は、順吉と千代との恋愛も、正しい純愛としては描かず、順吉が内面的に迷い悩みながらする、問題の多い、青春の錯誤として描いたのである（注62）。

例えば、「第二」の(九)の八月二十六日の所では、順吉は、祖母が「千代に暇をやる」と言った内容ではなく、《その云ひ方が如何にも憎々しかつた》ことに《かッと》なって、《烈しく祖母を罵》り、祖母も興奮して自殺しようとする。志賀はここを全く論理抜きの、感情のぶつかり合いとして見事に描いている。しかし、「手帳9」の九月十五日(回想)には、《二十六日、午前祖母と激論する、》とあり、実際の志賀は、確かに感情的にもなったであろうが、《激論》の中には、論理的に自分の意見を述べ立てることも含まれていた筈なのである。

『大津順吉』で順吉に正論を言わせないように、いかに志賀が注意深く避けているかは、以後、必ずしも指摘はしないが、注意して読めば分かるはずである。

また、私は、順吉が実際には強くないこと、父に勝てないことを指摘する場合が今後あると思うが、それは、順吉および『大津順吉』という小説の価値を否定するという意味ではない。家族との対立においても、順吉は、頭から袋をかぶせられたような、籠の中のオウムのような閉塞状況に苛立ち苦しむのであるが、そうした状況を実に的確に描いている所にこそ、この作品の芸術的価値があると私は考えているのである。

(ア) 八月二十三日(注63)

章の冒頭は、婚約の翌朝で、千代が、《血の気のない顔をして他の女中と縁側にぴつたりと坐り込んで(中略)父の客で使つたナイフやフォークを磨いてゐる》姿から始まる。これは、千代が惨めな女中たちの一人に過ぎない事を、縁側に這いつくばった身体的姿勢や、西洋料理で客をもてなす金持を父に持つ順吉に対して、千代はその食器を磨く使用人に過ぎない事実などを通して、強調するためのものであろう。

《血の気のない顔をして》いて、《成るべく》順吉に《顔を見られないやうにしてゐる》千代の身体からは、婚約の喜びは全く感じ取れない。

順吉が婚約を手紙で発表しようとしたことは、志賀の事実通りであり、早くもまだ箱根にいた八月十一日の「手帳8」で、Cが結婚を承知して家族に打ち明ける時には、《口では云ふまい、手紙に書いて見せやう、》と考え、《祖母はCを愛してゐる筈であるから多分不賛成は云ふまい、母も多分不賛成は云ふまい、》と書いていた。(祖母・母については、この予想は全く裏切られるのであるが...。)

午前中に志賀が《中二階で祖母へいふべき事を書いてゐる時》にCと会ったことは、「手帳9」九月十五日(回想)の八月二十三日の所で確認できる。が、Cの反応については記載がなく、知る術がない。

実際は違ったのだろうが、『大津順吉』では、婚約を自家のものに発表すると聞かされても、千代は《暫く当惑したやうな顔をしてゐたが、それについては何も云はなかつた。》と、やはり喜びは感じ取れない。

細かいことだが、この日は午後に木下利玄が尋ねて来て、夜は、米津政賢の所へ志賀が出掛けたことが、「手帳9」九月十五日(回想)から分かるが、『大津順吉』では、午後・夜ともに友達が来た為、婚約を発表できなかったことに変えてある。婚約発表を後回しにして友達の家に行くのは、小説の上では不自然と考へての改変であらう。

その晩、順吉と千代が話す場面では、千代が、順吉の父が反対するとは全く考えず、《気楽な顔》をしていたことが書かれている。『或る旅行記』(五)では、志賀がCに幻滅する原因の一つに《余りに気楽な女》だったことが挙げられ、『過去』の(四)でも、小見川のCの実家を訪問した時のCの気楽さに、強い違和感を感じたことが記されていること等から、ここは実際のCに基づく部分で、将来、千代との婚約解消を続編で描く場合の伏線にするつもりだったのかもしれない(注64)。

(イ) 八月二十四日

その翌朝、順吉は奥の中二階に祖母を呼んで婚約を打ち明け、次いで祖母が母を呼んで説明し、《母から父に話すといふ事にし》たとある。

この時、順吉が使った《中二階》は、二十三日の所で《其処へ(中略)千代が登つて来た》、二十四日の所で《三人で其中二階を降りて来た》と書かれるように、他の部屋より、一段、高くなった場所である。『大津順吉』では特に説明はないが、志賀家は平屋建てで、この家中で一番高い中二階の部屋は、直哉の祖父が生前使用し、祖父の没後はその儘、空き部屋になっていたものである。二十三日の所で順吉が使った机が《唐木》(=紫檀・黒檀・白檀などの高級木材)の机とある事からも分かるように、調度品も立派で、その意味で権威のある、そして父(その部屋も中二階になっていたのは偶然ではあるまい)と張り合う当時の志賀の気持に叶う部屋だったと言える(旧全集・月報9の志賀家間取図参照)。

事件の際、志賀も父に直接は言わず、祖母と母に先ず打ち明けた事は、「手帳9」九月十五日(回想)や日記からも確認できる。また、後の(十二)に、《父は今度のことについては絶対に自分と直接に会はずとはしない。》とあり、これも「手帳10」の十月二十三日夜に父宛てに書きかけた書簡に、《遂に父上は私に御面談を許されなかつた(中略)その事を私は非常に恨むでゐました、父上は卑怯だと恨みました。》とある事で、事実と裏付けられる。(十二)では続けて、《自分もその前年の夏の下らない事からの烈しい衝突を考へると出来る事なら父とは直接に会はずに問題を進めて行きたいと思つてゐた。》と言っているが、これは、婚約を母から伝えて貰った時には確かにそう思っていたのだろうが、千代が連れ去られた際の(十三)のように、父と面談しようとして拒否された時には、『大津順吉』でも怒っているのである。

なお、(十二)の《前年の夏の(中略)衝突》は、『大津順吉』の中では説明がないが、『暗夜行路』草稿2や13から、明治三十九年夏、志賀が大学の制服と外套を銀座の高級な洋服屋に頼んだ所、父から「贅沢だ、断れ」と怒られ、父に腕力を振るいそうになったことを指していると推定できる。直接会うと感情的になり、暴力沙汰にさえなりかねないという配慮から、父も志賀も、なるべく間に人を立てるようにしていたのであろう。「手帳10」の父宛書簡から、父が或る時点(多分、八月二十九日)から、間に直哉の叔父・直方を主に立てるようにしていたことが分かる。

祖母に婚約を打ち明ける際「これは相談ではなく報告だ」と言ったことは、『或る旅行記』『過去』にもあり、事実であろう。

また、《此高飛車な物言ひは私にとつては政略でもなんでもなかつた》とあるのは、「自分は正しいことを正々堂々で行っていて、家族からとやかく言われる筋合いはないのだから、《政略》というような卑しい駆け引きをする必要もないし、相談もする必要もないので、ただ報告だけして置く」という気持なのであろう。しかし、『大津順吉』においては、この他に、順吉に「問答無用」という態度を取らせることが、議論を避ける上で好都合だった、という面もあったと思われる。同時に志賀は、《此高飛車な物言ひ》によって、順吉が本当は弱味があるからこそ思いっきり強そうに見せて、虚勢を張っているだけであることを暗示しようとしているのであろう。順吉が婚約を直接父に報告しなかつたことも、彼の弱腰の現われと読んで良い。志賀も、この読み方を良しとするであろう。

婚約を発表した時点から、事件の中心は、「順吉対千代」から「順吉対父・母・祖母」の段階に移る。その結果、順吉は、これまでの煮え切らなかつたトーンから、攻撃的・行動的なトーンに切り替わる。が、それは順吉の成長の結果ではない。順吉は未熟な青年のままであり、千代との愛情関係も不十分であるのに、観念的に千代と結婚することこそが正義だという意識に駆り立てられている。その為に、「頭」と「心」と「体」のバランスが悪く、妙に正しいということに囚われ過ぎたり、怒りなどの感情に囚われ過ぎたりする。また、父・

母・祖母に弱味を見せまいと虚勢を張っているため、行動も発言も感情も過激になりがちである。それが一見強そうな、断固たる態度に見えているだけなのである。後で重見に告白しているように、本当は《ちつとも熱烈でなく、時々迷ふやうな心持が起》き、《不愉快で仕方がない》所を無理して突っ張っているだけ　それが志賀の創作意図なのである。

婚約を知らされた時の祖母が、「それ程不賛成でもなかつた」ことは、「手帳9」の八月二十五日の所に、《昨日話した時には祖母はそれ程不賛成でもなかつた》とある事から事実と確認できる。

続いて『大津順吉』では、《其晩も私は一時間余り自分の部屋で千代と話した。》と、話ただけのように書いている。以後も、順吉が千代に性的欲望を抱いたという記述は全く出て来ない。しかし、実際の志賀は、「手帳9」の八月二十五日の所に、《Cとの交りは多少肉欲的になつた、》《彼と抱き合つて一時間近くも話した》《肉交の実を行ふ勇気がなくて、人のない所で抱き合つてウツトリする》と書き、さらに前年『（きさ子と真三）』（『大津順吉』では「関子と真三」）に書いたように、愛し合っていれば、結婚する前にセックスをしても罪にはならないという信念から、《Cと断然一所にならう》（セックスしようの意であろう）とも書いていた。つまり志賀は、順吉の恋愛を、自分よりもっと観念的な、「頭」中心のものと印象づけるために、敢えてこうした描き方を選んでいるのである。

（ウ）八月二十五日

翌朝になると、祖母が「大津家に嘗てないことだから」と結婚に反対を表明する。常識的に考えて、これは裏で順吉の父母とも話し合った上での結論を伝えたものであろう。《嘗てない事》は、小説では「女中との結婚だから」という意味に取れるが、八月二十五日の「手帳9」によれば、もっと範囲が広く、家柄が士族ではなく《平民の娘》だから、という事だった。

祖母が「加藤さんの二番目のお娘でもと思っていた」と言うのは、当時としては普通の封建的・儒教的発想であるが、個人の「自由」を求める順吉にとって、それは耐え難い事であったし、また、「（オ）八月二十七日」の所に出て来るように、祖母が順吉を《殆ど無意識的に自身の想ひ通りにしようとする》息苦しさには耐えないという意味でも、生理的に反発したであろう。しかし、志賀は順吉に、それを言葉で論理的に説明することは許さない。「大事な事だから」と繰り返す祖母に対して、順吉は《「大事な事だから僕は祖母さんのやうな人には逆も任して置けないんですよ」》と言う。この言葉は、もし論理的に取るなら、「祖母より信頼できる人になら任しても良い」という意味にもなってしまう。が、順吉はそこまで考えずに、感情に駆られて憎しみを叩きつけている。《祖母さんのやうな人には》という言い方に籠められた憎しみと軽蔑が効果的である。

また、《そのまま祖母を措いて部屋を出て了つた》当てつけがましい行動は、一見、強そうにも見えるが、むしろ感情に駆られた、子供っぽい、ヒステリックなものと見るべきである。ここでも志賀は、順吉に「問答無用」という態度を取らせることで、順吉に正論を言わせないようにしつつ、未熟であるが故の苛立ちを的確に描いているのである。

その日、順吉が三浦半島にいる重見（武者）に《直ぐ帰つてくれ》と手紙を送ったのは、モデルの事実としては、『過去』にあるように、誰も味方になってくれず、孤独だったためと、『或る旅行記』にあるように、当時の志賀にとって、武者こそが《正義を具体化したもの》、何が正義かを志賀のために教えてくれる人だったからである。が、『大津順吉』においては、重見は単に味方をしてくれる親切な友達という程度に留め、正義についても語らせないようにしている。

続く《其晩私は千代と事実で夫婦になつた。私は初めて女の体を識つた。》は、キリスト教と性の関係を大きな問題として取り上げて来たこの作品の流れから言えば、本来もっと詳

しく、大々的に取り上げても良さそうな出来事である。恐らく志賀は、二人の初めてのセックスから、肉体と快楽を故意に捨象したのであろう。その事によって、このセックスが、観念的な順吉にとっては、「正しい結婚に反対する者とは断固戦う」という決意表明・既成事実化の手續きに過ぎず、また自分で自分の退路を断ち、結婚への決意を強めるための行為に過ぎなかったかのように、描いたのであろう。《女の体を識つた》は、定型的な表現に過ぎないとも言えるが、志賀は順吉が、肉の快楽としてではなく、文字通り「頭」で知識として知っただけのような印象を与えようとしているのであろう。

このセックスの直後に、重見に《もう帰つてくれなくていい》と手紙を送ったのは、『過去』によれば、《千代と口約束以上の関係になつた》からには、結婚は《もう決定的な事になつた》と考えたためだが、『大津順吉』では説明がなく、分かりにくい。

また、志賀は『過去』で、この夜のセックスは、八月二十五日に祖母が《口約束だけなら断つて少しも差支へないと云つた》（『過去』(二)）から、わざと口約束以上の関係にしたという訳ではなかった、とはっきり断っている。従つて、実際の志賀には、「セックスをすることで、婚約を取り消し不可能にする」というような戦術的な意図はなく、性欲の高まりによって、自然にそうなっただけだったのだらう。

また、実際の志賀は、セックスの後、《この後不真面目であるならば余は(中略)地獄に行くべき大罪人である、》と「手帳9」に書いているのだが、『大津順吉』の「第二」では、キリスト教的な要素はなるべく出さないという方針から、採らなかったのであろう。

なお、武者に出した手紙は、『大津順吉』では二本とも二十五日になっているが、「手帳9」九月十五日(回想)によれば、事實は一本目は二十四日、二本目が二十五日だったらしい。二十四日は、家族が反対し始める前の日だが、父の反対を予想して、武者を援軍に招こうと、手紙を送ったのであろう。小説では、《お祖母さんとお母さんは大概いいと》という予想に反して、祖母に反対されたため、慌てて手紙を送り、さらに同じ日の内に、千代と肉体関係を生じたため、必要がなくなったとしてもう一通送ったことにしている訳だが、志賀は、その方が緊迫感と順吉の浮き足立った感じが出て良いという判断で、こうしたのであろう。

(エ)八月二十六日

翌朝、順吉は祖母から《父が「そんな事は決して許さん」といつてゐる事を》聞かされた事になっているが、「手帳9」九月十五日(回想)では、前日の二十五日の所に《母、父へ話す、父は洋行させやうと思つてゐたからいけない ともかくCを還へせといふ》とあり、こちらが事實であらう。(九)の末尾に、父が《「大学を卒業したら二三年も洋行をさせて、帰つた所で、相当の家から嫁を貰ふ事にしてあるのだし、今度のやうな事は決して許さん」かう云つてゐる》とあるのは、實際は二十五日に母から聞いた事と思われる。

祖母の言葉《「今どうして千代に暇をやらうかと考へてゐる所だ」》は、「手帳9」九月十五日(回想)と日記の二十六日の項に一致する。ただし、實際は前日の父の《ともかくCを還へせ》という指示を受けた発言の筈である。

順吉は祖母の《云ひ方》の《憎々し》さに現われた祖母の感情を感じ取り、自らも《かつとして了》い、《「若しそんなことをすれば、僕は祖母さんを捨てる許りです」》と言い放ち、祖母を《烈しく罵つた》。ここの二人の言動・感情の動きの捉え方・表わし方も見事である。これは、「手帳9」九月十五日(回想)から概ね事實に基づいていると見て良い。ここでの順吉の激怒は、ラストにおける激怒・爆発へ向かう導火線への最初の点火である。

すると祖母も興奮して、烈しい剣幕で「覚悟がある」と言つて、刀筆笥のある倉の方へ行こうとしたため、順吉と母が止めに入る。これは「手帳」にはないが、一応、事實と見て置く。ここでも、祖母を動かしているのは論理ではなく、「順吉が捨てる」と言うのなら、死ん

でやる」といった感情的反発であり、それを順吉が止めるのも、祖母への強い愛ゆえである。

明治時代とは言え、ここで《刀や短刀》を持ち出そうとする所は歌舞伎を地で行くアナクロニズムで、そこに滑稽感が伴う。だから、順吉にはそれを《芝居気だと》思うだけのゆとりがある。が、同時に、祖母は《それをはつきりと意識してゐないから、場合によつては興奮からズル／＼とたわいもなく本統の境へのめり込み兼ねないと云ふ気がその時、とつさに或感じとして私に感ぜられた。》と言う。このシーンは文学的に優れた箇所である。

半分は《芝居気》で、半分は《本統》になりかかっている祖母の二重の心理と、《カッと》なっていないながらも、同時に、冷静に祖母を観察し、一刻を争う緊迫した場面の中で、《とつさ》の《或感じとして》、言わばテレパシー的に祖母の心の動きを感じとっている順吉の二重の心理との重奏的な描写は、まことに鋭いものであり、後の(十三)で鉄亜鈴を投げつける時の分裂した順吉の心理描写の先駆ともなっている。また、特に《とつさに》という言葉は、平凡ではあるが、緊迫した時間の流れを感じさせる絶妙な表現になっていると私は思う。

今の日本人には、千代との結婚のためになら、祖母を平気で捨てるという方が、好ましく感じられるかも知れないが、それは論理的には明快であっても、人間の真実ではないというのが志賀の考えであり、私も賛成である。

実際の志賀は、この日の「手帳9」に、Cに「祖母は世界に唯一人の自分を愛してくれた人であり、母も大切な人だから、決して怨んだり憎んだりしないでくれ」と頼むメモを書いている。また「手帳9」九月十五日(回想)によれば、志賀は《祖母とお前と両立しない場合如何にすべきか》とCに相談した所、《Cは自分を捨てゝもよい》と答えたと記し、《心非常に弱かりき》と自らを批判している。志賀がCのために家を出るという決意を十月二十三日に最終的に断念したのも、祖母の重病と祖母に泣き付かれた為であった。つまり、
「祖母を捨てる」というのは本心ではなく、一時の感情的な放言に過ぎなかったと言って良いであろう。八月二十八日の「手帳9」の《祖母は結婚をいなむより承知しなければ捨てる」といつた事を怒つてゐる居るのか》というメモは、自分の放言を後悔する気持で書かれたものだろう。

この日の記事は、《其晩も私は部屋で千代と十二時過ぎまで話した。》と締め括られているが、これも順吉の観念性を表わすためのもので、「手帳9」九月十五日(回想)には《此夜肉》とあり、実際はセックスもしているのである。

(オ)八月二十七日

翌朝早く、重見から帰ったという電話があり、順吉は《急いで》出掛けて行く。《嬉しい興奮で何も彼も打ち明けた。》とあるが、千代との婚約が嬉しくて興奮しているのではない。重見が帰って来てくれた事が嬉しくて興奮しているのである。だから、《ちつとも熱烈でないから、時々迷ふやうな心持が起るんで不愉快で仕方がないんだ》となる。

《ちつとも熱烈でない》云々は、『大津順吉』に描かれた順吉の言葉としては寧ろ当然であろう。しかし、「手帳9」九月十五日(回想)のこの日の所には、武者が《熱烈でないから意味ありと》言ったことが記録されており、志賀自身が実際にこの言葉をこの時使ったことが分かる。

これは、「一、予備的考察 『大津順吉』はどこまで事実に忠実か？」で述べたように、実際の志賀とCも、本当は「好き(like)」のレベルを余り出していなかったのに、恋愛経験が無いため、「一生を共にすべき相手」と誤解して結婚に突き進んでしまった為、いざ周囲の強い反対に直面してみると、大きな犠牲を払う程、強い愛情ではなかったことに改めて気付かされたからであろう。祖母の反対を受けた八月二十五日の「手帳9」で志賀が、《余の

迷ひはCの心から出てくるものである、Cと約束するには、Cの愛がまだ／＼足らぬ、Cの愛が足らねばこそ自分の愛もそれ程強くはないのだ、》《時期としては未だ約束すべき時ではなかつたかも知れぬ、（中略）一先づ破約してもよい、》と考えているのがその証拠である。

『大津順吉』に話を戻すと、順吉は、「対父・母・祖母」の段階に入ってから、虚勢とは言え、確かに《自家の者には少しも弱い態度を見せずに来た》と言える。それが、やっとここで重見（および読者）に対して、また自分自身に対して《熱烈でない》という真実を認めた訳である。《熱烈でない》は（八）で順吉が千代に愛を告白した際にも言っていたことであり、二人の関係は、その後も少しも進展していなかったことが、ここで確認できる。

それに対して、重見は「前後を考える余裕がある方が本統に偉い」と答えるが、これも、「手帳9」の九月十五日（回想）から事実通りと確認できる（注65）。

なお、実際の志賀は、この日午後に、木下利玄を訪問しているが、友人関係のことはなるべくカットし、順吉に焦点を絞る方針から、小説では省略されている。

『大津順吉』だけからでは良く分からないが、武者が志賀を一生懸命に応援し、《或時は殆ど自分の事のやうに没頭した》（『或る旅行記』）のは、「これは志賀一人の問題ではない、日本の青年たち皆が恋愛結婚を出来るようにするための突破口であり、日本を近代化するための戦いだ」と思っていたからである。武者が志賀に「君一人の問題にあらず」（「手帳9」九月十五日（回想））と言ったのは、その意味なのだが、『大津順吉』では、正義対悪の問題にしないために省いているのである。

さて、重見のせりふの次に、《私は（中略）却つて千代に対して弱い音を吹いたのを非常に気にしていた時だつた。》とあるが、これは、『大津順吉』では、この章の二十三日夜の《「お父さんが何か屹度云ひなさるよ」》しか考えられず、気にする程の弱音とも思えない。しかし、実際の志賀が気にしていたのは、「手帳9」の九月十五日（回想）の二十六日の所にある《祖母とお前と両立しない場合如何にすべきか》とCに相談した事であり、続く二十七日の所に《夕方帰つてCに前夜の弱い言取り消す、》とある事が（日記も大体同じ）、その証拠となる。これらの事実を『大津順吉』に書かなかつたのは、祖母の重要性を事実通りに書いてしまうと、千代との婚約を貫こうとして戦っている観念的な青年というイメージと、合わなくなるからであろう。が、それらをカットした為に、ここは分かりにくくなってしまう。

重見の所から帰宅すると、千代が、祖母と母から順吉の部屋に入る事を禁じられ、《兎に角一つたんは宿に下つてくれと申し渡された》と泣く。二十七日の日記・「手帳9」九月十五日（回想）共に、「祖母が部屋に入る事を禁じた」とのみ記していて、母も同意見だった事と、「宿に下がってくれ」と言われたことは書かれていない。しかし、《Cを還へせ》という父の命令が既に出ている以上、この日、祖母と母からそういう話が出るのは不自然ではない。

《宿に下》るとは、奉公人が親元または就職を斡旋した身元保証人・周旋業者の所へ帰ることだが、ここは親元と取って良いだろう。身元保証人だとすれば、後に出る村井の所になるのである。

当時の常識的な道徳観からすれば、恋愛関係にある千代と順吉を一所の家に置いておくだけでも、二人の関係を認めた事になり、大津家全体が極めてふしだらな家であると非難されることは避けられない。従つて、《Cを還へせ》も「順吉の部屋に入るな」も、当時としては当然の処置である。しかし、順吉と千代は、この後も、この命令を無視し続ける。

この年の六月には、同じ東京で、若き日の谷崎潤一郎が、小間使いとの恋愛を理由に、書生をしていた家から追い出されている。奉公人同士がプラトニックな恋をただけでも、ふしだらとして解雇される時代だから、千代も直ちに馘首にして追い出したい所なのだが、順吉が肉体関係まで持ってしまったことは大津家の落ち度・監督不行届なので、《兎に角一つ

たんは》と、正式に妻として迎え入れる可能性を残した「馘首ではなく自宅待機」にしたのは、当時としては、一応、筋の通った扱いと言えるだろう。

この時、千代が《もうなるべく家を空けないやうにして呉れと》言ったとあるが、これは「手帳9」九月十五日（回想）では、翌二十八日にCが志賀が武者の所に行つて、《前日非常心細かつたから》という理由で言ったことになっており、こちらが事実であろう。二十八日を描く（十）では、千代の子供っぽい呑気な所に焦点を合わせているので、千代が泣いたこの場面の方に移したのである。

以下は、母との会話で、「手帳9」九月十五日（回想）では《夜母と話す 母同情す》（日記もほぼ同じ）となっているが、『大津順吉』では、千代が家から追い出されそうな情勢になって来たことに対して、順吉が《直ぐ》母を呼び、《興奮から息をはずませながらいつた》となっていて、順吉の危機感と興奮が、息をはずませるといふ生理的な現象を使って、よく表わされている。恐らく実際にもこの通りだったのである。

『大津順吉』では、祖母が（十）の翌二十八日に寝込んだ事になっているが、実際は二十七日からだったため、この話し合いに、祖母が参加しなかったのである。

この時、《家庭の問題でもありませんが》と言っているのは、当時は、結婚は個人の問題である以上に家の問題であったからで、一応、相手の言い分も認めようという姿勢である。それに対して、家《以上に私の問題ですからネ》と言っているのは、順吉自身の手主導権を取り戻し、確保しようとするためである。

また、順吉は、《私も一切陰廻りな事は仕ませんから、自家でも一切それはよして貰はないと困ります》と言うが、この発言の狙いは、順吉に黙って（これが《陰廻りな事》の意味）、父の独断で事を処理しないという約束を取り付けることであり、より具体的には、《私の承諾なしには決して千代を宿に下げないと云ふ約束》をさせる事だったのである。

『或る旅行記』によれば、事件当時の志賀は、正義は自分たちの側にあるのだから、その正義を汚すことのないようにしよう、《あくまで勇者の態度》を取り、《何一つ影にまわつて事を行》なうまい、《何一つ人に物を隠》すまい、としていたと言う。しかし、客観的に見ると、「陰廻り」つまり相手に隠れて何かをすることが容易なのは父・母・祖母であり、そういう事をやりたくてもその手段を殆ど持っていないのが直哉とCであった。その圧倒的な不利を解消し、相手の得意手を封じることで、五分五分に持ち込もうと言うのが、《陰廻りな事》をするなという発言の本当の目的で、これはやはり戦略的な駆け引きの一つと言うべきであろう（もちろん、「だからいけない」という意味ではない）。

この《陰廻り》という言葉は順吉は、この後さらに（十一）と（十二）でも繰り返して使っている。そして、順吉の激怒は、《私の承諾なしには決して千代を宿に下げない》という母の約束が破られた事、また、自分達の恋愛が家族から尊重されず、《軽蔑》（十一・十二・十三）され、プライドを傷付けられたことに専らかかっている。それは心情的には理解も同情も出来る事だが、「約束したのに破った」とか「軽蔑した」とか言って騒ぎ回るのは、子供っぽい態度、或いは未熟な若者の態度とも言える。大人なら、本当は父とも最初から直接に会って、結婚のこと、自分の今後の身の振り方について、理性的・現実的に冷静に話し合うべきだろう。もっとも、志賀も、『大津順吉』執筆当時にはその事は或る程度分かっていたと思う。ただ、『大津順吉』という未熟な青年を描く小説の都合上、順吉にそうした大人の態度を取らせることは逆効果であることが分かっていたから、そうしなかっただけであろう（注66）。

さて、順吉は、母から《約束》を取り付けることに成功する。これも事実だったことは、「手帳9」九月十五日（回想）の八月二十九日の所で、今井の妻（『大津順吉』の村井の妻のモデル）がCを迎えに来た時、志賀が《以前より母と堅き約束あれば、吾等に無断にさる事は決してあるべからず》とCに言っていることから分かる。

この約束は、母との間だけの約束ではないと考えられる。先に述べたように、婚約を発表

した八月二十四日から二十五、六日と、父と直哉とは直接話そうとはせず、祖母や母を間に立てた間接的な遣り取りに終始していた。従って、母とのこの約束が、後ではっきり取り消されない限りは、父も了承したものと順吉（そして志賀）が見なしたのは、無理からぬ所である。しかし、実際には、父はこれを約束とは認めず、無視し、母もこの約束を守ろうとはしなかったため、結果的に順吉（そして志賀）が騙された形になった訳である。

この日、母が《約束して了つたものは添はねばならぬ》と、順吉に同情的な発言をしたのは（ただし、これは父の意向とは無関係に、個人的な意見として言っただけであろうが）、同じ女性として千代の辛い立場を他人事とは思えなかったための、感情に流された発言であろう。だから問わず語りに自分の辛い体験を話し、泣き出したのであろう。

母の話は千代とは無関係だったが、祖母との葛藤の話は、順吉にも同様の経験があったため惹き込まれ、母と共に涙を流す。そして母を苦しめた祖母を心から憎く思う。ここでの祖母への憎しみには、もちろん、二十六日に祖母と烈しく衝突した時の怒りの余波と、今日また千代が順吉の部屋に入るなどが、宿に下がってくれとか言われたことに対する怒りが混じっているのである。

母と感情的に一体感を持った事で、順吉は《大変いい気分になつた。》しかし、それは現実を動かす力とはならなかった。感情は人間の真実を表わす面と、簡単に変わってしまい、頼りにならない面と、両面を持っているからである。

順吉が「祖母を心から憎く思った」事も長続きはしない。その事を説明するために、語り手としての順吉 志賀は、祖母との愛憎の葛藤を（ ）に入れて語っている。その中の《私の強い祖母は》（注67）《私を殆ど無意識的に自身の想ひ通りにしようとする、私は又殆ど無意識的にさうなるまいとする、そして反つて祖母を自分の想ひ通りにしようとする》という関係は、『大津順吉』の《もつと自由な人間になりたい》というメイン・テーマとも繋がっている。そして、肉親という、まさに血と肉で繋がった身体的な関係は、頭の理屈・意識だけでは処理しきれない、無意識的な牽引と愛憎両面の感情が働いてしまう複雑なものであることを、正しく指摘したものとなっているのである。

順吉は、母と話して大変いい気分になり、母が父をうまく説得してくれることに期待を抱く。そして《いくらお父さんだからつて他人にさう勝手に定められちゃあたまりませんよ」笑ひながら私がこんな事を云ふ時分には、もう母も笑へた。》（《母も笑へた》は、泣いていた母も、の意味である）と、父をダシにして二人一緒に笑うこと＝感情的に一体化することで、母は父とは違って、順吉と考えを共有する味方であるという印象を以て、この章は明るく閉じられる事になる。しかし、この期待は全く裏切られる事になるのである（注68）。

順吉の《将来の事を（中略）勝手に定められちゃあたまりません》という発言と、《洋行》や《相当の家から嫁を貰ふ》ことより、千代との結婚の方が大事だという価値観は、心の自由を求めるというメイン・テーマに繋がるものである。

（ ）「第二」の（十）

八月二十八日と、二十九日の昼間の出来事を描く章である。

二十八日は、（九）末尾の明るい気分を引き継いで、千代の子供らしい呑気な一面が描かれる。

二十九日は、主に重見の「不幸な祖母さん」の引用で、やはり明るく、また子供らしい呑気な気分がある。

これは、（十一）からラストまで続く嵐の前に、言わば明るい晴れ間を見せることで、コントラストとしての効果を挙げようとしたものであろう。

(ア)八月二十八日

翌朝、重見が来て、千代と引き合わせてから、午後、重見と芝公園から銀座を一緒に散歩する。これは日記と「手帳9」九月十五日(回想)の八月二十八日から事実と確認できる。重見が途々《なるべく早く帰らないか》と二三度言ったとあるのは、『大津順吉』では、前日、千代が《もうなるべく家を空けないやうにして呉れと》順吉に頼んだことを受けた形になっている。が、「手帳9」九月十五日(回想)の八月二十八日では、散歩の際に武者が《なるべく家に居よとい》ったことは事実だが、それは武者独自に考えて忠告しただけで、Cが《なるべく家を外にすなと》言ったのは、その夜のことにっており、こちらが事実らしい。

重見に紹介する場面で、《話もな》く、手持ち無沙汰そうな千代を描いているのは、重見・順吉とは知識・教養も違い、思想・芸術への関心もなく、結婚してもうまく行きそうにないことを、暗に指摘しているのであろう。しかし、千代が《少し横坐りになつて》いたのは、年齢が近く、自分達の味方である事から、重見には気を許している事を表わしたものと思われる。

《此日、祖母は朝から目まひがすると云つて居間で寝てゐた》とあるが、これは「手帳9」九月十五日(回想)では、前日八月二十七日の所に《此日より祖母ねる》(日記も二十七日の最初に《祖母ねる》)と書かれている。二十六日に志賀が祖母を捨てると言ったことが応えて、その翌日から寝込んだのであろうが、二十七日は書くべきことが多過ぎるので、二十八日に回したのであろう。

ここで順吉が、《陰廻り》の一つとしての《手段の病氣》かと邪推するのは、二十六日の衝突以来、祖母を敵視している感情の余波である。が、邪推は志賀の癖でもあろう。《脳の弱い》は、『実母の手紙』・『暗夜行路』草稿1・『或る旅行記』などに出るように、留女は直哉が四五歳頃(?)だった時に二年程、脳病になった事があるからである。なお、父・直温もその遺伝か、脳病のため満三十七歳で文部省を退職して、暫くぶらぶらしていた時期がある。

夜、千代と話した内容が二つ挙がっているが、貧乏についての会話は八月二十八日の「手帳9」に出ており、事実通りである。しかし、肩揚げについての話は、箱根に居た時の八月十日の「手帳8」に出ており、実際に聞いたのは箱根に行く前だった筈である。

「貧乏」の方はともかく、時期の違う話を、何故ここに持って来たのか? それは、この二つの会話に共通する「子供っぽさ」を読者に感じ取らせたいからであろう。

貧乏についての会話では、二人はこれから夫婦として苦勞を共にしようという時なのだから、「貧乏はいやか?」と問われたら、普通なら嘘でも「いいえ」と答えそうなものだが、そこをあげすげに「ええ、いやですよ」と答え、「いい着物が着たい」と言っただけで千代に、志賀は良くも悪くも子供らしい正直さを見て居るのであろう。ただし、「手帳9」では、この会話を《彼はたしかに善人である》という手放しに肯定的な感想で締め括っていたのに、『大津順吉』では、《こんな会話も私の耳には何となく物珍しく響いた》という感想で、「いい着物が着たい」という男には分からない感覚を《物珍しく》感じた程度に評価を引き下げている。

「肩揚げ」の話では、「肩揚げを取る」ことは、女子なら結婚適齢期を意味するのに、千代に「未だ中々とらんないよ」と言わせる事で(言ったのは何年か前かもしれないが)、《未だ肩揚げをしてゐる》千代は、まだ結婚には早い子供であることを暗示したのであろう。

千代(そしてC)の、抑圧を知らない無邪気な子供のような一面は、順吉(そして志賀)の心を惹き付けた大きな長所であった。しかし、家族に結婚を反対されている危機的な状況の中で、しかも既に順吉と肉体関係まで持っている千代の(肩揚げの方は、実際は肉体関係

以前だが)これらの発言は、余りに幼く、余りに呑気であり、互いを支え合って人生の苦勞を共にする相手にはなりえないことを感じさせる。

『大津順吉』には出て来ないが、志賀は九月九日に、父からCを捨てるか家を捨てるかと迫られ、家を出る事にする(「手帳9」九月十五日(回想))。その時には、C(千代)が貧乏生活に耐えられるかどうか問題になって来るのである。

また、先にも述べたように、『或る旅行記』(そして『過去』)によれば、志賀は家族と戦っている自分に比べて、Cが余りに《呑気》《余りに気楽な女》だった事に幻滅したと言うから、志賀は、この会話によって、千代の長所である子供らしさが、同時に二人の結婚を困難にするものでもあることを暗示しようと考えたのであろう。

『或る旅行記』で志賀は、女学校に入ったCから送られて来た写真の田舎臭さに堪えられなかったと書いているから、「肩揚げ」の方で、千代の田舎詞を『大津順吉』の中では唯一、出したのも、『大津順吉』の続編を書く場合の、千代に対する幻滅の伏線という意図もあったかも知れない。

この日の最後に、重見をしきりに頼りにする千代に触れているのも、千代の子供っぽい頼りなさを表わすためであろう。この日も「手帳9」九月十五日(回想)には、《夜Cと話し肉》とあるが、これを採らなかったのは、子供っぽい千代のイメージを損ねたくないせいもあったかも知れない。

(イ)八月二十九日(日中)

翌朝、順吉が手紙を書く相手は、当時パリにいた有島壬生馬がモデルである。三枚書いて中断したこの手紙は、(十三)末尾でこの日の深夜に書き継がれる事になる。

鎌倉から上京して来た《四つ上の叔父》のモデルは志賀直方で、この頃、(現・藤沢市)片瀬に住んでいた。「手帳9」九月十五日(回想)の八月二十九日の所に《直方氏上京、午前話す》とある。

叔父のせりふに《電報で出て来た》とあり、(十二)から、順吉の父が《今日会社で村井に》話した言葉をそばで聞いていた事が分かるので、父が相談のために呼んだと推定して良いであろう。直温が直哉と直接話さず、恐らくこの日以降、間に直方を立てるようにしていたことは、「手帳10」の十月二十三日夜に父宛てに書きかけた書簡から分かる。

《鎌倉の方も段々人が減つて来た》は、避暑客が減って来たの意味である。紅茶を飲むことは、この時代としてはハイカラかつ贅沢で、大津家が金持であることを暗示している(注69)。

母(叔父は「お姉さん」と呼んでいるが、勿論、「義姉」の意味である)が居る茶の間では話さず、座敷に移るのは、当時は大事な話は床の間付きの座敷でするものだったからでもあり、また順吉の父母の考えを代弁するのではなく、独自の立場で話をするため、母や祖母に聞かれなくなかったということでもあろう(注70)。

《傍に散らばして置いた巻煙草の函を三つばかりかたびらの袂に入れると、煙草盆を自分で下げて、先に立つて大きなからだをゆすりながら縁側を座敷の方へ行つた。》という描写は、特に重要な意味がある訳でもなく、類型的な外面描写に過ぎないと言えればそれまでであるが、季節感もあり、映画のワンシーンが目につくような巧みな文章である。

『大津順吉』では、主な登場人物の一人一人について、その身体的な特徴が目に見えるようなシーンが、バランス良く、大体一度ずつぐらい設けられている(創作においては、こうしたバランスもまた等閑に付すわけにはいかないであろう)。例外は父と母で、父は後で述べるように、わざと出さないことで象徴的に巨大な存在感を与えているのであろうし、母の場合は、外面描写はないが、「第二」の(九)で順吉と一緒に泣き、笑う場面に存在感があった。U先生は顔(「第一」の(一))、ウィーラーはダンス・パーティーの時(「第

一」の(四))、祖母は階段を降りる時(「第二」の(四))、千代は竹箒を振り上げるシーン(「第二」の(二))等がある。叔父は、祖母や母以上に軽い、順吉の内面と殆ど関わる所がない役柄だからこそ、存在感を与えるために、類型的ながら印象的な外面描写を敢えてここで入れて置いたのであろう。

なおついでながら、千代との婚約が問題になる「第二」の(九)から(十三)の間で、志賀は、この事件に関わった人々に、それぞれ一回ずつ、多少印象的な登場シーンを割り振るように工夫しているようである。即ち、祖母(九)・母(九)・千代(十)・叔父(十)・重見(十)・村井の妻(十一)・父(十三)・岩井(十三)である。「中央公論」から与えられた限られた紙数の中で、こうした人物の出し入れをバランス良く行なうということは、志賀の作家的手腕を考える上で、無視すべきではないと思うので、敢えて指摘して置く。

叔父は《廃嫡されても何でもかまわんといふ決心があるなら、それでやつて見るさ》と言うが、「廃嫡」されると遺産相続権を失うので、志賀家のような大金持の跡取りだった直哉にとっては、重大な損失になる訳で、叔父の言葉は強い脅しとも取れる。『過去』では、《日頃親しい叔父すら、他の家族との関係上はっきりした態度をとらず、齒がゆく思つてゐた》とあり、「手帳9」九月十五日(回想)の八月二十九日の所では、《直方氏と失敬な人だと思ふ、直方氏はCに対し実に無礼な事を祖母に云つた》と書かれる等、志賀は、Cの件では、叔父に不満を持っていたようである。

叔父の言葉の後に、初出では、叔父が千代を変な奴だ、コケティッシュだ、と評し(「手帳9」九月十五日(回想)で言われている《Cに対》する《無礼な事》の中身であろう)、順吉が腹を立てたことが書かれていたが、大正六年、単行本『大津順吉』への収録時に削除された。家族みんなの無理解を強調する意味で書いたのだろうが、コケティッシュという発言が唐突で分かりにくく、千代のイメージを悪くするだけなので、削除したのであろう。

午後になると、重見から手紙と小説(?)「不幸な祖母さん」が届く。順吉に対しては祖母にもっと思いやりを持つことを勧め、祖母には結婚に同意するよう勧めようとしたものである。が、この日は祖母に読んで聞かせる機会はなかった。これは、「手帳9」九月十五日(回想)から、二十九日に届き、Cが連れ去られた翌日の三十日に読んで聞かせることが確認できる。手紙は二十八日の散歩後に書かれたものであろう。なお、この手紙および「不幸な祖母さん」は所在が確認できないが、明治四十年八月の有島壬生馬宛の志賀書簡の断簡に、《僕は前日武者小路実篤からよこした同封の手紙を読むで聞かしてやつた》とあり、パリの壬生馬に送ったようである。『大津順吉』執筆時には記憶を辿って再現したのか、或いは壬生馬に頼んでまた返して貰ったものを写したのか、確認できない。

『大津順吉』でははっきりしないが、二十六日に「祖母を捨てる」と志賀が発言した事から、祖母は翌二十七日からショックで床に就き、寝たり起きたりの状態が続き、二十八、九日には殆ど志賀と口をきかなかつたらしい。『或る旅行記』に、Cが連れ去られた翌八月三十日に《マルデ二日口を利かなかつた祖母を庭へ連れ出して》志賀が「不幸な祖母さん」を読んで聞かした、とあるのがその証拠であるし(注71)、「不幸な祖母さん」の文中にも、《『見捨てる』と云はれた》《祖母さんが不平に思ひ、彼に口をきかず(中略)苦しめるのは無理はない》とあるからである。多分、祖母が口をきかなくなったせいなのであろう。志賀は二十八日の「手帳9」に、《祖母は結婚をいなむより承知しなければ捨てるといった事を怒つてゐる(中略)のか》と口をきかない理由を推し量ろうとしたり、《自家の祖母は余を愛する、然し少しも解してはくれない、解してくれないのはまだいゝとして信用してくれない、これが総てを不幸にしてゐる》と嘆いたりしていた。《私の其時に此位適切な手紙はなかつた》と言うのは、実際は、こういう背景があつたからなのであろう。

順吉はこれを読んで《涙ぐんだ》とあるが、『或る旅行記』によれば、八月三十日にこれを祖母に読み聞かせた際は、《涙で眼が見えないばかりか泣いてノ声が出なくなつた。》

とある。明治四十年八月の有島壬生馬宛の書簡の断簡にも、《読ながら僕は泣かないであられなかつた、祖母も泣いて聞いた》とある。そして、「手帳9」九月十五日（回想）によれば、《祖母も泣いて二人の心は通じた、祖母はCの教育についてもも考へてみたのだ》、日記では《祖母と和す、事定まれりと喜ぶ》とあり、この時は祖母も結婚に同意したようである。しかし、三十一日に祖母はトイレで倒れ、『或る旅行記』によれば《一時は死ぬかと（中略）医者にも思はせる程に》なり（注72）、「手帳9」九月十五日（回想）によれば《苦のクライマックス》、日記では《悲苦の頂点に達す》となる。その後、祖母は持ち直したが、結婚については、『或る旅行記』によれば《絶えず左へつき右へつきし》、反対に回ったり賛成に回ったりと、揺れ続けたようである。

この重見の小説（？）は、志賀にとってはともかく、普通の読者にとっては、さほど感動的なものではないと私は思う。しかし私は、「不幸な祖母さん」から、祖母は子供のように愚かだが善良だという印象を受ける。そう感じるのは、重見の小説の、祖母に読んで聞かせることを前提にした、噛んで含めるようにくどい、幼稚な感じのする文体の効果も大きいのだろう。志賀は祖母を子供とイメージさせる事で、千代や「白」に準ずる役割を、この小説の中で与えようとしているのだと私は思う。

また、同時に重見の小説は、当時の志賀や武者が持っていた限界としての子供っぽさ・幼稚さと、良い意味での善良さ・純粹さをも感じさせる。それが、この次の章で、ずるがしこい大人たちによって順吉と千代が騙され引き離されることと、コントラストをなすように工夫しているのであろう。

さらに、「不幸な祖母さん」には、《ありふれた小説風にゆくと、それは祖母さんが一番憎まれ役だ》が、《自分は祖母さんを一番不幸な方と思ふ》という考えが繰り返し説かれているので、志賀は、『大津順吉』を正義対悪の対決の物語として読ませないようにする効果も狙って、これを挿入したのではないかと思う。

（ ）「第二」の（十一）

（十）と同じ八月二十九日だが、夜に入って、千代が連れ去られる章である。ここからラストまでは、一気に展開が激しくなり、順吉の怒りが急速に高まることになる。

「手帳9」九月十五日（回想）の八月二十九日の所から、今井（村井）の妻が来た時、志賀が《以前より母と堅き約束あれば、吾等に無断にさる事は決してあるべからず》とCに言ったこと、《兄の来り会はんとするなればとの理由にて》Cが連れ去られたこと、《其後》志賀が《怒つてカゲへまわつて何かするものあらば打撃を与ふべしと》言い、《心では》女中の《咲かせいのわざと思》っていたことなど、小説に書かれていることの大筋は事実であることが確認できる。

今井とその妻については、詳しいことは分からない。「手帳9」九月十五日（回想）の八月三十日に《Cはまだ本所にゐた》と出るので、今井の家は本所にあったと見て良いだろう。

なお、『大津順吉』では、千代が連れ去られた所で終わってしまうので、これで結婚が不可能になったかのような印象を受けるが、実際は、この後二ヶ月近くに渡って延々と揉め続けるのである。

《私の為にこんな騒ぎが起つたと思ふと、つらくて、つらくて……》という千代のせりふは、自分のことは二の次にして、敵に回っている人々に対しても済まなく思う健気で善良な心を印象付け、千代を騙し、連れ去る者たちの「不当さ」を強調する意図であろう。

千代がこの章で《順吉様》と呼び掛けていることには、不思議な感じを受けるが、「手帳9」九月十五日（回想）の八月三十日の所で、Cが武者に電話で《「直哉様はなんとかいつてあつしやいましたか」》と訊いたことが出ているので、実際にも女中が御主人様に対す

るような丁寧な言葉遣いをしていたのであろう。

志賀が、声の調子に現われる無意識的・身体的な気分・感情に敏感であり、それを巧みに使用していることは、何度も指摘したが、ここでの描写も、簡単ながら、声と身体性に重点を置いた巧みなものである。

ひどく不安がっている千代は、《おど／＼した調子で「村井さんのおかみさんが（中略）といつて息をはづませ》《驚きから赤い顔をして私の眼を見つめて居る》と描写され、さらに名前を呼ばれると、「村井さんですよ」と、助けを求めるように《膝頭で寄つて来》る。そして《「あんなに怒つてゐる……」》と《泣きさうな顔をしておど／＼した。》となる。

一方、村井の妻は、最初の内は姿は見え、聞こえて来る声の調子から怒っていることが分かるという描写で、最初は離れの外かららしく、《「千代！ 千代！」硝子窓の下から角のある声で呼んでゐる》とあり、次いで建物の中に入って来て、《「千代！ 千代！」かういふとげ／＼しい声が梯子段の直ぐ下からして来る。》となる。そして茶の間では、《座につくと、其女も興奮から眼の色をかへたまま、「（中略）わけが解りやしない」と一寸流し眼で私の方を見た。》と、眼の描写で、この女のふてぶてしい、押しの強い感じをうまく表わしている。

そして、順吉は、不安がっている千代には叱るやうな言い方をして、落ち着かせようとし、村井の妻や女中達には、脅しつけようとして大きい声を出す、それらは内心では不安に駆られ、苛立っている為である事がよく分かる。それは、千代が着更をしている間、《暗い縁側を》落ち着きなく《往き来してゐる》姿によつても示されている。

順吉が村井の妻の出現をどう解釈していたのかは、はっきりしない所があるが、千代に《乃公が承知しなければ決して下げない約束がしてあるんぢやないか》となだめている事と、後で順吉が、《前から一ツこくな女だと（中略）聞いてゐたし、千代の返事が遅いので腹を立てた》に過ぎなかった《のかも知れな》い、と思ひ直す所から逆に推測すると、順吉はこの時、この女が、力尽くで千代を連れ去ろうと喧嘩腰でやって来た、と受け止め、怒ったようである。そして《急用でこれの兄が（中略）来て宅で待つとりますから》という説明に対しては、最初は信用せず、祖母と母が、用が済めばすぐ還すように言っていることから、次第に半信半疑になり、母との約束があるから千代を渡しても大丈夫だ、と判断するに至つたと考えられる。

順吉は、この女が以前は「お千代さん」と呼んでいた千代を呼び捨てにしたことと、《下女が主人の部屋で話し込んでゐるつて法がありますか》と発言したことに腹を立てる。順吉が婚約した以上、千代に対しても順吉の妻同様の敬意が払われるべきなのに、《下女》としか認めようとしなないことに腹を立てたのである。

ここでも、またこの後も、順吉の怒りの原因は、一つは《失礼》《軽蔑》《侮辱》であり、もう一つは《陰廻り》に対するものである。順吉と千代の恋愛が失礼な取り扱いを受けたのは、当時の日本では、身分違いの男女関係は、道に外れた罪という感覚が強かつたことと、加えて、一般に色恋沙汰は性的なものであり、従つて下等なもの（みだら・いたづら）と軽蔑する風潮が強かつた事が背景にある。だから、村井の妻は千代を不埒な女・罪深い女と見て怒り、呼び捨てにするのだし、逆に、順吉の父は、《千代には何の過失もないが、せがれが不埒をしたに就て》と、順吉を罪人扱いするのである（勿論、本心では千代も罪人視しているだろう）（注73）。

順吉が《吾々が真面目に正面から行つてゐる此出来事》という言い方をするのは、若い男女が愛し合うことは真面目な厳肅な事であり、他の真面目な行為と同等（或いはそれ以上）の敬意を以て扱われるべきだという西洋流の考えに立っているからであるが、こうした考えは当時はなかなか受け容れられなかつた。従つて、敬意を以て扱われるべきことが、実際には敬意を欠いた扱いを受ける所から、順吉は《失礼》《軽蔑》《侮辱》を感じ、激怒することになるのである。しかし、志賀は、順吉に「生意気云ふな」といった感情的な言葉を吐か

せるだけで、自分の考えをきちんと論理的に主張することは、許さないのである。

順吉は、女中の松も飯炊き女のせいも、村井の妻の世話で勤めていたので、二人のどちらかが千代と順吉のことを告げ口したために、この女が千代を世話した責任もあって、事件に介入しようとして来たのではないかと疑い、《此方が正面から仕てる事に、若し陰廻りをして手段的な事でもする奴があつたら（中略）決して許さないぞ》と、女中部屋に聞こえるように大声で言う（《陰廻り》を使うのはこれが二回目である）。また、《会つても口をきく事さへない村井といふ下役の男や其妻などが自分達の或運命に一ト言でも何かいふさへが甚しい侮辱に思はれて気持が悪くてならない所に、女中迄が、と思ふと取り返しのつかない軽蔑を受けてみると》感じる。これは完全に身分差別的で（千代も女中なのに）、自己矛盾ではあるが、身分秩序が厳然とあったこの時代に、身分の低いものが、敢えて順吉のような主人側の人間の意志に反する振る舞いをするのは、自分を余程軽んじているからだと感じるのは当然である。

そこに祖母が起きて来て《千代は用が済めばすぐ帰つて来るんです》と言い（注74）、母も《明日は用の済み次第、屹度直ぐ還して下さいよ》と言う。順吉は（十二）で、この二人の発言を思い出して腹を立てているが、二人が共犯で意図的に嘘をついたのか、父と村井の妻にこの二人も騙されたのかは、『大津順吉』の範囲内ではもとより、残された資料からも、はっきりとは分からない。「手帳9」九月十五日（回想）のCが連れ去られた所には、《母余を偽る》と明記されているが、判断の根拠は書かれていないし、「祖母も偽った」としたのは、『大津順吉』だけである。祖母の発言は、村井の妻の言葉を真に受けただけとも取れるし、母の言葉は要請であって、村井に無視されただけとも取れる。

ともかく順吉は、二人の発言を聞いて、自分の邪推だったかも知れないと迷い、母との約束をもう一度念のために皆の前で繰り返しただけで、千代を渡してしまう。村井の妻と千代が玄関ではなく《台所口》の方から出て行く所にも、千代が女中としてしか扱われていないことが現われている。

いよいよ千代が台所口を出る時の、順吉の《「あしたは兄さんと一緒に帰つて来い。いいか」》という励ますような最後の言葉に、千代が《何かしら不安な眼差しで（中略）私の顔を見上げて首肯いた。》という描写は、大人の悪知恵を見破れない憐れな犠牲としての千代を強く印象に刻み付ける（千代が二度と再びこの家に帰って来れないことは、作中では明らかにされていないが、当時の日本を知る読者には、充分想像が付く事なのである）。土間に立って居る千代が順吉の《顔を見上げ》るという位置関係も、救いを求める弱者として、千代を印象付ける。「白」の死に続いて、大人の現実社会が、本来尊重されるべきイノセンスを圧殺するものであることを、このシーンははっきり示しているのである。

（ ）「第二」の（十二）

同じく八月二十九日の夜で、千代が連れ去られた後、父に騙されたことを知り、怒りが烈しく高まる章である。

《私は其儘、物置の屋根に作つてある物干場へ登つて、又その櫓の上へ乗つた。》とあり、旧全集・月報9の志賀家問取図から、《物置》が母屋の台所口から比較的近い所にあったことは確認できる（注75）。しかし私は、『大津順吉』における二度の物干場のシーンについては、事実通りではないと考えている。

この点をはっきりさせるために、先ず、「手帳9」九月十五日（回想）（以下（回想）と略記する）と『大津順吉』から、この八月二十九日の夜の出来事の推移を、出来る限り正確に再現するよう試みてみよう。

（回想）には、今井が来た時刻、Cを連れ帰った時刻の記録がないが、『大津順吉』「第二」の（十一）では、村井（今井）の妻が来たのは《九時頃》となっている。これを概ね信

用することにして、Cが志賀家を出たのは、大雑把に言って、十時頃と見ておこう。

『大津順吉』では、千代が家を出た直後に順吉が物干場に登った事になっているが、この事に言及した資料は他には一つもない。もちろん、「だから登らなかった」とまでは断定できないのだが、私は登っていないと考える。

と言うのは、『大津順吉』では、一回目の物干場で、順吉が《あしたでも兄を寄越すやうにしる》と言えれば良かったと今更ながら気が付くことになっている。これは、「手帳9」の八月二十九日の所に、《今余は何故Cを帰す事を許したらう(中略)今は帰されぬ用あらば来よ(注76)と云ひ得るではないか》と書かれていることと一致する。しかし、「手帳9」を真つ暗な物干場に持って行ってその場で書くとは考えられない(注77)。また、《今》と始まっているこの文面は、Cが出掛けた直後に書かれたことを意味している。これらの点から、実際はCが出掛けたすぐ後には物干場に登らず、一旦自室に戻って「手帳9」に右の一項を書き記した筈だと私は推理するのである。

もちろん、先に物干場に登り、そこで考えついたことを、自室に戻ってから「手帳9」に書いたという可能性も考えられなくはないのだが、「手帳9」の八月二十九日の記述は、ここに引用した一項目しかなく、その次にある《武者とは如何にして友となつたか》以下は三十日に書かれたと思しい。Cが家を出た後、志賀が叔父と自室で対話したことは、すぐ後に述べるように確実な事実である。もし志賀が、『大津順吉』に描かれているように、Cが出掛けた直後に物干場に登り、そこで《あしたでも兄を寄越すやうにしる》と言えれば良かったと思ひ付き、次いで叔父が帰って来たので呼び止めて一緒に自室に入って話し(そこに「手帳9」はあったが、書く暇はないはずだ)、父に対して激怒し、叔父と台所口まで一緒に行き、もう一度物干場に登ってまた自室に戻って「手帳9」を開いたとしても、そこに《今余は何故Cを帰す事を許したらう》と書く筈がない。もう《今》ではないからである。それに、もしこの順序だったなら、「手帳9」には、父に対する憤りもぶちまけられてしかるべきであろうし、二度目に物干場に登って考えたことも書かれそうなものである。これらを考えると、少なくとも一回目の物干場のシーンは、事実通りではないと断定できる。

恐らく志賀は、Cが出掛けた直後に「手帳9」に《今》以下の一項を書いた後は、「手帳9」を閉じ、ぼんやり考え事か何かをしていたのであろう。そこに叔父が《小門を開ける》音が聞こえたので、急いで叔父を呼び止めに行った。旧全集・月報9の志賀家間取図によれば《小門》と志賀の居た離れの二階はすぐそばだから、離れの雨戸が閉まっていたても、《鍾のついたくさり》がたてる《けたたましい音》なら充分聞こえ、階段を急いで降りて外に出れば、目の前が台所口なのである。そして、叔父と話した後は、激怒の余り、「手帳9」に何かを書く気にもならず、父に会いに行き戻って来た後は、有島壬生馬宛の手紙に詳しく事実を書いて、怒りをぶちまけることに熱中していたため、「手帳9」には、この夜の出来事の続きを書かずに寝てしまったのだと推理したい。

さて、この夜の出来事の再現に戻ると、叔父・直方の帰宅は、(回想)に《直方氏木村より帰る 話して父の意にて今井来るときく 大いに怒る、》とあり、事実と確認できる。ただし、帰宅時刻の記載はない。しかし、『大津順吉』「第二」の(十二)で、叔父が《「未だ起きてたのか?」》と意外そうに順吉に言っている所から、十一時をかなり回っていたと見たい。叔父は久しぶりに妻の実家を訪ねて、岳父と酒でも酌み交わしながら話し込んで、遅くなったのであろう。

『大津順吉』では、叔父と話した後、再度物干場に順吉が登ったのが《十二時頃》となっている。しかし、(回想)には、この時も、物干場に登ったとは書かれていない。

(回想)では、叔父と話した後すぐ、《十二時過ぎ父に起きよといふ、いやだといふ、》とあり、『大津順吉』「第二」の(十三)では、二度目の物干場から自室に戻っても寝られず、父と話をしようとしたのが、《もう一時近かった》とある。時刻は少し違うが、大差はない(『大津順吉』では、物干場のシーンを二回挿入した関係で、少し遅らせたということ

も考えられなくはない)。

『大津順吉』では、父に拒否された後、鉄亜鈴を投げ付け、手紙を書いて、その擱筆が《三十日午前三時半》となる。(回想)では、《余は四時まで眠れず有島へ手紙を書く、独り物ほしへ乗る。 空間。 フンと笑ふ、 》となっていて、物干場へは、壬生馬に手紙を書き終えた後に初めて乗ったように書かれている。後で思い出し、末尾に付け加えたということも全く考えられないことではないが、その可能性は低いと思われる。この《四時まで眠れず有島へ手紙を書く》から、手紙を三時半に書き終えた後、興奮を鎮め、頭を冷やす目的で物干場に登り、四時に戻って来て眠りに就いたという想像も可能であろう。日記は簡略だが、《翌朝四時まで苦悶》とあり、就寝時間は一致している。

なお、(回想)の《 空間。 》は、『大津順吉』で二度目に物干場に登った時、《今更に千代と自分との空間的な距離を感じた》という場面に対応する事実のメモであろう。そして《 フンと笑ふ、 》は、『大津順吉』で、鉄亜鈴を投げ付けた後、岩井の様子を思い浮かべて笑う場面に対応する事実のメモであろう。が、これらについては後で取り上げる。

右の検討から、『大津順吉』で物干場に登る二度のシーンについては、本当は手紙を書き終えた後のことを、フィクションも交えつつ、前の方で二回に分けて書いた可能性が高いと私は考える。

なお、ついでながら、『大津順吉』を読んでいると、(十一)から末尾までは、非常に密度の高い、緊迫した時間が切れ目無く続いているように感じられる。が、事實は、村井の妻が登場してから、順吉が手紙を書き終わるまでに、六時間ぐらいが経過しているのであって、それはその通りに書けばかなり散漫なものになる所を、志賀が巧みに筆を省き、時間を気付かれないように圧縮して描いた結果なのである。これはどんな作家のどんな小説にも言えることではあるが、改めて注意を喚起して置きたい。

さて、志賀が事実を改変して、千代が家を出た直後に順吉を物干場へ登らせたとすれば、それは、順吉をすぐに自室に戻らせるよりも効果的な書き方だと私は思う。物干場へ登ったことで、順吉の、千代が行ったであろう方向を少しでも見ていたい(実際には見えないことは分かっているのだが...)、また、父に支配されている家から少しでも解放されたい(自室でも、室内では解放感が得られない。しかも雨戸が閉めてある)、という気持ちが現わされるからである。また、「明日、兄を寄越すように言えば良かった」と気付くのが、カッカしていた頭を、物干場に登ることで冷やす事が出来たお陰とすることも、自然で良いと思う。

特に、順吉が、《遠く見える灯を見ながら、あの女に連れられて不安な心持をしながら急ぎ足で行く千代の姿を想ひ浮かべ》るシーンは、(恐らくフィクションであろうが)巧みである。物干場で闇に包まれている順吉の状況と、《遠く見える灯》との対照で逆に強められる暗い夜のイメージ、そして、(十一)末尾に描かれた千代の別れ際の《不安な眼差し》が、《不安な心持をしながら》という所で、映像として、自ずから順吉にも読者にも思い浮かんで来ること、また、村井の妻の言いなりにならざるを得ず、急かされる千代の辛さ、《急ぎ足》というものの落ち着きの無さ、唯一の頼りである順吉から、一步一步、遠ざかって行く心細さ、等が、千代が感じているであろう、そして順吉自身も想像の中で同様に感じているであろう不安と淋しさを、読者に体感させるからである。

順吉の考えは、《あした兄といふ男に会つたら(中略)先方の方だけはどうか型をつけられるだらう》と、千代の家族から結婚への同意が得られるというプラスの方向へ向かう(実際の志賀は、これを自室で考えたのであろう)。これは、自分の中に不安があるから、無意識の内にそれを打ち消そうとする為であろう。もちろん順吉は、別れ際に言った《あしたは兄さんと一緒に帰つて来い。》という自分の言葉が、その通り実行されると、この時点では思っているのである(実際には、Cは二度と帰って来ないのだが...)。

そこに《錘のついたくさりで閉めてある小門を開けるけたたましい音がした》。これは、「第一」の(六)で、《谷中の寺のだつた表の門を入ると、直ぐ左に小さな石の門があつ

て、それを入つた右が母屋の台所で、左の突き当りがやくざ普請の二階建ての離れ家の玄関になつてゐる。》とあつたその《小さな石の門》から叔父が入つて来たのである。恐らく、夜遅くなると、母屋の他の入り口は、用心のため鍵を締めることになつていたのであろう（注78）。

視覚的な情報の乏しい闇のシーンで、しかも物思いに耽っている時には、大きな音が、場面を切り替える切っ掛けとして実に効果的である。《けたたましい音》は、不安を掻き立てる音なので、順吉が叔父に相談することで安心したいと思う気持ちに、読者を共感させる効果もある。

《夕方から其春結婚した細君の実家へ行つてみた四つ上の叔父》とあるが、モデルの直方は、この年四月十八日に木村峯と結婚式を挙げ、直哉も出席している。峯の実家は、直哉の祖母・留女の実家に当たり、峯の父・木村重堅は、直哉の父・直温と慶應義塾で同窓だった。重堅は相馬家の若様の御養育係を務めており、東京赤坂福吉町（現・港区赤坂二・六丁目）に住んでいた。志賀家からは数百メートルしか離れていない場所である。叔父はそこから歩いて帰つて来たのであろう。

順吉は離れの部屋に叔父を呼び入れる。そして、叔父から村井の妻が来たのは父の差し金だったことを聞かされ、さらに《お父さんは貴様の事を痴情に狂つた猪武者だと云つとんなるんだぜ。約束に一つ責任なんぞ持ちなるものか》と言われて、その余りにもひどい、人を踏み付けにしたやり口に、《怒りから体が震へて来た。》となる。作者はここで、読者にも、順吉と同じ怒りを、体が震える程に体感させようとしているのである（注79）。

順吉は《「よし！ 此方が何処までも真正面から話をしてゐるのに皆が陰廻りをする気なら此方も考を変へるからネ」》と言う（《陰廻り》を使うのはこれが三回目で、《正面から》正々堂々と振る舞っている自分たちと対照させるのは、前回に続いて二度目である）。この《此方も考を変へるからネ》は、正々堂々と戦うという方針を捨てて、汚い手口でも何でも滅茶苦茶にやってやる、という事であり、「もうどうなってもかまわない、悪いのは陰廻りする父や他の家族たちなのだから」という報復的で無責任な気分（やけ）になり掛けていることを示している。しかし、《此方も考を変へるからネ》と言つてみた所で、実際には、千代を連れ去られてしまった順吉はお手上げで、打つ手が何も無い筈である。つまり、この言葉は、強がりに過ぎない。また、順吉が勝利するためには、冷静になることこそが重要で、感情的になりやけになることは、敗北に通じる道でしかないのである。志賀は、こうした事すべてを承知の上で、未熟な青年がこういう場合に陥る感情の正確な表現として、このように記述しているのである。

しかし叔父になだめられて、順吉は再び物干場に登る（恐らくフィクションであらう）。《体が震へて来》る程の激しい怒りは感じたが、なだめられたことと物干場に登つたことで、一旦は静められ、後でさらに激しい爆発となる、という緩急の付け方は、なかなか効果的だと思う。

夜の物干場では、周囲がよく見えないため、室内では決して感じ得ないような、広漠たる空の広がり、この世界の巨大さが強く感じられる。その事が、以下の場面では、非常に良く利用されている事を注意して置きたい。

先ず、夜の静寂を縫って、《汽車の笛とか電車のレールをきしめる音などが未だ聞えて来》る。夜行列車は、東海道本線などで明治中期から走っていた。電車の運転は、明治三十七年八月から甲武鉄道（お茶の水 八王子間。明治三十九年十月から国有化され、現在はJR中央本線）で始まっていた。志賀家は麻布三河台町（現在の港区六本木四丁目辺り）にあり、中央本線からも東海道本線からも約二キロの距離で、両方の音が聞こえたのであろう（注80）。

鉄道は、まだ飛行機などがなく、地球が今より巨大に感じられていた時代には、今、自分が居る場所と、遙かに遠い世界をつなぐものとして感じられており、その響きは、世界の巨

大な広がりを感じさせたであろう。その世界の広大さが、千代が連れ去られたのは父の差し金だったと知ったことと相まって、順吉に無力感を与え、もう取り返しが付かないことのように、《千代はもう決して再び帰つて来る事はない》という《感傷的な気分》に誘ったのであろう（ただし、これは『大津順吉』の中での話で、実際の志賀は、翌日以降、Cとの婚約を果たすために、次々と手を打ち、なお一ヶ月半にわたって戦い続けているので、この時、本当に《感傷的な気分》になったかどうかは、疑う余地がある）。

鉄道の響きはまた、当時、両国橋駅（現・両国駅）から総武鉄道（現・総武線）に乗り（または既に国有化されていた元日本鉄道の海岸線（現・常磐線）に上野駅から乗り）、成田線に乗り換えれば、千代（そしてC）の実家近くの佐原駅まで行けることをも、当然、脳裏に呼び起こすものであった。だから順吉は、《若しかしたら千代は今晚の内に佐原の方の郷里へ送りかへされたかも知れない》と思うのである（注81）。

そして、東京から佐原方面はほぼ真東に当たるからであろう、順吉は《こんなことを思ひながら時々稲光りのする東の遠い空を見》る。この遠い《稲光り》は、光だけ見えて、音は聞こえないものだろう（注82）。それは嵐の前触れという程、力強いものではなく、線香花火のような、順吉の一旦燃え上がった怒りの火の余燼のようなものとして感じられる。そして、この《稲光り》の音も聞こえぬ遠さに、順吉は《今更に千代と自分との空間的な距離を感じた》のである（これは恐らく事実で、（回想）に書かれた《 空間。》がそのメモと考えられる）。

この時、順吉が感じたのは、直接には、鉄道を使えば埋められる実際の空間的距離である。が、それは、二人の間に立ちふさがる巨大な何か、真っ暗な夜空が表わしている、言わば抗いがたい天の意志のようなものを、読者にとっては象徴していると言って良いであろう。

志賀は、ここで段落を変えることなく、絶対に順吉に会おうとしない父について語り出す。これは、千代との間に立ちふさがる巨大なもの、天の意志のようなものと、順吉を絶対に寄せ付けず、千代との間に立ちふさがる父とをイメージ的に重ね合わせるためであろう。ただし、その効果は、ここではまだそれ程、大きくはない。が、次の（十三）章で、その効き目が現われて来るのである。

この《父は》以下と、続く二つの段落は、物干場で順吉が考えた事として提示されている筈なのだが、内容が抽象的であるため、考えられている場所の実感は消失している。

その事と歩調を合わせて、順吉は、ここでは父に対する怒りを見せない。むしろ冷静に理性的に、《痴情に狂つた猪武者のする事位に軽蔑されてゐる位なら、どんな衝突をしても、直接に会つて、もう少しは解つて貰はなければ、と思》うだけである（これは次の（十三）章の伏線にもなっている）。そして、言わばその代わりに、父の周りにいるその他の家族たちの方に怒りの矛先を向け換える。

先ず、叔父に対しては、父が《今日会社で村井に（中略）千代には暇を取つて貰ひたい》と話したことや、父が順吉を《痴情に狂つた猪武者》と言っていて、約束を守る気がないことを知っていながら、この日の昼間、順吉にそれを教えず、夕方から外出してしまった不親切に対して。そして祖母に対しては、村井の妻の言葉が信頼できるものであるかのように順吉をなだめ、だましたことに対して。母に対しては、村井の妻に千代を《屹度直ぐ還して下さいよ》と言ったことが、心にもない嘘だったと見て。

順吉は、父も含めて、こうした《自家の者のやり方が余りに此方を軽蔑したやり方である》（十三）と感じた。そこで、次の段落では、彼等が何故、その様な態度を取ったのかを説明し、彼等全員に対する怒りを持続させたまま、（十三）へとなだれ込む訳である。

この作者の意図は良いし、効果も挙げている。が、叔父・祖母・母の具体的な言動から離れて、《これらの人々》（順吉の家族たちの筈だが、途中から順吉の仲間の家族たちも含めて言っているようである）が順吉らの仕事に対して無理解であることを抽象的に語ったこの

長い段落は、唐突であり、幾つもの飛躍がある。

例えば、順吉の仕事に対する家族の無理解については、『大津順吉』では僅かに「第一」の(四)と「第二」の(五)で、父と祖母に関してごく簡単に触れているだけだし、順吉(志賀)の友人たちの仕事に至っては、一度も触れたことがないからである。

また、例えば、《私共は絶えず、何かしら自惚れ強い事を云はずにはゐられなかつた。》とあるが、『大津順吉』には、これに該当するようなことは何も書かれていない。志賀は恐らく、「暴矢」(のち「望野」)を始めた明治四十一年夏以降、そして「白樺」創刊以降の自分たちを念頭に置いて《私共》と言っているのであろう。例えば明治四十二年七月の「手帳12」の「濁水」に関連するメモの中には、《今の青年は自信があつて自惚れるのではない、己惚れて自身を得やうとしてゐる、己惚れてゐると、いつかエラクなれると思つてゐる》とあるからである。

また、後年の作ではあるが、『蝕まれた友情』で、「白樺」(文中では「水榭」)の同人たちについて、有島生馬に対して、次のように言っている所がある。《皆に共通したものは芸術に対する強い熱情だつた。これで皆は結ばれてゐた。さういふ意味で僕は「水榭」は、芸術に対する熱情の運動といふ方があつてゐると思ふ。芸術に対し、謙虚な気持を持ち、望みだけは大きく、全心を傾けて、それに邁進しようとした。此気分は、時に子供染みて見えた場合もあつたと思ふが、僕達は口だけで云つてゐたのではなく、云つてゐるだけの努力は、今思へば、仕てゐた。然し、君にそれが子供らしく映つたのは仕方ない事だつた。明ら様に輕蔑を示しはしなかつたが、君と一緒にゐられない様子はよく分つてゐた》。

『大津順吉』執筆時点で既にかなりの成果を挙げている「白樺」同人を念頭に置いているからこそ、順吉(志賀)は、《皆は私共のいふ事が、いつまでたつても価値のない空想であつて、それが実際の人生では仕舞迄、何の役にも立たぬものと決め込まずにはゐられなかつたであらう。》《其時の現在に於て、多少なり自信を持ち得るやうな仕事が出来てゐなかつた》《然し其処で吾々も止つてはゐられなかつた》という言い方で、「今ではもう自信を持ち得るやうな仕事が出来ている、そして自分達の言う事が実際の人生でも価値があり、役立つことが証明済みである」、と匂わせる事が出来たのである。しかし、『大津順吉』だけを読む限りでは、読者はなぜ順吉がこのように自信を持っているのか、(順吉=志賀として読まない限りは)全く理解できない。志賀にとっては根拠のある自信であっても、『大津順吉』の順吉の口から言われると、根拠のない誇大妄想としか受け取れないのである。

飛躍という点ではまた、これまで一貫して順吉の視点から《私》という一人称単数形で語って来たのに、何故ここに来て急に主語が《私共》と複数形になってしまうのか、普通の読者には理解できない所であろう。

私は、この最後の点については、単に「望野」や「白樺」の同人を念頭に置いたためだけでなく、『大津順吉』執筆開始の少し前、明治四十五年三月三十日頃に、志賀がアナトール・フランスの『エピキュラスの園』を読んで抱いた「空想」が影響したせいもあるのではないかと考えている。その「空想」とは、『暗夜行路』草稿13や『閑人妄語』等で説明されているもので、「人類は、将来、地球が冷え切ってしまう以前に、地球から他の星に移住するか、太陽に代わるものを生み出す所まで進化しなければ絶滅する。男たちの仕事への執着はそこから起こる。自分たち若い芸術家たちが、古いものを攻撃し、新しいものを生み出そうともがいているのも、無意識の内に、生き延びようとする人類の意志に突き動かされている為だ。」というものである。この「空想」は、志賀を強く興奮させ、『大津順吉』完成後間もなく、最初は主人公名も大津順吉として書き始められた自伝的長編小説・所謂「時任謙作」(『暗夜行路』草稿13もその草稿)の根幹をなす思想となつて行く。それまでは《私》だった主語が、この一段落だけ突然《私共》になるのも、新しいものを生み出そうとする青年たちに共通する衝動に注目することで、人類の意志の存在を指摘しようとした所謂「時任謙作」の構想の先駆なのであろう。

また、単なる《空想》に見えるものに実は価値があると主張するのも、『エピキュラスの園』を読んで抱いた「空想」（志賀は幾つもの文章の中で、繰り返しこれを「空想」と呼んでいる）が念頭にあるからであろう（注83）。そして、《止ることなき若者について、それから先を考へようと全くしなかつたのが、それ等の人々が私共との関係で、彼等自身を或意味で不幸にした一つの原因なのだと思ふ。これは然し殆ど避けられない事とも思ふ。》と、若者の進化する力を強調し、進化する時代から取り残されて行く大人たちの無理解を避けられない事としているのも、この「空想」に基づく考えなのであろう。しかし、こうした事は、『大津順吉』においては全く説明されておらず、読者に分かる筈もないのである。

この段落は、この様にいろいろ問題のあるものではあるが、しかし、ここに指摘した問題、即ちこの段落が唐突であり、飛躍があり、読者が置いてきぼりにされてしまう等々のことは、志賀自身も原稿を読み返してみても、気付かなかつたとは思えない。つまりこれは、意図的に採用された一つのテクニクではないかと私は思うのである。

これまで『大津順吉』では、登場人物としての順吉が興奮することはあっても、語り手としての順吉が興奮することはなかつた。ところが、この段落では、語り手としての順吉が、突然、家族への怒りのために興奮し、脱線し、直接読者に向けてぶつた演説のようになっている。その内容もやや独り合点でうわずっていて、順吉にはよく分かっているが、読者には説明不足で十分には分からない。それでも構わないといった風に、早口に言いたいことだけを一方的にまくし立てた感がある。そこに冷静であるべき語り手の興奮が感じ取れる。その事が、最終（十三）章の順吉の興奮・急烈な怒りに、読者を心情的に同化させる伏線として機能しているように思う。

この段落はまた、『大津順吉』の内容が、順吉一個人の一恋愛、一家族内の対立という小さな問題に止まらず、《私共》《止ることなき若者》たち全体に関わることであり、このように大風呂敷を広げ、また、《私共》の《空想》《自惚》《仕事に対するその烈しい野心》が、近い将来、《実際の人生で》大きな結果をもたらすと予告している為に、誇大妄想的な興奮へと読者をも引き込む。そしてその事が、後で説明する最終（十三）章における順吉の巨人化の伏線となっていると私は考えるのである。

なお、私は、自惚や誇大妄想を決して軽蔑してはいない。それらは、青年にとっては自然なことであり、また時には必要でさえあるものだと考えている。そして、志賀は、この小説の、この時の順吉に、誇大妄想が必要だと知っていたから、この様な書き方を選んだのだと思う。何故なら、この小説の中で順吉は、キリスト教によって心身を抑圧され、終始余り元気が無く、幸福そうには見えない。しかも、順吉はここでは、千代との結婚を家族中に反対され、軽蔑され、千代も連れ去られ、最低最悪の状況にまで追い詰められているのである。だから、この（十二）では、順吉の大言壮語が、そうした不当な抑圧をはね除け、自己を真に肯定できるようになるための第一歩として、必要だったのだし、（十三）章も、その方向で書かれていると私は考えるのである。

ただし、志賀は、千代との事件当時の順吉を、真に偉大な存在だと言っている訳では決してない。《私共は絶えず、何かしら自惚強い事を云はずにはゐられなかつた。然し仕事に対するその烈しい野心と、實際持ち得る自信とには何処か不均衡な所のあるのは自分でも感じてゐたのである。（中略）その事が私共の自惚を云ふのに幅のない声きり出させなかつたのである。如何にも甲走つた声であつた。そして此きい／＼声でいふ自惚は實際その仲間以外には通用しなかつた。》と認めているのだから（注84）。しかし志賀は、「自惚は悪いもので有害だ」と言っているのでもないことは、この段落全体をよく読めば明らかである。

（ ）「第二」の（十三）

父と話し合おうとして拒絶され、鉄亜鈴を投げつけ、友人に手紙を書くという最終章で、

烈しい怒りに満ちたまま終わる。文学的にも優れた章である。

順吉は腹立たしくて寝られそうにもなかったため、《どんな衝突をしても、直接に会つて、もう少しは解つて貰はなければ》という(十二)での考えに従って、父を起こそうとする。

この時、自室の《縁側を往き来》していることが、じっとしてられない苛立ちの身体的な表出となっている(十一)にも同様の事例があった)し、その自室の《雨戸》が閉められていることが、息苦しい閉塞感を強めるのに効果を挙げている。

いかにカッカしていたかは、《もう一時近》いという、普通なら諦めるであろう非常識な時刻にもかかわらず、敢えて《台所口を叩いて》(もう寝入っていてなかなか起きて来なかったであろうものを、しつこく叩き続けたのであろう)《女中に其処を開けさせ》父の寝室に行った事に、はっきり現われている。

しかし、父は、今は深夜であり、会社が一番忙しい時で、明日も朝早く外出しなければならない、という理由で、相手にしなかった。

志賀が書いているように、父・直温は、総武鉄道会社の専務取締役で、この時は、前年に公布された鉄道国有法により、九月一日に総武鉄道が国有化される直前だった。とは言え、これは所詮口実で、もし息子を愛する気持があったなら、少しばかりの時間を割くことを厭う筈はない。要するに、息子の言い分に耳を傾けるだけの愛情は、持ち合わせていなかったということであろう。

全く相手にされなかったことで、順吉は《「そんなら聞いて頂かなくてよござんす」》と捨て台詞を残して帰って来るが、《それが自身にすら「何をするか知れませんか」とでも云つてあるやうに聴こえた。》とあるのは、「自分がどんなひどいことをやって、どんな結果になってもかまわない、その責任はすべて父や他の家族にあるのだから」という報復的で無責任な気分(やけ)になっていたということである。

そして順吉は、部屋へ帰るとますます興奮し、歩き回り、《此時程の急烈な怒りと云ふものを殆ど経験した事がなかつた。》という程の怒りに囚われる。この怒りの心理が、『大津順吉』の最大の見せ場と言っている部分となっている。

その特徴は、順吉の心理が、烈しい怒りに囚われている自分と、そういう自分を極めて冷静に観察している自分とに、はっきり二つに分裂している点にある。即ち、《埃及煙草の百本入りの空箱を(中略)力まかせに畳へ叩きつけて見た》りしながらも、同時に《こんなやけらしい様子も余儀なくされてするのはない事を、其時の現在に於て、明かに知つてみた。若し側に人がゐたら私はヴァニティーからもそんな事は出来ないと知つてみた。それでも(中略)それを努力して押へる必要もあるまい。こんな事が其時の現在で私の頭に浮んでみた。》ということ。そして、《あれ程の怒りの中にあんな止められない可笑しさを感じた事》、即ち、鉄壺鈴を投げ付けた時、下で寝ている岩井の様子を思い浮かべて笑ってしまったこと、である。

これは、私の考えでは、心理学で言う「解離(dissociation)」という状態に近いものではないかと思う(注85)。

「解離」とは、意識・記憶・自己同一性・環境認識の統合が失われた状態(アメリカ精神医学協会『DSM 精神障害の分類と診断の手引き』)を言い、軽いものでは、病的ではない、ごく日常的な「ぼうっとしている状態や空想や白昼夢に耽っている状態」から、非日常的・一時的な「何かに取り憑かれているかのような状態、人が変わったように荒れ狂っている状態(怒り発作)、狂乱状態」「夢遊病」、さらには、現実感が無くなる「離人症」、心因性の「記憶喪失」(精神医学用語としては「健忘」と言う)、人格が分裂する「多重人格」などの病的な状態まで、様々なレベルがあるとされる。その発症のメカニズムとしては、通常、乳幼児期には、誰でも意識・感情・行動が不安定に大きく揺れ動くが、成長するに従って、意識によってコントロールする力が増し、普段は安定した意識・記憶・自

己同一性・環境認識の統合状態が続くようになる。それが、幼少期の心的外傷などが原因となって、この統合が妨げられると、病的な「解離」が生じる、と考えられている。

『大津順吉』末尾の状態は、病的ではないが、「人が変わったように荒れ狂っている状態（怒り発作）」と冷静な自分との一時的な「解離」であろう。

志賀の文学には、「解離」に関連性のある心理がよく登場し、それが彼の文学の素晴らしさ・オリジナリティーの大きな要素の一つとなっているように私は思うので、脱線になるが、幾つか例を挙げてみよう。

例えば、『濁つた頭』の（七）には、頭が変になって、《自分自身の存在すら、あるか、ないか、分らなくな》るという「離人症」的な症状や《妄想が恰も現実の出来事のやうにはつきりとして頭の中を通つて行》く「夢幻症（onirisme）」または「譫妄（delirium）」と呼ばれる症状が描かれ、（八）では自分がお夏を錐で殺したらしいのだが、それが現実なのか夢なのかが分からないという、やはり「離人症」的な症状が描かれている（注86）。

『剃刀』では、風邪による高熱で意識が朦朧としていた事と、烈しい「怒り発作」による「解離」的な心理のもとでの衝動的な殺人が描かれる。

『范の犯罪』では、妻と従兄の関係によって強いストレスを受け続けた主人公が、心身の疲労で朦朧とした状態で、自分でも故意か過失か分からないという「解離」的な殺人を犯す心理をリアルに描いている（注87）。

『大津順吉』と同じ月に発表された『クローディアスの日記』には、隣で罵られている《兄の夢の中でその咽を絞めてゐる》自分をまざまざと想像してしまう事が出て来るが、これも、悪しきもう一人の自分が勝手に兄の首を絞めているという多重人格的な「解離」状態と言える。

また通常の夢、さらには悪夢に襲われているような状態も、一時的な「解離」と言えるならば、恐ろしいもののけの夢を描いた『祖母の為に』も、「解離」の心理と関係すると言える。

夢遊病的なものとしては、『不幸なる恋の話』に、ヒステリーの女性が夢遊病的に、夜、部屋に入って来るという事件を描いているし、『城の崎にて』のラストも、《足の踏む感覚も視覚を離れて、如何にも不確かだつた。只頭だけが勝手に働く。》と夢遊病的である。少年が法界節の女に魅せられて、《何処までも従いて行つ》てしまう『真鶴』も夢遊病的である。

『暗夜行路』後篇第四の九に出る、動き出した汽車に飛び乗ろうとした直子を謙作が発作的に突落とし、どうしてか《自分でも分らない》というエピソードや、電車内で寄りかかって来た飢餓状態の少年工を、自分の気持ちに反して反射的に肩で突返し、《後でどうしてそんな事をしたか、不思議に思ふ》という『灰色の月』も、意識的な心理と無意識的な行動の「解離」を描いている。

こうした作品を書くのは、志賀自身に、比較的「解離」しやすい心理傾向があった為だと私は思う。例えば『黒犬』では、多重人格的な心理が実にリアルに描かれるが、『創作餘談』によれば、志賀はモデルとなった麻布老婆殺し事件が迷宮入りした後、自分が実は夢遊病患者で、知らない内に老婆を絞め殺したのではないかと（つまり人を殺しておきながら忘れていた心因性記憶喪失という「解離」状態なのではないか）という《変な空想にとらへられ》たことが実際にあり、『黒犬』は、それを主人公の空想に置き換えることで成立したものである（注88）。

また、明治四十年六月二十三日の「手帳7」に、《人間は夢現の時が最も賢いと思つた、賢い事がある、三昧に入るといふのはこんなものではあるまいか、ノ第一人格がボーッとして、第二人格が考へるのを音無しくカン察してゐる時である、中々エライ事を考へる、エライ事といふより、ハツキリしてゐる時一寸思ひ着かぬやうなことを精細に考へてゐる、ノ然しこれは面白い何にかに書いて置かうと、ハツト目をサマスト、もう第一

人格の支配が烈しくなつて第二人格がアワテ、逃げるから何んだかマルデ解からなくなる、此場合は漸々に正気にならねばならぬのだ、》とあるのは、「解離」的の二重人格的傾向が志賀にあったことを、想像させる。

『S君との雑談』によれば、志賀は「小学校の卒業成績は、勉強では3番ぐらいだったが、教場でじっとしていられないために品行点が最低の六点だった。」と言ひ、「旅行も船は歩き回れるから大丈夫だが、汽車は歩き回れないために長い旅行は嫌いだ。」と言っている。これは所謂「注意欠陥/多動性障害(ADHD)」と考えられるが、F・W・パトナムの『解離』(みすず書房)P51以下によれば、近年の研究では、この症例は親から何らかの意味で虐待された児童に多く見られるものであり、また、「ADHD」と診断される児童の中には、実は解離性障害患者であるケースがあると言う。

同書によれば、「解離」状態になりやすい人は、幼少期に心理的外傷を受けている場合が多いと言われる。志賀の場合、満二歳の頃、生母から引き離され祖父母に育てられたこと、満十二歳で母に死なれたこと、父との不和が長く続いたことが、よく知られている。また、祖母には甘やかされたようだが、時には羊羹を欲しがった直哉に祖母が癩癩を起こし、切っていない羊羹を口に押し込むようなこともあり(『暗夜行路』草稿1)、祖母の養育態度が適切だったかどうか、疑わしい所もある。

祖母・留女は脳病で二年程、父・直温も脳病で二三年、ぶらぶらしていた時期があったことも、直哉に遺伝したかも知れない(注89)。直哉自身も、満十九歳の春から神経衰弱になり、学校を休んでいた時期がある(『山荘雑話』『美術雑談』)(注90)。

志賀に限らず、小説家は一般に、「解離」の心理に親和性がある筈である。小説家は、普段の自分とはかけ離れた空想や白昼夢の世界に没頭し、まるでそれが現実であるかのように感じる事が出来る。また、一人の主人公だけでなく、同時に複数の違った個性の登場人物にそれぞれ深く感情移入し、彼等を対話させたりすることもできる。これは一種の人格分裂の状態と言えるだろう。有名な小説家の殆どが、幼少時代に不幸または不健全な家庭環境で育って、多かれ少なかれ、病的な所を持っている事も、こうした事情に因るのであろう。

話を『大津順吉』に戻す。

烈しい怒りに囚われた順吉は、埃及煙草の空箱では軽すぎたため、《九磅》(=約4kg)の鉄亜鈴を戸棚から出して、《出来るだけの力で》床に叩きつける訳だが、4kgだと片手で肩より上まで持ち上げるのは、かなり大変な位の重さである。その鉄亜鈴が畳にバウンドして、《六畳の座敷を斜めに一間余り》《はずんで、部屋の隅の机》まで飛んで行ったというのであるから、相当の力である。《かなり厚い根太板》が《真ん中から折れ》たというのも無理はない。《其時に鉄亜鈴が机の上のランプとは五寸と離れない所へ飛んで行つた》(注91)にもかかわらず、《それを見ながらヒヤリとも何とも仕なかつた》というのは、順吉も言う通り、やはり《平常の心持では》ない。石油ランプは、ホヤも石油を入れる油壺もガラス製であるから、灯を点している石油ランプに鉄亜鈴がぶつかれば、油壺が割れて石油が辺りに飛び散り、引火する危険性は極めて高い。机の後ろは障子だったし、木造の日本家屋では、あっという間に炎が燃え広がり、今日のような消火器はもとより、水すら手近にはなかった(千代が気絶した時に飲まず水にも困った)この離れでは、消火は殆ど不可能だったであろう。順吉が子供の時から《ランプには非常に用心深くしつけられて来》たというのも、当時としては当然の事なのである。そうしたランプの恐ろしさがよく、分かっていたにもかかわらず、順吉が《ヒヤリとも何とも仕なかつた》のは、「火事になろうがどうなるうがかまわない、その責任はすべて父や他の家族にあるのだから」という極めて報復的・破壊的・攻撃的な感情に囚われていたためでもあろう。それは、怒りに囚われた一種の視野狭窄であり、結果の重大性をきちんと考慮する事が出来なくなっていたためとも言える。

ここで順吉は、《戸棚の段に肘をつけて興奮から起る体の芯の震へをおさへるやうにして凝つとうつ伏しにな》るが、これは、自分をコントロールし切れず、身体が勝手にとんでも

ないことを始めそうな危惧を感じたからであろう。その瞬間に、順吉の《頭に不図、下に寝てゐる岩井の様子が浮かんで来た。鼻の低い顔色の悪い、然し肥つた、如何にも田舎者らしい新しく来た書生が、真夜中寝てゐるすぐ上の天井に今のえらい音を聞いて闇の中にムックリ起き上つた様子を想ひ浮かべて了ふと、私には堪へられない可笑しさがこみ上げて来て独りクスリ／＼笑はずにはゐられなかつた。》となる。これが概ね事実であることは、「手帳12」の「濁水」のメモの中に《サンダウのダンベルをタ、キツケル 下の石井を思ひ笑ふ。》とあることと（注92）、先述の（回想）に、《独り物ほしへ乗る。 空間。フ、ンと笑ふ、》と出る《フ、ンと笑ふ》が石井の事と推定できること、そして、明治四十年一月十日の志賀日記に《サンダウの運動を初める》とあること、などからほぼ確かめられる。

ただし、私の想像では、（回想）に書かれている順序の通り、実際の志賀は、父との面談を拒絶された直後に、怒りの余り鉄壺鈴を叩き付けたが、その時は石井の事は思い浮かべず、その後、有島壬生馬宛の手紙に長々と事件の経緯を書き列ねて怒りをぶちまけた後、まだ寝られそうもなかったもので、物干場に登り、Cの家との《空間》的距離を感じたり、怒りを反芻したりしている内に、ふと石井のことを思い浮かべて《フ、ンと笑》ったのではないかと思う。しかし、文学的な表現としては、志賀が選んだ書きの方が遙かに優れている。

この石井のイメージは、思いがけない時に《不図（中略）浮かんで来た》事からも、明らかに無意識に由来するものであり、従って多義的な現象で、その意味を一つに限定して解釈すべきではないと思う。そこで私は、以下の四つの意味を、可能性として考えて見たい。

その第一は、無意識からの警告という意味である。鉄壺鈴を叩き付けるという極めて危険な行為に対しては、普段なら意識が危険を感じ、ブレーキを掛ける筈なのに、それが余りに烈しい怒りのために、ブレーキが掛からなかった。ランプの方へ鉄壺鈴が飛んだ事に対しても、ヒヤリともしなかつた。その事に対する反応として、石井の映像を無意識が警告として送って来たのではないか、ということである。この場合、石井の意味は、先ず第一に、何も悪いことはしていないのに、志賀の怒りのとばっちりを受けて迷惑を蒙った犠牲者ということである。こういう被害者を出さないようにせよということである。

また、鉄壺鈴は、もともと父に対する怒りの持って行き場が無くて、床に叩き付けたものである。つまり、本当は父に投げ付けるべきものだったのである。だから、石井の姿が浮かんで来たのは、父とは似ても似つかぬ相手に当たり散らしていることの無意味さを、無意識が指摘したものと解釈できる。いずれにしても、この解釈では、志賀（順吉）が笑ったのは、自分のした行為が無意味だったと感じて自らを笑ったことになる。これらは、小説のように、鉄壺鈴を投げ付けた直後に岩井（石井）の映像が思い浮かんだ場合に、より適合する解釈だが、後で物干場で石井の映像が浮かんで来たとした場合も、警告が遅れて届いたというだけで、解釈を変える必要はない。

解釈の第二は、自尊心の回復ということである。志賀が烈しく怒っているのは、父によって非道にもCを連れ去られ、面談も拒否され、踏み付けにされた自尊心の痛みがあるからである。その自尊心の傷口を塞ごうとする無意識の欲望によって、惨めで情けない弱者としての石井の映像が浮かんで来て、それに父に対する敗者としての惨めな自分の一面を投影し、それを笑うことで、心理的には、自分の真実を半ばは受け容れつつ、半ばは敗北の痛みを乗り越え、強者になったような気持になれるようにした、という解釈である。この解釈では、志賀（順吉）が笑ったのは、自分を弱者と感じてストレスを感じていたのが、一転して自分を強者と感じられたための笑いということになる。

解釈の第三は、第二の解釈の読者に対する意味ということになるが、この岩井の映像には、読者に対して、順吉の強者としてのイメージをどんどんエスカレートさせて行くような機能が備わっているということである。即ち、この時、順吉は、二階から一階の岩井を透視しているかのような位置関係にあるため、順吉は、言わば二階建ての家と同じ背丈の巨人と

化したかのような印象が生じる。それに対して岩井は、全く情けない、惨めな弱者としてイメージされているので、順吉の強者としてのイメージが対照によって強められるのである。

人は誰でも、高い所に登ると自分の価値が増大したように感じるものである。『大津順吉』の中で順吉は、家族の中で一人だけ二階に住んで居る。そして、祖母と言いつく時にも、祖母を二階に呼び付けている。兵隊が自分より高い、《三階になつて居る土蔵の屋根》の上に登ろうとすると突然怒り出す。婚約を発表する時には「中二階」の祖父の部屋に陣取り、千代が連れ去られた後には「物干場」に登り、それが誇大妄想的な語り手の演説に繋がって行った。こうしたイメージ的な伏線があって、この鉄壺鈴のシーンで、順吉が巨人化したような印象が作り出されているのである。

さらに、その順吉に父のイメージが結び付く。即ち、父は順吉に《絶対に（中略）会はずとはしない》し、読者の前にも『大津順吉』を通じて一回も姿を見せない。その為、見えない父が、いつの間にか、順吉の前に立ちふさがる絶対的な、巨大なものであるかのように錯覚されて来る。そこに、先に（十二）の物干場で感じた千代との間の《空間的な距離》と暗い夜空が結び付いて、父こそが千代と順吉の間に立ちふさがっている暗い巨大な天の意志そのもののよう感じられて来る。その事が、逆に、父から《痴情に狂つた猪武者》と呼ばれた順吉をも、巨大な猪のような力・エネルギーを以て天に挑みかかる巨人のように感じさせる。すると、重さ4kgの鉄壺鈴を叩き付けて根太板をへし折った順吉の所行も、例えばダガン神殿を一人で倒壊させたと言うイスラエルの伝説的英雄・サムソンのような、何やら怪力の巨人めいた存在として、読者に感受されることになるのである。

こうした現象は決して偶然ではない。『大津順吉』という小説のメイン・テーマは、もともと、キリスト教によって抑え付けられ小さく縮こまっていた順吉が、次第に自分を取り戻し、自由な強い人間になるという方向性を持っている事と、志賀が高い所に登った時に自分の価値が増大したように感じられる感覚を好む所から、こういう展開が生まれて来るのである（注93）。

先程（十二）の所で、私は、誇大妄想は青年にとって、時には必要なものだと述べて置いた。『大津順吉』の中で、順吉は概ね、キリスト教によって自然な欲望を禁止され、自らを狭い道徳の中に閉じ込めて苦しむ、自信のない弱者として描かれていた。それが、有りの儘の自分を肯定できるようになるためには、そうした過去を打ち消すために、一旦は自分の価値を実際以上に高く評価する誇大妄想に陥ることも、元気付けのための必要悪として許されるべきだ、ということなのである。

同様の意味で、順吉がここで烈しい怒りに囚われることもまた、精神衛生上の必要悪と言える。心理学者W・ジェームズは「怒りほどいやおうなく抑制を破壊するものはない」（『宗教的経験の諸相』第十一～十三講「聖徳」）と言っているが、普段、道徳的・理想主義的・不潔恐怖症的・完全主義的など、セルフ・コントロールが強すぎるタイプの間は、烈しい怒りに囚われた時に、初めて自分を全面的に解放することができる。普段おとなし過ぎるような人が、一旦怒り出すと別人のようになって人を驚かさず場合があるが、それもこうしたケースなのである。

若い頃は真面目なキリスト教徒であり、棄教後も道徳的・完全主義的傾向が終生強かった志賀の場合も、烈しい怒り・癩癩のエネルギーが、自らをきつく縛り上げていたセルフ・コントロール、W・ジェームズの言う「抑制」を破壊し、そこから解放してくれる救いとなる場合が多かったようである。先に述べたように、「解離」の心理が志賀文学によく出て来るのも、志賀がセルフ・コントロールが強すぎるため、小説の登場人物が心理的に追い詰められ、「解離」の心理によってセルフ・コントロールから解放される場面を小説に描くことで、普段抑圧していた自己の一面を解放する必要があった事が、原因の一つなのであろう。

『大津順吉』の場合、この怒りの発作によって、順吉がキリスト教から直ちに解放される訳ではもとよりない。しかし、鉄壺鈴を叩き付けるという形であれ、自らの感情を解放放

たことは、順吉にとって大きな一歩であろうし、この不完全燃焼の不様な青春の物語にストレスを溜めながら読んで来た読者にとっても、これはカタルシスの快感を与えるものだと思う。

以上、三つの解釈のいずれにおいても、順吉（志賀）のイメージは（あくまでもイメージ上だけだが）強者であり、岩井（石井）のイメージは弱者であった。しかし、二階建ての家の二階に順吉（志賀）、一階に岩井（石井）が居るというイメージは、二階建ての離れ全体を一人の人間の象徴と見るならば、順吉（志賀）が頭に血が上った興奮した意識、岩井（石井）は半分眠ったような無意識を象徴するものとも解釈できる。その意味では、意識はもっと落ち着きを取り戻し、無意識はもっと活発にして、この両者をバランス良く統合することこそが、この時（明治四十年にも四十五年にも）、志賀にとって重要な課題であり、それを果たすことで志賀は人格的に成長し、心身の調和・安定を獲得できる筈だったのではないかと、とも私は考える。これが第四の解釈である。しかし、現実には志賀は、四十五年に『エピキュラスの園』を読んで抱いた理論的・意識的な「空想」に興奮し、若者の欲望を過剰に肯定し、強者の道を突き進もうとしてバランスを失った。それが所謂「時任謙作」の挫折となって、二年後に現われるのではないかと私は思うのである。

ただし、志賀は、無意識や、普通弱さと考えられる子供の価値を評価すべきであることは、明治四十年以降、次第にはっきりと自覚するようになって行き、『大津順吉』の随所にそれが現れている事は、本稿で度々指摘して来た通りである。

『大津順吉』のラストは、パリにいた有島壬生馬への手紙で締め括られる。志賀の明治四十二年五月二十一～二十八日付けの壬生馬宛書簡に《一昨秋の僕の手紙（長いの一つしか記憶してゐないが）一寸見たいと思ふ。なくならぬやうな方法で送つてくれればありがたい。》（注94）とあるのが、この手紙のことだと考えられるが、残念ながら、手紙の実物は、今の所見つかっていない。

ラストをこの手紙で締め括ったのは、一つには、先に述べた強者への方向性と関係がある。何故なら、日本では《変則な発育をとげた子供以上には見えな》かった順吉が、芸術の都パリに画家の親友を持っているという事実が提示されると、にわかに順吉が人類の進歩の最先端に繋がる重要な存在に見えて来て、順吉の父などより順吉の方が、遙かに大きな存在である、という印象が生まれるからである。

実はこの友人のことは、（十）の八月二十九日の所でもちらっと出てはいたのだが、ここでは《巴里にある友人》としか書かれておらず、手紙の内容が書かれていないので、さほど重要な存在とは思えなかった。それが、ここで《巴里にある絵かきの友達》と言い換えられただけで、ぐんと重みを増す。また、手紙の内容からも、順吉がこの友人と対等に交際を持っていて、しかもこの偉い（らしい）画家が順吉の考えを全面的に支持している事が感じられるので、これが強力な援護射撃となる訳である。

また、最後を手紙で締め括った事の、もう一つの重要な目的としては、順吉の興奮・怒りから読者に客観的な距離を取らせず、心情的に一体化させたまま終わらせる事があったと私は思う。手紙は直接読み手に訴えかけるものなので、読者に感情が伝わりやすい。しかもこの手紙は元々怒りをぶちまけるために書いているもので、非常に感情的なものである。具体的な内容は殆ど書かれていないが、それは『大津順吉』の婚約以降の内容と重なっていると想像できるし、《興奮から切れ／＼な文章で書い》て、それが《レターペーパーの裏表に九枚》にもなったという所などから、相手のやり口・出方を説明しては、「……これでも僕は怒っては悪いか？」、「……これでも僕は怒っては悪いか？」と叩き付けるように畳み掛けている手紙の雰囲気は、十分想像できる。巻紙に筆で書く場合よりも、レターペーパーにインクで書く方が遙かに字は小さく、字数は多くなるから、これは相当に長い手紙になった筈であり、その至る所に怒りが渦巻いていたであろう。

そして、手紙の終わりの方では、《廃嫡するとも此事は許さぬ》と順吉に冷酷な父の姿勢

と、《廃嫡は家のカキン》（家禁？ 家訓で禁じられているの意であろう）と理由は古くさいが、順吉びいきの祖母の対立を語りつつ、《こんな人達とは共に暮せない》と二人一緒に切り捨てる。そして、《「明治四十年八月三十日午前三時半」と入れて、ペンを擱いた。》と手紙の擱筆と『大津順吉』の擱筆が一致するように工夫されている（もちろん、実際の手紙の書き終わりと、『大津順吉』の完成とは、五年ずれている訳だが）。これも、大津順吉の興奮・怒りに読者を一体化させたまま終わらせるためであろう。

日付だけでなく、《午前三時半》と時刻まで正確に記録するのは、自分の中で決定的な、後戻り出来ない、言わば一つの切断があったという実感に基づくものであろう。例えば、谷崎潤一郎の『痴人の愛』（二十）で、讓治がナオミを追い出した時に時計を出して時刻を確かめる心理と同じようなものであろう。

この切断は、取り敢えずは象徴的なもので、具体的には何が変わったとも言いにくい体のものである。が、《もつと自由な人間に》なるために、順吉が大きな一歩を踏み出すであろうことを暗示するものであることだけは感じ取れる。

しかし、『大津順吉』の末尾は、結局、何かが解決されて終わるという形にはなっていない。言わば尻切れトンボのラストである。しかし、そのようにし、順吉の興奮・怒りの感情で終わらせることで、却って見事に描き出されたものがある。それは、主人公がまだ使い道を見出せず、また使いこなせないでいる烈しいエネルギー（潜在的な能力）である。

志賀は、『大津順吉』末尾の時点で順吉をヒーローにしようとしたのではない。志賀は小説末尾のクライマックスで、順吉の急烈な怒りだけではなく、わざわざそれとは相容れない岩井のイメージを出して順吉に笑わせている。志賀は、ことの事件は敗北であり、もともと間違いだったことをはっきり意識していたし、順吉が鉄亜鈴を叩き付ける行為も、根太板を一枚折った以外に何の意味もないこと、それはそもそも「戦い」などではなく、順吉自身《こんなやけらしい様子も余儀なくされてするのはない事（中略）若し側に人がゐたら私はヴァニティーからもそんな事は出来ない》事を《其時の現在に於て、明かに知つてゐ》て、「第二」の（一）で籠の中の鸚鵡が《羽ばたきをして、頭を振り立てながら、わめき立てる其やけらしい様子》と全く同じであること、《如何にも愚かな乱れ方》であることを、はっきり読者に断っているのである。

『大津順吉』は間違っただけの世界・社会と、正しい青年の戦いをテーマとするものではない。矛盾に満ち、複雑な葛藤を抱えた青年が、自分自身とどう付き合うかという内面の問題なのである。

順吉は、巨人にして同時に籠の中の鸚鵡であるが、それは、誇大妄想と劣等感（微小妄想）の間でしばしば揺れ動く青年の心理にそれぞれ対応しているのである。

同様にして、順吉は、《僕はこんな人達とは共に暮せない。》と、父と祖母を共に捨て、家を出るようなことを言った舌の根も乾かぬうちに、《僕には君と重見と千代とがある。実を云ふと、もう一人祖母があると加へたいのだ。》と矛盾したことを言っている。志賀は、その矛盾に気付かないのではない。矛盾している順吉という青年の心の真実を正確に書いているだけなのである。

『大津順吉』は、ストーリー的には完結していないのだが、青年の心を描くという意味では、十二分に完成された傑作であると私は評価する。

【附記】

この後、私は、志賀が明治三十九年から四十五年にかけて、キリスト教から離脱し、作家的成長を遂げて行く過程で、どのようにして無意識的・身体的なものの重要性に目覚め、確信を持ったのか、その経緯を、残された資料からつぶさに跡付けようと考えていたのであるが、紙数の都合から、これは別稿に委ねることにする。

【注】

(1)志賀は、『大洞台にて』（昭和二十三年九月二十五日「読売ウイークリー」）で、『和解』を書く時に、トルストイの『少年時代』に似た場面があって気がさしたと回想していることから、『和解』以前に『少年時代』を読んだことは、確認できる。また、「手帳10」の「手帳後より」に洋書の名前を列記した12番目に《Tolstoi少年時代1.18》とあるのが、明治四十一年の一月十八日にこの本を発注したというメモらしい。『大津順吉』執筆以前に、トルストイの自伝三部作を読んだかどうかは分からないが、その存在を知っていた事は、まず間違いないと言える。

(2)『大津順吉』の原形とも言える小説「濁水」の時には、《第四十一ノ明治四十一年正月より六月、ノ四十二ノ六より 十二月ノ四十三ノチョー兵ケンサで来る、心臓不規則ノ四十何ノ浅草にゐる、ノといふ風に姿を見せなくなつてからの事を示すために章をふやす。》という構想が「手帳12」にあり、相当な長編にし、かつ志賀が明治四十三年六月二十五日に受けた徴兵検査より後の時代まで扱うものにしようという考えがあったようである。

(3)所謂「時任謙作」の主人公名の変遷については、生井知子『白樺派の作家たち』（和泉書院）所収「原『暗夜行路』論」参照。『大津順吉』に先立って、主に明治四十五年二～四月に書かれたらしい自伝的長編小説の未定稿『或る旅行記』は、志賀の実名で書かれているが、これも最終的には仮名に直して、原『大津順吉』連作に入れることを考えていた可能性がある。明治四十五年三月十六日の日記には、里見弴の《家を出て、自叙伝を作らうと思つてゐる決心（中略）は積極的の意味あれば自分は愉快を感じると答へ》《自分の小説「青木と自分」を朗読して聞かせた。》とある。志賀は家を出、《自叙伝》を書くことで自己を確立しようとする里見の決意に賛同し、言わばエールを送る意味で、自分の書きかけの《自叙伝》を朗読して聞かせたのだろう。

(4)「ノート10」の〔ノート後より〕には、《 或る日の事部屋で考へる事を書く、コンデルのオームの事（下略）》という『大津順吉』「第二」冒頭部の構想メモがあり、その直後に《 陸前石の巻住吉町に生れた》以下の覚書がある事から、『大津順吉』完成後、間もなくに書かれたものと推定できる。なお、全集では新旧共に、「コンデル」が、「マンデル」となっているが、汚く書いてあるために、「コ」が「マ」に見えるのであろう。志賀直三の『阿呆伝』によって、志賀家の隣に住んでいた英国人の建築家コンデルの家で鸚鵡を飼っていたことが分かる。

(5)須藤松雄氏は、『志賀直哉の文学』（桜楓社）で、『大津順吉の過去に』を『大津順吉』「第一」のみの題とし、「第二」は大津順吉の現在だと解釈しているが、賛成できない。志賀は作品の篇・章・節などは、一般に「前篇」「後篇」や数字で表わし、題名を付けることはないことと、「第二」が大津順吉（志賀直哉）の現在とは言えないことが理由である。なお、『矢島柳堂』は、虚構を交えた私小説的連作で、各篇に題名が付いているが、それは各篇の独立性が高く、ストーリー的時間的に連続していないためで、『大津順吉』の「第一」「第二」とは同列には論じられない。

(6)『「白樺」座談会』で志賀は、一〇五枚で一〇〇円だったと発言している。枚数は記憶違いと思われるが、一枚一円という約束だったから、少なめに記憶していたのかもしれない。

(7)ただし、須藤氏自身は、後年の著書『志賀直哉 その自然の展開』（明治書院）で『志賀直哉の文学』での見解を撤回し、《女中との恋愛事件という爆発によって、最強の生命力、自我へ飛躍する順吉の姿を造型したのが「第二」である》から短期間に変化することを批判したのは《筋違いの見方だった》とした。しかし、これもまた別の意味で誤っている。また、須藤氏は『志賀直哉の文学』以来、「第一」を順吉の過去、「第二」を順吉の現在としているが、これも誤りであると私は考える。理由は、以下の論を読んで頂ければ自ず

から分かると思う。

(8)志賀は晩年、今村太平との対談「秋日閑談」(『志賀直哉との対話』所収)の末尾で、《それがね。一部と二部に分かれてんだ。あれも一部と二部とに分かれてんだけどね。》と、「『大津順吉』の二部構成は『シルヴェストル・ポーナルの罪』を真似たものである」とも、「偶然の一致である」とも、どちらにも取れるような発言をしている。しかし、両作品を比べてみると、内容は全く異なり、同じ二部構成と言っても、意味が全く違うので、この面での影響関係は無いとするのが妥当であろう。

(9)これは、直接には『或る旅行記』を指すが、数ヶ月後に『大津順吉』を書く時も同じ考えだったと見て良い。

(10)『大津順吉』でははっきりしないが、志賀直哉の心身の不調和は、根本的には、満二歳で父母から引き離され、祖父母に育てられたこと、満十二歳で母を亡くしたこと、そして父との不和、即ち「父なるもの」「母なるもの」との関係の歪みに原因がある。内村鑑三やキリスト教に惹かれた事自体も、理想の「父なるもの」「母なるもの」をそれらに求めたものと言える。志賀がキリスト教を棄てた事も、正義のために戦う文学を棄てた事も、また、意識に対して無意識を、頭に対して身体を再評価するようになったことも、心身の不調和を解決するためであり、深い所では、「父なるもの」「母なるもの」との関係の歪みを治すためだったと私は考える。『大津順吉』で取り上げられている正義に関わる内村鑑三・キリスト教・父は「父なるもの」、愛に関わる絹ウィーラー・千代・祖母は「母なるもの」と関連しており、それ故に作中に登場しているのである。しかし、この点について詳しく述べることは、別稿に委ねることにしたい。

(11)志賀は、明治四十年八月五日の「手帳8」に、「日本では儒教の影響で男女交際が出来ないため、恋愛結婚が出来ないので、階級について自由な考えを持つ青年が、女中と結婚するケースが今後は増えるだろう」と書いていた。『大津順吉』で言う「境遇」は、恋愛を妨げる儒教道徳や階級などを指すのであろう。

(12)例えば、明治四十年七月十一日の「手帳7」には、Cを《抱きすくめて接吻》したいとか、箱根にCを連れて行くと《肉欲》の《誘惑》に負けそうで《危険》だ、と書いているのに、『大津順吉』「第二」の(八)では、箱根に千代を連れて行かないのは《千代を離れて考へる必要がある》としか書いていない。他にも「手帳8」の八月十一日、「手帳9」の八月二十五、六日に《肉欲》への言及があるが、小説には使っていない。

(13)Cが勤め始めた時期ははっきりしないが、志賀が好きになるのにそう長い時間が掛かったとは考えにくい。『過去』では、Cに対する愛を自覚してから打ち明けるまで、幾月か掛かったとしているが、『或る旅行記』によれば、凡そ二ヶ月間誰にも打ち明けず独り苦しみ、或る日Cに友達になってくれと言ったとする。Cに友達になってくれと言ったのが七月十五日であることは日記から分かるから、Cを好きになったのは、五月前半辺りという計算になる。また、草稿で、明治四十年春に当たる(四)に、千代を《近頃来た》女中として出しているのも、大体事実通りなのではないかと考えられる。いずれにせよ、明治三十九年十月末の稲ブリンクリーのダンスパーティーや、類似赤痢の時期までは遡らないと見て、間違いないだろう。

(14)『大津順吉』関連草稿や「手帳12」の「濁水」梗概(四)では「瀧」とされている。「まき」については注(44)参照

(15)「手帳12」の「濁水」のためのメモに、「本郷パラダイス」とあるのがこれであろう。

(16)学校名は阿川弘之『志賀直哉』(岩波書店)による。

入学の時期は確認できないが、『過去』に「一年半か二年で卒業できる簡単な学校だった」とあり、一年半で出たのが四十二年三月末だと仮定すると、四十年十月一日から入学した可能性が考えられるが、一年半と言ってもさほど厳密ではなかったであろうから、確定は

出来ない。明治四十一年一月十三日の日記に《Cへ手紙と十円だけ送る》とあり、『或る旅行記』に、「月三十円貰っていた小遣いから毎月十円ずつCに送っていた」とある事から、遅くともこの一月には入学していたことが分かる。

「手帳9」によれば、志賀は九月九日に父からCを捨てるか家を捨てるかと迫られ、家を出る事にし、九月十四日に年上の友人・岩倉道俱に結婚を反対された時点までは、直ぐにもCと一戸を構え、《午前中三時間》ずつ自らCを教育しようと考えていた。が、その翌九月十五日の「手帳9」には、《手紙の紙と封袋 一円、手帳 十冊 七十銭、万年いんき 五十銭、ノート 十冊 一円、雑記帳 十冊 五十銭、筆、手習の手本、》と書かれていて、これは分量から見て、学校入学を前提にした文房具購入のメモであろうし、『或る旅行記』に《彼は封袋を沢山友達に書いて貰らつて置いて、それを送つてCからの便りを始終受取つてみたが》と出る《封袋》もここに挙がっている。従って、志賀はこの日から、取り敢えずどこかの女学校の寄宿舎にCを入れることを考え始めていたと見て良いだろう。

志賀日記によれば、九月二十四日に住む家を探しに八王子に行っており、『或る旅行記』から、そこにCと住む考えだった事が分かるが、それは必ずしも直ちに同棲するというのではなく、取り敢えずは自分一人で住み、最終的には一緒に住もうというつもりだった可能性が高いと私は思う。

当時の民法では、男は三十歳未満では父母の同意なしには結婚できなかった。そこで、父が認めない同棲を強行して、父との関係を修復不可能なものにするよりも、一、二年は、志賀は家を出て一人で創作に励んで作家としての実績を作り、Cには学歴と教養を付け、一、二年経ったら、二人で父の前に出て、変わらない決意を示して許可を得よう、という考えに次第に変わって行ったのであろう。

しかし、「手帳10」の十月二十三日夜に父宛てに書きかけた書簡によると、その《半月程以前》（十月八日頃か？）祖母の病状が《先づ案ずる迄でゞないといふめあてのついた時に》、愈々家を出ようとした所、祖母が掌を合わせて頼むと泣き、無理に進むなら覚悟があるとまで言った為、志賀は祖母の死期を早めることを恐れて、思い止まる。そして十月二十四日の日記によれば、この日、父へ《二三年或は三四年考へる時を乞ふ手紙を出》し、家を出ること自体取りやめにし、取り敢えず事件は一旦収束されるのである。

(17)明治四十二年七月七日有島壬生馬宛志賀書簡で、《彼女との事は九月中旬にハッキリキメ》ると書いていること、志賀が初めて娼婦を買ったのが明治四十二年九月二十日であること（明治四十三年九月十九日の日記による）、『或る旅行記』で《Cとの関係のある間丁度丸二年間遂に彼は一度も左ういふ場所【細江注・売春窟】に足を入れなかつた》と言っていること、から推定した。

(18)志賀が「濁水」のためのメモの中で、《青年は半丁先を向ふへ行く女学生の袴のヒルガへる其形それだけを根底にして此女を愛する事さへある。ノある時代の青年は女といふ己れと異つたSex全体に対して恋をしてゐるのだ。》（「手帳12」）と書いているのは、恋愛経験が無かった事が、Cとの事件の一因だったと志賀も考えていたことを示唆している。

(19)この「青木」は、青木（のち三浦）直介である。

(20)九月十五日の「手帳9」に、《武者の書いたものに、吾人は世の良心とならねばならぬとある、世の良心は非常に適切な言葉である、》というメモがある。

(21)内村鑑三の『如何にして大文学を得ん乎』（明治二十八年）には、《正義を有の儘に実行すること》《輿論と称する呶々の叫に耳を傾げざること》《富を求めざること》《爵位を軽んずること》が《大文学者の特性として最も貴重なるものなり》とある。ただし、恐らく志賀は、内村鑑三からの直接の影響で自己の文学観を形成したという訳ではなく、若者らしい正義感に、社会全体が道徳を極めて重視していた時代の影響が加わった結果、そうなったのであろう。

(22)新全集に収録された新資料で、《此頃内村先生の所へ行くのをヤメてゐる》とある。

- (23) 『祖母の為に』では、父は《廃嫡してやるから勝手に出て行け》と言ったとする。
- (24) 草稿 の(八)には、田舎の中学教師になる計画について、《田舎へ一人行くといふことにも色々な楽しい清げなイリュージョンがあつた。》と書かれているが、これは、当時、熱心なキリスト教徒であった志賀が、物欲で墮落した都会に対して、人間ではなく神が支配する清潔・清貧の田園という(国木田独歩などにも見られる)キリスト教的なイメージに影響されていたことを指していると思われる。しかし、完成形 では、キリスト教色を薄める都合もあって、この部分は削除された。
- (25) 《低い生活》《高き女》は、有名なワーズワースの詩句Plain living and high thinking (London, September 1802) を直接或いは間接に踏まえているのかもしれない。
- (26) 志賀は、Cの事件の翌明治四十一年四月十七～二十一日付けで有島壬生馬に宛てた手紙の二十日の所で、武者の結婚話について、《武者の兄さんの奥さんは毛利公爵の娘さんださうで武者の細君になるかも知れない人は、川越の元は、セリアキウドの娘さんだといふのは、非常に快よい感じがしないか。それで兄さんも別に不賛成がなく、叔父さんは寧ろ乗気であるといふ、何んとなく痛快だ、若しこれがうまく成立すれば、これからの社会、望む社会にいゝ辻占だ、》と書き送っている。Cに幻滅した後も、志賀は、身分・階級差のない世界を作る為に、自分達が率先して模範を示したいと思っているのである。
- (27) 志賀の日記から、八月四日に箱根に出発し、二十日に帰京したことが確認できる。箱根にCを連れて行くかどうかは、「手帳7」によれば、七月十一日の段階で、既に考え、迷っていたことが分かる。『大津順吉』では、祖母が《千代を連れて行きたい》と言ったことになっているが、これは事実とも虚構とも確認できない。七月十一日の「手帳7」に、《連れて行くものはCかさきかを自分で決しやう》とあるので、最終的には志賀が決めたのであろう。Cにしなかったのは、「手帳7」によれば、性的牽引に抵抗できなくなる危険を考えたためらしい。
- (28) 『片恋』のアーシャは小間使いタチヤナの私生児であり、その事がNにもアーシャにも結婚をためらわせ、不幸なすれ違いの原因になる。『大津順吉』は、『片恋』の半面である「Nとアーシャは思い切って結婚すべきだった」というメッセージだけを取り上げているが、実は『片恋』の残りの半面は、「女中との恋愛は不幸を招く」であり、『大津順吉』を執筆した時の志賀は、そうしたアンビヴァレンツをも、心の奥底で受け止めていたかも知れない。
- なお、『片恋』は、『濁つた頭』で宿の女中が持って来てくれるが、本が汚れ切っていて如何にも汚いので、見る気がしなかったとされる。志賀は『片恋』に悪い印象を持っていたのであろう。
- (29) 全集では新旧共に、「手帳8」のこの箇所が、「余が願を入れたる時には」となっているが、「入れざる時」でなければ前後の意味が通じない。汚く書いてあるために、「ざ」が「た」に見えるのであろう。
- (30) 『大津順吉』「第二」の(三)で、ウィーラーの電話のことを千代に問い質した際と、(八)で順吉が千代に「箱根に連れて行かないことになった」と告げた時は、自室で話した事になっているが、いずれも心が通い合うような仲の良い会話とは言えない。
- (31) 「手帳9」の九月十五日(回想)に、八月《二十七日、朝、武者帰る、早速行く、熱烈でないから意味ありといふ、余一人の問題にあらずといふ》とある。これが『大津順吉』「第二」の(九)で、「熱烈でない」という順吉の言葉に対して、「前後を考える余裕がある方が本統に偉い」と重見が答える会話の元であるが、もともと志賀も武者と同じ考えだったのである。
- (32) 全集では、新旧共にこの箇所が「自分について」となっているが、「身分」でなければ前後の意味が通じない。汚く書いてあるために「身」が「自」に見えるのであろう。
- (33) 『大津順吉』では岩井となっているが、モデルは石井と言うらしい。明治四十一年八月

二十九日発行の「望野」第六号に掲載されたかと思われる未定稿60『今度の小説に就いて』に《炭焼の事は、下の石井に教へて貰つた》と出る。しかし、『大津順吉』での岩井関係の描写が事実通りかどうかは、確認できない。

(34)Joshua Reynoldsの1786-7年の油絵Angel's Headsを銅版画にしたものらしい。

(35)順吉を弱者として提示するという方針は、草稿の時にも、(四)の絹ウィーラーからの最初の電話の所など、一部には見られる。しかし、草稿は、輔仁会大会で乃木・新渡戸を軽蔑する順吉像から始まって居り、比較的強い、自信を持った人物という印象が強かった。(三)でも、《自分は先生に対してはカナリ、ハンプルな心持であつた。然し先生から馬鹿にされてゐる、日本の現代の人々には傲慢な心を持つてゐた。》と書かれている。弱者としてユーモラスに描くことは、完成形で初めて意識的に実行されたと言つて良い。

(36)草稿には、ヴィーナスの件はなかつた。

(37)なお、この後の《医科大学へ行つて居る人が云つた。「毎日学校でアルコール漬の人間を見て居ると、此肉体が其儘復活するとは考へられないからナ」》は、かなり衝撃的な発言である。キリスト教の觀念に被われた眼には見えない死肉・物質・動物としての、生々しい、《アルコール漬の》人体の科学的眞実を(天国へ行く際には切り捨てるべきものとしてではあるが)指摘しているからである。この時点の順吉にはその意味は分からなかつたが、これは無神論に通ずる肉体觀であり、『大津順吉』執筆時の志賀は、こうした生々しい、或る意味ではおぞましい肉体の自然を、正面から肯定する立場に立っていた筈なのである。

(38)「第一」の(四)に、ウィーラーを見て、《二三日前自分の部屋で見た雑誌の口絵とは殆ど同一人と信ずることが出来なかつた。》と言つていることから推定した。絹の母が《五六日前》に娘が《ダンスでもやつて見ようか》と言ひ出したのでパーティーを開いたと言つている事から、電話の時期は、早くても五六日前ということになる。

(39)ウィーラーが名前を挙げた《明光》のモデルは松平春光、《佐藤礼吉》のモデルは加藤泰吉で、いずれも志賀の友人である。

(40)青木は黒木、瀧は女中まき、外山先生は内村鑑三がモデルである。

(41)なお、草稿(四)では、佐々木に書くべき事を考える時にも座布団を枕にしていたが、完成形では、ウィーラーのことを考える時のみにした。この事からも、完成稿を書く時に、志賀が身体・姿勢の使い方に、いかに注意を払つていたかが分かるのである。

(42)旧全集第15巻の「ノート1」P276が、その事を後で想ひ出して記録したものであろう。

(43)草稿に、《「此方の奥様にもうお子さんがお出来になつたんですってネ」かういつて娘は多少悪意のある笑顔をした。自分は速夫が此娘と互いに有頂天になつてゐるといふ噂を聴くと直ぐ他の人と其人は彼の前の恋人であつた。結婚したので其時一寸妙な感じがした。》という一節がある。思うに高崎弓彦は、前の恋人を妊娠させたか、或いは単に肉体關係を持つてしまつたかで、慌てて結婚したのではないか？ ブリンクリーはその事を遠回しに諷しているのであらう。なお、志賀は、『大津順吉』初出では、草稿と同様《奥様にもうお見さんが》となつていたものを、後に《奥様にもお見さんが》に改めた。友人の私事を暴くことを避けようとしたのであろう。

(44)この「手帳5」によれば、志賀は当時、他にもブリンクリーと同じ程度に愛している女が居て、ブリンクリーに会う前日にその女に会いに行く事で、両方の愛を言わば減殺しようとしたと言う。普通の家を愛していて会いに行くということは、当時の社会状況および志賀の状況から言つて考えにくい。従つて私は、この女は当時志賀が好きだつた女義太夫の竹本朝重で、それを寄席に聞きに行ったことをこの様に言つたのではないかと思う。

その証拠としては、明治三十九年十月二十日の「手帳5」に、朝重について《小供らしき働作あり(中略)彼は快活なり 十二三の小供の如くに快活なり(中略)彼は道德律の窮屈なものを嫌ふ、よくいへば自由人なり、従つて、多少Wildな所あれども、自然に發達せる

女なるべし》とあること、同年十一月六日の「手帳5」に執筆済み・途中・予定の作品名を並べた最後に《 牧と朝重》とあって、この「牧」は 草稿（七）に使われた女中まきと推定でき、志賀にとってまきと朝重には共通する所があったと見て良いこと、そして同年十二月二十八日の「手帳6」に、《若し朝重を自分の妻にしたらどうだろう?》という空想を書き留め、続いて 草稿（七）に使われる女中まきとのエピソードをMのこととして書いて、《朝重を恋するなどゝは勿論云へぬが少なからず好きな事は事実だ》、朝重を《見て居る内に何だかM女の当時に甚だ似たるやうに感ぜられる》と書いていることが挙げられる。志賀が愛したCも子供のように無邪気で快活な少女だったらしい事を考えると、まきと朝重も似たタイプで、相当に好きだったらしく感じられる。

(45)プリンクリーの写真については、新全集第16巻月報21を参照されたい。

(46)《第二の趣味と性質》という発想のもとになったと思われるものが、「ノート1」の明治三十八年十二月の所にある。それは、「生まれつきのものである天性と、後天的に作られた性質とが合わさったものが品性で、天性は変化しないが、作られた性質は変化する。よき天性を持つ者は天性に従うのがよい」という論で、これは『内村鑑三全集』第二巻「天才と品性」に書かれている考えを内村鑑三から聞いて、それに基づいて考えたものかも知れない。

(47)『城の崎にて』の鼠の《動作の表情》、そして蜂・蝶?のいずれも傑出した描写は、こうした捉え方の延長線上に現われたものなのである。志賀が「体にも表情がある」という捉え方をするようになった経緯については、別稿を予定している。

(48)脱線になるが、『大津順吉』は、素晴らしい視覚的なシーンに富む小説であるし、志賀の文学全体にも、そういう傾向が強い。しかし、これは決して、単に視覚的・美術的センスの問題ではないと私は思う。身体の意味を発見した志賀が、身体の視覚的側面を活かして使おうとした結果（もちろん、身体の内部感覚は、視覚的でない仕方、活かして使っているのであるが）、視覚的なシーンが非常に研ぎ澄まされた見事なものになったのだと思う。

(49)細かい事だが、草稿（六）では、この《渋谷の友達》は《佐々木》となっており、モデルは黒木三次と推定できる。明治四十年五月十八日執筆の未定稿27『友待つ間』は、《青山の黒木》を訪ねた所、留守だった為、その向かうの原の中に生えている榎の木の根方で帰宅を待つ暇潰しに書いたものであることが、文中に書かれていて、『大津順吉』の《屋敷の裏の広い空地になつてある原》の《木の蔭になつた草の上に横にな》るという描写と一致している。しかし、稲プリンクリーのダンス・パーティーの翌日に、志賀が黒木を訪ねて留守だったという事実があったかどうかは、確かめられない。草稿 では、佐々木を信仰上の問題で批判するために会いに行った事になっているが、プリンクリーのパーティーの時期は、志賀が黒木を不快に思い始める時期より半年以上前なので、この設定はフィクションである。草稿 では、プリンクリーの母と会って気が変わり、赤十字社の方に向かい、渋谷の佐々木を訪ねることになっている。志賀家は麻布三河台町二十七番地、プリンクリーの家は麻布広尾町三番地にあるので、順吉の道順は、志賀家から西の方に歩いて行き、プリンクリーの《家の二三町手前》で母親に出会い、《其儘道を右へ折れて》渋谷の日本赤十字社本社病院の方面に向かう道を歩く内に気が変わって、赤坂区青山南町六の一六の黒木為楨陸軍大将（三次はその長男）の家へ行く、というコースと見て良い。ただし、『大津順吉』には、大津家やウィーラーの家が何処にあるかは明記されていない。

(50)明治三十九年十一月二十一日付け有島壬生馬宛志賀書簡に、「最初、一番下の妹が赤痢にかかり、義母にうつった後、直哉にうつり、軽かったが類似赤痢ということになった。間もなく良くなったが、乱暴したため、三四日以前からぶり返した。しかし、今はもう治った。」とある。また、明治三十九年十月二十四日夜付けの志賀宛武者書簡（『武者小路実篤全集』第十八巻所収）に《五日間籠城おおせつかつたとは御気の毒な話》とある。この二つから、十月二十四日、或いはその前日辺りに、一番下の妹・隆子が赤痢になったが、直哉は

うつつたと気付かず、ブリンクリーのパーティーに出たと推定できる。パーティー直後、同じ日に志賀が不快感をぶちまけている「手帳5」の記述には、病気を思わせる言葉はないが、まだ全く気付いていなかったためであろう。

(51)「手帳12」の「濁水」のためのメモの中に、《 Cその人、独特の香を想ひ起す。》というものがある。また、『白い線』に、『大津順吉』のこの部分を挙げつつ、幼い時から祖父母と一緒に寝ていたから、《私は母の体臭は覚えてゐない。》と書かれている。

(52)旧全集・月報9の志賀家間取図で言うと、この時、順吉(直哉)は、表の門を入れて直ぐ左の石の門から入り、風呂場の横から中庭に入って、縁側から居間に入るつもりで、風呂場の辺りまで来た時に、倉の角を回って白が犬小屋を目指して順吉の方に走って来て、その後を追って千代が飛び出して来たらしい。

(53)今泉容子『映画の文法』(彩流社)P76以下参照。

(54)注(44)に出るまきと朝重も、志賀にとってCや仔犬と同様の存在だったのである。

(55)ただし、日記によれば、ブリンクリーから写真が届いたのは五月十五日、志賀がブリンクリーに送るために写真を撮りに行ったのは五月十六日。そして、五月十二日の日記に《稲より電話かゝりしと》とある事から、写真を下さいと言われたのは、翌十三日辺りと推定できる。完成形では、別々の時期の電話を一つにまとめているのである。

(56)『大津順吉』「第一」の(四)からも分かるように、当時、真面目なキリスト教徒で、嘘をつくことを罪と考えていた志賀が、行く先を家族に偽ったり内緒にしたりして、隠れて出掛けたとは考えにくい。

(57)前にも指摘したように、志賀は明治三十九年十二月十日付けの「手帳5」に、既に《自分は近頃理屈の為めの理屈、不平の為めの不平。気六ヶしい顔をしてる為めの気六ヶしい顔が嫌いになつた》と書いていたが、そういう考えを抱いたからと言って、すぐに完全に変わった訳ではなかった、と見て置く。

(58)『或る旅行記』に、Cが連れ去られた翌日に、志賀が武者の「不幸な祖母さん」を祖母に読んで聞かせる場面がある。そこに、志賀が泣いてしまつて《読むには読んだが祖母には解からなかつた。》《其時分彼等の頭に直ぐ浮かぶ考へで、意味は通じなくても心持は通じてゐるといふ考へから、それだけで彼は手紙を見せなかつた。祖母も声を上げて泣いた。》という所がある。《意味》《理屈》は通じなくても《心持》《気分》は通じる、意識的なものより無意識的なものが大切という信念を志賀が持っていることに、再度、注意を促したい。

(59)「兇行者」という言葉は、『暗夜行路』草稿13の(二十一)に入る直前にも使用例がある。が、そこでは殺人者というのと大差ない語感になっている。

(60)この貸本屋の主人の描写が事実通りかフィクションかは、残念ながら確認する術がない。

(61)旧全集・月報9の志賀家間取図と『大津順吉』を比較すると、間取りは事実通りに書いているようである。事実で言うと、この離れの二階は、東西が四間、南北が二間半の長方形で、西寄りの六畳、東寄りの四畳半の連続する二部屋と、その二部屋に接して西と南にあるL字型の縁側とからなる。六畳の方は、西隣のコンデル家の庭を見下ろす側にも縁側があり、南の道路を見下ろす側にも縁側がある。間取図では分からないが、『大津順吉』の描写から受ける印象では、西のコンデル家側の縁側と六畳の部屋の境目の障子戸に背中を接するようにして、洋式のデスクが置いてあるようである。コンデル家の温室のスティームの油煙が縁側に来て、障子を閉め忘れると机の上にまでやって来るという「第二」の(四)の描写と、ラストで鉄亜鈴がデスクと障子の隙間に落ちることからそう考えられる。階段は四畳半の部屋の北側にある。私の推定通りなら、机に背をつけた順吉と四畳半から敷居を越した所に居る千代との距離は、最大で三メートル余りにもなる。

(62)『大津順吉』では、理屈っぽい「関子と真三」を優れた作品とは評価していない。また、「第二」の(五)の順吉と祖母との議論も、草稿(十)では、《自分の将来の仕事》は《富や名誉に換算されるものではない》、《実世間的の》《仕事》ではないといった正論を言わせていたが、完成形では削除した。武者についても、作中で理屈を言わせないようにし、「不幸な祖母さん」という正義を振り回していない文章だけを採用している。

なお、既に明治四十二年六月二十六日の「手帳12」に、「濁水」のためのメモとして、《議論をナマで出さぬやう注意すべし/事件をJustifyするやうな説明は避くべし》とあることにも注意すべきである。

(63)作中では《翌朝》としか書かれていないが、末尾の八月三十日午前三時半から逆算できる。以下の(イ)～(オ)も同様。

(64)七月十七日の「手帳8」によれば、Cは明治二十三年十二月二十五日生まれで、事件当時は、満十七歳にもなっていない。小学校にしか行かず、この年齢では、《余りに気楽な女》であるのも、やむを得ない所であろう。

(65)注(31)に書いたように、もともと志賀自身、熱烈でない方が冷静さを失わなくて良いという考えだったのである。

(66)ただし、『大津順吉』と同月に発表された『クローディアスの日記』にも、クローディアスがハムレットに対して《事をもつと真正面から行つて呉れねば困る。露骨な裏廻り程醜い物はない。》と思う一節があるから、「陰廻り・裏廻り」は、志賀の潔癖過ぎる性癖と、誰かが自分に対して悪意を抱き、密かに攻撃してくるのではないかと邪推する被害妄想的傾向に根差しているものと考えられる。

(67)今ここで言うべき事ではないが、志賀の場合も、強すぎた《我》を何とかすることで《自由な人間》になることが、以後のテーマになって行くのである。

(68)『大津順吉』では、母の裏切りは、余りはっきりとは描かれていない。これは、広く世間に公表するものの中に、母の悪口を書きたくなかったせいもあるだろう。しかし、「手帳9」九月十五日(回想)の八月三十日の所には、母が直哉の前では今井の妻にCの荷物を渡さないようにしたように言って置きながら、後で直哉に無断でCの荷物を送ってしまったことや、Cの父やCに宛てた母の手紙が、二人の結婚を認めるような内容では全くなかったことを挙げて、《母はCをどこまでも嫁と見るの心なきは明らかなり 罪人のあつかい方なり》と書いている。

(69)紅茶は当時すべて輸入品で、高価だった。植民地だった台湾製の紅茶が国内で発売されるのは大正末年、日本人が普通に紅茶を飲むようになったのは第二次大戦後である。

(70)旧全集・月報9の志賀家間取図で「居間」とされているのが、ここで言う「茶の間」らしい。だとすると、その東隣が母の部屋、北隣が祖母の部屋で、どちらとも襖を隔てているだけだったようである。ここで言う「座敷」はどこかはっきりしないが、「中の間」だとすると、母の部屋の隣だが、壁で仕切られているので、そこで話をして声は聞こえなかったのであろう。或いは、かなり離れた所にある二十畳敷きの「大広間」まで行ったのかも知れない。

(71)「手帳9」九月十五日(回想)では、三十日に《午后ねて居る祖母に》読んで聞かせたとあるが、寝ていたのを庭に連れ出して読んで聞かせたのであろうか？

(72)『祖母の為に』もほぼ同じだが、《既に家まで借りて、もう二三日で出ようと云ふ時》とする点は、フィクションか記憶違いであろう。

(73)『大津順吉』には出て来ないが、「手帳9」九月十五日(回想)の八月三十日の所で志賀は、母はCを罪人あつかいしていると書き、また、母からCの父に宛てた手紙に《こんな事になつたのは皆己れの不行届から》とあることを不快だと書いている。母の「監督不行届」という以上、二人のやったことは、監督して防ぐべき「不行跡」だったことになるからである。

- (74)『大津順吉』では分からないが、旧全集・月報9の志賀家間取図によれば、「茶の間（居間）」の北隣が祖母の部屋である。祖母が起きて来たのは、すぐ隣の部屋で話を聞いていたからであろう。
- (75)「第二」の（七）に、この物置の屋根に作ってある物干場から千代が降りて来る場面があった。また、その章で、「白」の死体が発見されるのも、この物置である。「第二」の（一）にも、兵隊たちが物置の軒下にかけてあった梯子を取り下ろす場面がある。
- (76)「用あらば明日来よ」の「明日」が抜けているのであろう。
- (77)阿部泰山全集第一巻『萬年曆』によれば、この夜は三日月である。
- (78)表の門は、「第一」の（六）と「第二」の（七）に出ている門番が開けてくれたのであろう。
- (79)『或る旅行記』では、八月二十九日に届いた筈の武者の手紙（「不幸な祖母さん」）の文中に既に《痴情に狂つた猪武者といはれる志賀も気の毒である》という一節がある（『大津順吉』の「不幸な祖母さん」にはない）。手紙の実物が見付かっていないため、この言葉が元の手紙にあったかどうか確認できないが、もしあったとすれば、父がこの様に言っていることを、実際の志賀は八月二十六か七日頃に知り、二十七か八日に武者と会った際に話した為、二十九日の武者の「不幸な祖母さん」に出て来た、それを『大津順吉』では、《急烈な怒り》の原因の一つに追加しようと考えて、二十九日の夜に初めて叔父から聞かされたことに事実を改変した、という事になる。
- (80)旅の図書館所蔵の「汽車汽船旅行案内」（明治四十年三月発行、三十九年六月改正時刻表）によれば、当時東京市内を走っていた電車の最も遅い時刻の終電は、22時24分お茶の水発・22時54分中野着のものである。四十年八月当時の時刻表は確認できなかったが、この資料からすると、（十二）で言う《電車のレールをきしる音》は、実際には汽車のものだったのを志賀が電車の音と誤解した、と考えられる。
- (81)「手帳9」九月十五日（回想）によれば、実際には、Cは三十日には本所にて、九月二日頃、銚子を経て小見川に帰されたい。
- (82)先に、《星の多い晩だつたが、割りに蒸暑かつた》とあったことを併せ考えると、この夜は、東京の上空は晴れていたが、千葉方面には雨雲があつて、稲光が見えたのであろう。
- (83)この「空想」と所謂「時任謙作」については、生井知子『白樺派の作家たち』（和泉書院）所収「原『暗夜行路』論」参照。
- (84)ここでも志賀が、声の調子に現われる無意識的・身体的なものを巧みに使用し、自信が無いために強がる無理が、《幅のない声》《甲走つた声》《きい／＼声》になると説明している事に注意を促しておきたい。
- なお、《これらの人々には私は変則な発育を遂げた子供以上には見えなかつたかも知れない。》という部分は、「大人になったら無くなる筈の子供らしい部分・子供らしい空想を残している」が故に、この様にしか評価されない順吉に、実は「子供らしい部分・空想を残している」からこそ優れた価値があることを言ったもので、この小説における子供・イノセンスに対する高い評価と繋がる部分である。
- (85)F・W・パトナムの『解離』（邦訳・みすず書房）P117～9ページに紹介されているパトナム自身の解離体験でも、一方でパニックになりながら、《同時に自分自身の行動を距離を置いて冷静に批評家的に眺めてい》た事が報告されている。
- (86)パトナム『多重人格性障害』（岩崎学術出版社）P29～30参照。
- なお、『或る男、その姉の死』（四十）で、兄が姉の痣を忘れていたというエピソードも心因性記憶喪失と関連しよう。ただし、私見によれば、この姉の《桃色の柔らかさうな耳》にある《青みを帯びたあざ》《に触れてみたい不思議な欲望》は、志賀が満三歳ぐらいの時、母・銀の性器、実際には恐らく肛門（幼児には女性性器というものの認識はないだろうから）に悪戯をしようとした記憶（『暗夜行路』草稿1・27）の変形であり、その近親相

姦的な意味合い故に抑圧され、忘れられたと考えられる。志賀はこの姉を母なるもの（銀・浩・留女）と密かに同一視しており、姉の死因が《悪阻から変化した余病》（三十七）とされていること、姉が死んだ時（三十九）、夫が泣かなかったこと（この二つは銀）、それに（三十九）に出る「蒲団を汚したくないから汚い蒲団に変えてくれ」という姉の発言が、その元になった志賀の明治四十五年一月十三日の夢では銀・浩・留女のどれともつかないような人物の発言であったこと、が証拠として挙げられる。

(87)志賀は、明治四十年六月十三日の「手帳7」に、「女がいじめられて無意識に男を殺し、手についた血を見ても怪我でもしたのかと思う。その内、記憶が蘇って来て、ハッと思う拍子に気が違う。」という夢をメモしているが、これも「解離」状態での殺人である。

(88)拙稿「『黒犬』に見る多重人格・催眠・暗示、そして志賀の人格の分裂 【付録】麻布老婆殺し事件関係資料」（「甲南国文」第50号 平成十五年三月）を参照されたい。

(89)未定稿99（「僕は今晚酒を飲みつゝ」と始まるもの）に、《僕の家は気違ひすぢなのだ》という一節がある。ただし、純然たるフィクションの可能性も高い。

(90)『暗夜行路』草稿7によれば、志賀は十四歳ぐらいから一時的な失語症の発作を繰り返し経験していたらしい。未定稿101「深淵を凝視する人」に失語症が出るのは、自己の体験に根差していると思われる。

(91)《其時に鉄亜鈴が机の上のランプとは五寸と離れない所へ飛んで行つた》という（）内の二度目の鉄亜鈴の描写を読む時、私（細江）は、スローモーションでランプのそばへ飛んで行く鉄亜鈴をじっと見ていながら、ひやりともしない私自身を映像的・感覚的に思い浮かべる。そして、その時の私自身の感じは、視覚的には物の細部まではっきり見えているのに、見ている物事が夢の中の出来事のように遠く感じるという、まさに「解離」的・夢遊病的な状態だと感じるのである。

(92)Eugen Sandow（1867～1925）が解剖学に基づくボディビルディングを開発し、1891年に片手で122kg強のバーベルを頭上へさし上げて世界一の力持ちと称され、世界各地を回ってこのトレーニングの普及に努めた結果、ボディビルディングは世界的なブームを呼んだ。日本でも、古くは「雑録 サンダウの体力養成法に就いて」（講道館の雑誌「国土」第一巻第一号、明治三十一年）などで紹介され、明治四十年六月十九日には、「国民新聞」が「鉄亜鈴で有名な体育家サンドウの健康法（体操療法）が流行」と報じる程に流行していた。

なお、「手帳12」の《下の石井を思ひ笑ふ》というメモは、明治四十二年六月中旬に書かれていて、『大津順吉』で《其後二年程して畳がへの時見たら》と言われているまさにその時に《根太板が（中略）折れてゐるのを見て思い出して、メモしたものかも知れない。

(93)これらは、生井知子「志賀直哉と父」（『白樺派の作家たち』）で、ハバードの『スカイ・ジャッカー』を引いて述べられている事とも繋がるものと思う。

(94)この手紙をこの時、取り戻そうとしたのは、「濁水」の執筆を計画していたからである。